

---

# いつもこのセカイで

司城 遥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつもこのセカイで

### 【Nコード】

N9175K

### 【作者名】

司城 遥

### 【あらすじ】

苦手な事もない。

得意な事もない。

主人公である僕こと吉岡直人の視点で描く、画家を目指す幼馴染との関係を中心にした青春ストーリー。

主人公とその友人たちが過ごす、変わり映えのない毎日。

変化に悩み、壁に苦しみ、成長を続ける彼らが紡ぐセカイとはどんなものなのだろうか。

ニコニコ動画に『もきち氏』が投稿中の同名楽曲を基にした作品  
です。(オリジナル作品です)

## 【設定資料（仮）】（前書き）

簡単にはありますが、設定資料を作成しました。

ストーリー中で説明している部分と被る部分が多いですが、あわせ  
て見て頂ければ幸いです。

## 【設定資料(仮)】

### 【人物設定(第二十四話時点)】

吉岡 直人 (よしおか なおと)

主人公の高校二年生。(作中では「僕」)

得意な事も苦手な事も特に無しと言う、全ての事において平凡な存在。

性格は温厚。悩み事などがあると一人で考え込む事が多い。

ヒロインである野川秋乃とは、幼少時代からの付き合い。

折原、坂本とは高校一年時から同じクラス。

野川 秋乃 (のがわ あきの)

本編ヒロイン。高校二年生で主人公と同じクラス。

中学時代にたまたま県の絵画コンクールに入賞、それ以降本格的に絵を描き始める。

周囲の期待から来るプレッシャーに悩んでいる。

本当に絵を描く事が好きかどうかは、本人は多くは語らない。(一

応、将来の夢は画家になる事)

性格は物静かで温和。(主人公曰く、幼少時は明るく活発な子だった)

美術部に所属している。

折原 陸哉 (おりはら りくや)

主人公と同じクラスの友人。悪友とも。

性格は只管に前向きで、常に主人公グループのムードメーカー的存在になっている。

悪乗りしてしまう事も多々。状況に応じて口調が変わり、色々なキヤラに変化する。

家庭的な女性に魅力を感じるらしい。(本人談)  
陸上部に所属し、短距離走の選手である。  
誕生日は11月14日らしい。

坂本 理央 (さかもと りお)

主人公と同じクラスの友人。グループの姉さんの存在。  
性格は明朗快活、やや短気なところアリ。  
悪乗りする折原や主人公に、容赦なくゲンコツを見舞う。  
折原と同じ陸上部に所属し、走り幅跳びの選手。  
本人曰くガサツだが、料理は得意で案外家庭的な一面もある。

坂本 紗枝子 (さかもと さえこ)

坂本の姉。東京の大学に通っている。大学三年生。  
ボーイッシュな坂本とは違い、非常に大人しい。が、時々毒を吐く。  
外見は家庭的(折原談)だが、実は料理が苦手。

船木 一穂 (ふなき かずほ)

主人公、秋乃の小学生時代の担任教師。32歳。  
見た目はすらつとしていて綺麗。(主人公談)  
秋乃が当時お気に入りだった公園への見回りを日課としている。  
主人公の口癖である「無理すんなよ?」は、彼女からの受け売りである。

上条 茜 (かみじょう あかね)

陸上部所属の一年生。折原と坂本の後輩。

短距離の選手で、折原と一緒に練習している。

大人しく、坂本とは正反対の性格。

折原に好意を寄せている。坂本の恋敵。

第二十四話登場。

【いつもこのセカイで：歌詞】

小説「いつもこのセカイで」は、ニコニコ動画で楽曲を公開している「もきち氏」の

同名楽曲を基に執筆した物です。そこで、設定資料として楽曲の歌詞を掲載します。

読者の皆様に、より「いつもこのセカイで」の世界観を知って貰えれば幸いです。

いつもこのセカイで 作曲／編曲：もきち 作詞：でこ

何気なく瞳に 同じものを映す

通いなれた道に 並ぶ影を落とす

そんな小さなワンシーンでさえ 掛替えのない 僕のセカイ

ありふれた 日常いじもに まだ見ぬものを探す

流れゆく 時間に 君との日々を 刻んで

二人出会ってからの日々は 風のように過ぎたね

急ぎ足で二人で紡いだ まだ小さなセカイでも

強く長く紡ぎ繋げていこう

心配要らないよ

君の事大切にすから

隣並んで見上げた 空は少し違う

限りないキャンバスに 二人の夢を描いて

二人で歩き出した道は まだはっきりと見えない

それでもいいよ二人の道のり そう、そのものがこのセカイ

強く遠く歩き続けていこう

心配要らないよ

君の事信じているからね

いつも通りの二人でいいよね このセカイは続いている

強く長く紡ぎ続けていこう

不安は置いていこう

君の事幸せにするから

急ぎ足で二人で紡いだ このありふれたセカイでも

強く長く描き続けていこう

いつも通りの色に

二人の色輝かせて行くから



## 【第一話】

気がつくとも彼女はいつも絵を描いていた。

いつからだろう、彼女が絵を描き始めたのは。

いつからだろう、彼女があまり自分の事を話さなくなったのは。

いつからだろう、彼女の気持ちが見えなくなったのは。

疑問は沢山ある。だけど僕は、絵を描いている彼女の姿が好きだった。

「また描いてるの？」

僕が教室のドアを開けると、彼女はいつものようにキャンバスとにらめっこをしていた。僕の存在に気づいて少し振り向いた彼女は、軽く右手を上げて挨拶するとまたキャンバスとのにらめっこに戻ってしまった。

彼女の名は野川秋乃。僕の幼馴染だが恋人ではない。彼女は昔から絵が上手かった。中学生の時に県のコンクールで金賞を取って、本格的に絵を描き始めたのはそれからであった。

「次のコンクールへの応募作品？」

「そうんだけどねえ」

僕の質問に、彼女は気のない返事を返してきた。見たところ、何を描くかも決まっていないうた。

「テーマは自由って言われると、すごく困る。自由って何？」

「自由ねえ……。なんかこう、うまく言えないけどパーッと自分の世界を表現すると言っか何と言っか？」

彼女のため息が聞こえてきた。

「パーッと表現出来たら楽なんだけどね」

うまく答えを導き出せない僕は、黙り込むしかなかった。

「ついて来て」

彼女はそう言って立ち上がると、スタスタと教室から出て行った。

行き詰ると彼女はよく屋上で景色を眺める。今日もきつとそうなのだろう。僕は軽く返事を返すと、そのまま彼女の後を追って教室を出た。

「直人、早く」

僕は呼ばれるままに彼女の隣に座った。

「今日は風強いね」

「そうだなあ」

「もうすぐ夏だけど、どっか行ったりしないの？」

「特には予定無し」

取り留めの無い会話が続く。普段は自分から喋る事の少ない彼女だが、精神的に落ち着かない時などはその限りではなかった。こういう時はとりあえず話を聞いているのが良い事を僕は知っていた。

「直人はさ、悩みとか無さそうよね」

「俺？俺だつてまあ色々あるっちゃあると思う」

「例えば？」

「・・・色々だよ、多分。自分探しの旅にでも行って来るかな」

彼女はくすりと笑みをこぼした。それからしばらく意味の無い会話を続けた後、僕と彼女は再び教室へと戻った。

「とりあえず、少し考えてみるといいんじゃないかな」

「そうする」

「そんじゃ、俺は先に帰るよ」

「うん、また」

僕が教室を出て行く時、彼女は振り返りもしなかった。そんな彼女の背中に「無理はするなよ」と僕は小声で呟いた。

帰り道、僕は色々と考えていた。秋乃は昔は自分から何でもよく喋る元気な子だった。おてんばと言ってもいいくらいだった。

絵を描き始めてから、秋乃は少し変わってしまった様に思えて仕方が無い。あまり喋らなくなり、自分の感情を表に出す事も少なくなった。大人になったと言ったらそれまでののだろうか、そうだとしたら少し寂しい気もする。

彼女も変わったが、僕は一体何が変わったのだろうかと真面目に考えてみた。思い付く所はほとんどない。強いて言えば一人称を「僕」から「俺」に変えた事くらいだろうか。僕の中では別に「僕」のままで良かったのだが、なんとなく格好もつかないし、周りも皆「俺」だからとりあえず「俺」にしてみた。未だに違和感が抜けていない現実がある。

「おい、吉岡！」

色々と考えを巡らせていた僕の背後から、不意に声が響いた。

「なんだよ、折原か。部活終わったのか？」

振り返ると、僕のクラスメートの折原陸哉がそこにいた。ジャージ姿で、頭にタオルをバンダナのように巻きつけていた。折原の部活帰りのいつものスタイルだった。

「ああ、さつき終わった。野川はどうしたんだよ」

「絵で忙しいんだとさ。まだ描いてるっぽい」

「ふーん、こんな時間まで大変だな」

僕から見ると、運動部に所属している折原も同じくらい大変だと思った。最近暑くなってきて練習も大変なのだろうが、持ち前のタフさからか、あまり疲れている様には見えなかった。

「吉岡は部活やらねえの？帰宅部とかでも入ってた方がいいだろうに」

「帰宅部に入っても帰宅するだけなら意味無いんじゃないか」

「いや、ほら、内申とかさ。お前も進学希望だろ？」

「・・・どうなんだろうなあ」

「何だよ、やる気ねえなあ」

折原は僕の背中を勢いよく叩いて笑った。

折原もバカそうに見えて、実は色々考えているんだなあと思った。お前もつてことは、折原は進学希望なのだろう。何かやりたいことでもあるのだろうか。僕の今の状態は、僕の答えた内容そのまま。自分のやりたい事なんて、殆ど考えた事が無いからだ。言ってしまう、進学したいかどうかすらよく分からない。ただ、高校を出て

そのまま働くつてのも想像できないから、何となく進学するのだからうなどは思っていた。

「うちの部はいつでも歓迎だぜ」

「折原と暑苦しい青春をするのはちょっと・・・」

「つれない奴だなあ」

「つられるものか」

下らないノリと下らない話。折原とはいつもこんな感じだが、何だかんだでこういう下らない関係も僕にとっては心地良かった。

## 【第二話】

今朝も軽快に自転車走らせる。のんびりと歩いて登校する他の生徒たちを尻目に、僕は朝の心地よい風を感じていた。すぐ目の前の曲がり角から、いつもの様に折原が現れた。

「おつ、吉岡いい所に来た！乗せてけよ」

僕の返事を待たずに、自転車の後ろに折原が飛び乗った。

「お前いつも俺が来る時間見計らって現れるだろ」

「気にすんなつて、ほれ休まず走れ」

一気に軽快さを失った自転車の後ろで、折原だけはご機嫌だった。僕にとつては朝からとんだ重労働だが、日課と化している今では何とも感じなくなっているのが我ながら恐ろしかった。

少し走った所で、見慣れた後ろ姿が二つ見えてきた。秋乃と、友人の坂本理央さかもとりおであった。

「おつす」

折原が声をかけると、二人は揃ってこちらを振り返った。

「おはよう、朝から元気いいね」

秋乃は少し疲れたような表情でそう言った。昨日あの後遅くまで描いていたのだろうか、見たところ寝不足であるような感じだった。

「あー、折原また吉岡に乗せてもらってる」

「いつものことだからいいだろ。お前も乗ればいいじゃん、ほれ」

坂本の言葉に反応し、折原が片側を開ける。まるで曲乗り状態だ。僕はバランスを保つので精一杯だった。

「重いから嫌だつてさ。ほれ、行くぞ吉岡！」

まるで馬にでも乗っているかのように、折原が僕の足をパシパシと叩いた。

「は！？重い！？私太つてないし！待て折原ア！」

背後から坂本の怒声が飛んだ。

「俺は言つてない！折原だからな！」

振り返らずに言い訳を叫ぶと、僕はまた自転車を走らせた。毎日こんな感じで折原のお守り役になってしまっていた。

「よっしゃ、ご苦労であった」

「お前、たまには代わりに運転しろよ」

「俺、自転車乗れないもん」

「運動神経抜群なのに、何で自転車乗れないんだよ」

「知るか！」

折原は冗談抜きで自転車にだけは乗れない。スポーツ関連なら何でもそつなくこなす折原の唯一の弱点と言ってもいいだろう。正直、僕の自転車の後ろに乗っていられるバランスがあるなら、あとはペダルをこぐだけでいいのではないかと思った。僕たちはくだらないやり取りをしながら教室に向かった。

朝のホームルームも終わり、本格的に退屈な時間が始まる。ただ座って話を聞いているだけの授業はかつたるい。かと言って体育やら調理実習が好きかと言うとそうでもない。苦手な科目があるわけではないけれど、これといって好きだと言えるものも無かった。我ながら無趣味と言うか、無関心もいい所だなと思いつつ退屈な授業時間を過ごしてゆく。ふと窓の外に目をやった。今日も青空がきれいだった。

「あー、やっと終わった。朝からずっと座ってるだけの授業とか地獄過ぎるんだが」

折原は、やっと解放されたと言わんばかりの緩んだ表情で大きく伸びをした。僕よりも折原の方が、体を動かしていないと駄目な種族だろうから、余計に辛かった事だろう。確かに今日は実技科目が何もなく、一日座りっぱなしだった。ちなみに唯一の実技のはずだった体育の時間は、教師が出張の為に自習になってしまった。あの時の折原の死んだ魚のような目は忘れない。正直、僕としてもいつも以上に退屈な時間であった。

「ところで吉岡、ゲーセンいかな？昨日新作入ったらしいんだ」

「部活どうするんだよ？」

「でかい声出すなって。こつそりだよ、こつそり。いつも真面目にやってる俺が今日くらいサボっても罰は当たらない・・・」

折原の話を遮る様に、鈍い音が響いた。坂本のゲンコツが折原の頭にヒットしていた。そしてそのままヘッドロックの体勢に持ち込まれていた。

「思いつきり聞こえてるんだけど・・・？さつさと来い！大会近いんだから！」

「・・・吉岡が！吉岡が大きい声出すから！」

折原は恨めしそうな顔をしながら、坂本に引きずられて行った。

僕は何となく申し訳なくなり、今度の休日は折原にとことん付き合つてやるうと心に堅く誓った。

折原も連れ去られてしまったし、ゲーセンに一人で行くのも気が乗らないので、僕はいつもの様に美術室に足を向けた。昨日の秋乃の感じだと、考えがまとまるまでそつとしておいた方がいい事は知っていた。しかし、朝の寝不足な様子を見ると何となく心配になってしまった。

そつと美術室のドアを開ける。しかしそこに秋乃の姿はなかった。昨日はまだ真っ白だったキャンバスに、少しだけ下書きがされていた。

「少しはまとまったのかな」

安心したかのように独り言が漏れた。

「直人、来てたの？」

気を緩めた瞬間に背後から響いた声に、僕は驚いてしまった。

「あ、ああ、今来たところ。どこ行つてたの？」

「いや、その、ちょっとお手洗いに・・・」

少し恥ずかしそうに秋乃が答える。余計な事を聞いてしまったと思つた。

「少しだけ構想がまとまってね、さつきから描いてたんだ」

僕が質問しようとした事の答えを、秋乃が先に答えた。昨日の表情とは違って、少し気が休まったような優しい微笑みを見せてくれ

た。

「良かったじゃん。朝から寝不足っぽかったから気になってたけどさ」

「そんな眠そうに見えた？」

「めっちゃくちゃ眠そうだった」

僕たちはそんな話をして笑いあった。

基本的に僕は彼女の絵の事には口を出さない。と言うよりも口を出せない。僕は絵の事なんか何もわからないし、素人視点ではかえって混乱させてしまうだろうから、聞かれた時以外は特に何も意見は言わない様にしていた。

「今回はどんなテーマで描く事にしたの？」

「んー、内緒。まだ完全にまとまってるわけじゃないしね」

「ふーん」

話しながらでも、少しずつ秋乃の手は動く。振り返らずに話すのはいつもの事。僕が秋乃の背中に向かって話しかけるのもいつもの事だ。作業の邪魔になっていなければ、それでいいのだ。

「今日はさ」

「ん？」

「帰り一緒に帰ろうかな」

「じゃあ待ってるよ」

最近秋乃と一緒に帰る事など少なかった。彼女が忙しいと言う事もあったが、僕が気を遣って先に帰る事が多かったからだ。彼女からの申し出が、僕は少し嬉しく感じた。

それからしばらくの間、彼女は黙って絵を描いていた。

「俺、ここにいていいの？」

「うん」

集中が必要な作業だが、どうやら邪魔にはなっていない様だった。気が散るようなら図書室にでも引っ込んでいようかとも思ったが、彼女の筆運びを見てみると、何となく楽しかった。何を描いているのか、何を表現しようとしているのか、僕には何もわからない。だ



が、殆どの人は彼女の作品を完成した状態で見ることがない。完成に向かう経過を見る事が出来るのは僕だけではないだろうか。そう思うと嬉しくなってくる。ぜひとも良い作品を完成させて欲しい。僕はそう願うばかりだった。

### 【第三話】

秋乃が絵の下書きを始めてから二週間が過ぎた。僕にとっては今日もいつもと代わり映えのない退屈な時間が始まる。僕がそんな日々を送っている間に、周りは少しずつ変化が起こり始めている。

折原と坂本は部活の大会が近づき、本腰を入れて練習に励んでいる様だった。いつもは元気の塊の様な折原も、若干の疲れが見え隠れする。この前の週末にゲーセンでひたすら遊んでからは、ゲーセンのゲの字も折原からは出てこなくなつた。ただの馬鹿だと言うイメージしかない折原に対しても、こういう時の集中力には感心を覚える。それと同時に、何をするでもなくただ日々を過ごしている事が、少しだけ申し訳ないようにも思えてきた。

秋乃はあれからも毎日美術室に籠つて絵を描いている。日によっては大分遅くまで作業を続けているようだった。僕も毎日美術室に通い、秋乃と少し話しては帰る毎日の繰り返しだ。内容のある話は殆どしない。それでも彼女にとって少しでも気分転換になるのなら、僕の存在意義もあるというものだ。そんな多少身勝手な思いを抱きながら、今日も彼女がいる美術室へと足を運んだ。

「秋乃、入るよ」

「どうぞ」

一言断りを入れて美術室に入る。彼女は落ち着いた静かな声で迎え入れてくれた。美術室は唯一の美術部員である秋乃以外は、放課後に使う生徒は誰もいない。彼女専用のアトリエと言っても過言ではないだろう。

僕はいつものように彼女の後ろに椅子を置いて座る。窓の外から吹き込んだ緩やかな風に、彼女の後ろで束ねた髪がふわりと揺れた。彼女の柔らかないい香りが舞い込んで来た。同時に、その温かな風で夏が近づいている事を改めて実感した。

絵は少しずつ完成に近づいていた。それに伴って、キャンバスに

向かう秋乃の表情も真剣そのものになっていた。二週間前に、困った顔をしてキャンバスとにらめっこをしていたのが嘘の様だ。

僕はそつと後ろから彼女の世界を垣間見る。この小さなキャンバスの中に、彼女が普段あまり表に出さない感情や表現したい事が所狭しと詰まっているのだ。彼女自身の分身とも言えるかも知れない。そんな彼女の絵が出来上がって行くのを見る事は、僕にとって、ささやかな幸せの時間でもあった。

色々と妄想にも近い考えを巡らせながらボーっとしていると、彼女が僕の顔を不思議そうに覗き込んでいる事に気づいた。

「何か変な所ある？」

「え？」

「じつと絵を見てるから、何か変な所があるのかなって」

「いやいやいや。最初の段階から見てるから、もうすぐ完成なんだなあってしみじみとね」

「変なの」

彼女がくすりと笑みをこぼした。急に話しかけられた事に驚いた僕は、確かに変だっただろう。自分でも何を言ってるのかわからなかった。

気持ちを落ち着けるために窓の近くに立って風に当たる。折原が一生懸命走っている姿が目飛び込んで来た。短距離走の選手に選ばれている折原にとっては、今がまさに正念場だろう。本人の話では、思う様なタイムが出なくて苦労しているらしい。大会でいい結果が出たらゲーセンでも奢ってやろう。僕はそんな事を思いつつ、ひたすら走る折原に心の中でエールを送った。

「絵が完成したらさ、お願いがあるんだ」

「ん？」

背後から秋乃の声が飛ぶ。振り返ってみると僕の方に視線は向けず、キャンバスを見つめたまま話していた。

「自転車の後ろに乗つけてよ」

「はい？」

「折原君が毎朝乗っかってて楽しそうだから」

「はあ」

予想もしなかった言葉が飛んできた。僕にとっては毎朝の日課となっている折原配達が、そんなに楽しそうに見えたのだろうか。まあ確かに折原は自転車の後ろに乗っかっているとヤケにテンションが高い。・・・楽しいからなのだろうか？

「オツケー？」

秋乃はキャンバスから視線を外し、僕の方を見た。

「ああ、いいけどそんなに楽しいもんじゃない・・・とは思っけだなあ」

「いいよ、楽しそうだから」

「まあ、いいけどさ」

絵が完成したら自転車の後ろに乗せる。変な約束事が生まれてしまった。どうせならもっとお願いらしい事をお願いすればいいのになあと心の中で思いつつ、僕は承諾した。折原だったら、大会で成績残したら焼肉をたらふく奢れとか朝までカラオケに付き合えとか多少の無茶を言っけきそうなものだが、それに比べたらなんともかわいい要求だなあと思った。

この日も秋乃の作業が長引きそうだったので、僕は先に学校を出た。グラウンドに目を向けると、折原はまだ走っている。坂本もどこかで練習している事だろう。

僕は自転車に飛び乗ると、そのまま一気に加速して校門を突破した。秋乃、折原、坂本。彼らに比べると僕の世界はまだまだ狭い。やりたい事、打ち込める物、将来への夢、これから何か見つかるのだろうか。夏が近い。僕の周りではたくさんの方が動き出し始めていた。

#### 【第四話】

秋乃の絵は昨日無事に完成した。描き始めてから丸一ヶ月くらい過ぎていた。さすがに昨日の秋乃は少し疲れている様な表情をしていた。それでも、彼女にとってベストな物を生み出す事が出来たなら、それが一番良い事だと思った。細かい事を聞くのは結果が出てからでもいいし、今は集中力を使い切ったであろう彼女が、少しでも安らぐ事が出来るならそれでいい。どうせまた、彼女にとって忙しい日々が始まる事はわかっていいるのだから。

僕は秋乃との約束を果たす為に、彼女の家の近くまで迎えに来た。朝と一緒に登校する事など、いつ以来だろうか。少なくとも高校に入ってから、これが初めてだ。まあ、毎日のように折原にこき使われている現状では、仕方のない事なのだが。

「おはよう」

通学路を歩く秋乃の姿を見つけて、声をかける。彼女は軽く手を振って応じた。

「ほら、乗れよ。約束してただろ」

「あ、忘れてなかったんだ？」

「ああ、気をつけて乗れよ」

秋乃は嬉しそうに自転車の後ろに飛び乗ったが、うまくバランスが取れないようでフラフラしている。

「怖い怖い！折原君は簡単そうに乗ってるのに」

「あいつはある意味プロだからな。しっかり掴まっとけよ」

僕はいつもの様に自転車を走らせた。折原を乗せるよりもかなり軽いせい、一人で走っている時の軽快さとさほど変わらない。スピードが上がっていく。秋乃は僕の肩をしっかりと掴まえていたが、やはり乗り慣れていないせいか緊張が伝わって来た。

「大丈夫か？」

「た、多分大丈夫」

弱々しい声が聞こえる。

しばらく走ると、いつも折原と合流する交差点が見えてきた。

「吉岡！乗せてけ・・・ああ？」

折原がきよとんとこちらを見つめる。隣には坂本の姿も見えた。

どうやら途中で合流して一緒に歩いてきていたようだった。

「悪いな。今日は貸切なんだ」

「ごめんね、折原君」

「野川が！野川がひどい事を！そこ俺の席なのに！特等席なのに！」

思い思いの言葉が飛び交う。そんな中坂本は僕たちのやり取りを見ながら笑っていた。

「折原君に悪いことしたかな？」

「いいんだって折原は。毎日こき使われてる俺の身にもなれっての」

「今日は私がこき使ってる事になるのかな？」

「秋乃は軽いから問題ない」

「風、気持ちいいね」

「ああ」

作業から解放された秋乃の声のトーンは、普段より少し明るくなっていた。描き終わったから終わりと言う訳ではないのだろうけど、結果が出るまでの僅かな時間の間に、少しでも気分転換が出来れば良い事だと思う。

ただでさえ秋乃は色んな人の期待を背負っている。彼女の周りに存在するオトナたちには、期待が大きければ大きいほど、それがプレッシャーとして彼女に強く押し掛かると言う事はわからないだろう。いつもそばにいる僕は、彼女の気持ち少しずつ理解出来るようになって来ていた。きっと彼女は、いつも色々なものと戦っている。その戦いに、僕が立ち入る事は出来ない。そっと思守っていくしかないのだ。

「絵、完成して良かったね」

「うん、なんとか間に合った。少し休みたい気分」

「ゆつくりするといいよ。結果も気になるだろうけどさ」

「結果はね、自然についてくるものだから気にしない事にしてる。考え始めると疲れちゃうし」

「それでいいと思うな」

そんな話をしている間に、学校が見えてきた。またあの門をくぐれば、退屈な時間を過ごさないといけないなくなる。思ってみれば秋乃と色々話したのは久しぶりな気がする。絵を描いている間は、殆どまともに話す時間はなかった。そう考えると今こうして秋乃と話している時間が貴重に思えてきた。

「あー、緊張した。何だか疲れた・・・」

秋乃がほっとしたような表情で自転車から降りる。ずっと緊張しながらしがみ付いていたのだろう。そりゃ、疲れるのも仕方がないと思った。

「期末試験近いから頑張らないといけないよね」

秋乃がため息混じりにそんな事を言った。

「嫌な事思い出させるなよ。せつかく忘れてたのに」

「私も嫌だよ。絵の方が手一杯だったから、何も勉強してないし」

「あー、面倒だなあ・・・」

「直人は夏休みにどっか行ったりしないんだっけ？」

「死亡フラグを立てるのはごめんだ！何も語らないぞ。予定を入れると、きつと赤点とって追試と追加課題で・・・うわあああああ」  
頭を抱える僕を見て、秋乃は笑っていた。

期末試験と言う逃げようのない現実と、一年で一番楽しみと言っても過言ではない夏休みが迫る。死亡フラグも何も、正直な所何の予定もない。単純に休みと言う事が嬉しい。授業授業の繰り返しの日々よりは、何も予定がなくても休日の方がいい。そうに違いない。僕は来たる期末試験に向けて、いつもより少しだけ気合を入れる事にした。授業中に居眠りをする時間を、少しだけ減らしてみよう。そう心に決めた。

## 【第五話】

期末試験が週明けに迫っていた。勉強らしい勉強は殆ど出来ていない。だが、やるしかないのだ。追試と追加課題だけは何としても阻止したい。この週末は煩惱を全て捨て去って勉強に集中しようと思った。他のクラスメートが続々と帰宅する中、僕は自分の席で決意を固めていた。

「吉岡、月曜からの期末の勉強進んでる？」

机に突っ伏して考え込んでいる僕に、坂本が声をかけてきた。

「・・・ぜんっぜん。坂本は？」

「私も全然なんだよね。折原も死にかけてる。だからさ、今日これから図書室で皆で勉強会しない？」

「勉強会？」

「そそ。わからない所とか教えあったりとかさ、皆でやれば何となくいけそうな気がするじゃん？」

いいね、坂本。よく言った。そうだよ、皆でやれば多分何とかなる、多分・・・。僅かな希望でもないよりはマシってものだ。僕は二つ返事で承諾した。

「秋乃と折原はもう図書室行ってるから、吉岡も荷物拾ったらおいでよ。」

坂本は僕にそう告げると、荷物を担いで教室を出て行った。

「吉岡、こつちだ」

僕が図書室に入ると、折原がぶんぶん手を振って声を上げた。教科書とノートを開いて、さらには問題集まで開いて机に向かう折原の姿は、とても違和感にあふれていた。

「俺だつて勉強する時はするんだからな。しないと夏休みが地獄になる・・・。」

僕の心の声が聞こえてしまったのか、折原はそんな独り言を呟いた。



「何からやる？」

秋乃が机に色んな教科の教科書を並べながら尋ねる。

「とりあえず、月曜は何だっけか？」

「数学と英語」

坂本の問い掛けに僕は即答した。

「最ッ悪・・・」

坂本がぐったりとうなだれた。僕も数学と英語は好きじゃない。気持ちは良くわかった。

「じゃあとりあえず数学からやっていこうか」

秋乃の提案に一同は頷いた。

基礎の基礎から、徐々に問題を解いていく。この辺りは特に問題は無さそうだ。折原が早速顔をしかめているのが気になるが、スル―しておく事にしよう。

「むむむ・・・」

「折原君、ここはねえ、こうしてさ・・・」

さすがは優等生の秋乃だ。教え方がうまい。折原でも理解出来る様に教えるなど、僕には到底無理な話だ。坂本は横から秋乃の話を聞きながら、自分でしっかり理解しているようだった。元々坂本は部活が忙しいから勉強出来てなかっただけであって、折原みたいに理解力が無いわけではないので何とでもなると思った。

勉強を始めて一時間くらい経過した時、折原が勢いよく机に頭突きをかました。

「もう駄目じゃあ。頭がパンクする」

「つ、詰め込み過ぎたかな？」

殆ど折原専任で教えていた秋乃が、苦笑しながら机に倒れこんでいる折原を見つめる。

「野川の教え方はわかりやすいけど、残念ながら俺の記憶容量の限界を超えてしまったようだ」

「まだ半分だろうが！」

坂本が折原の頭を教科書の角の部分で叩いた。それでも折原は微

動だにしない。本格的に壊れかけているようだった。

「ほら、起きないと絞めるぞ」

坂本が折原にヘッドロックを決める。それでも折原は動く気が無い。

「あの、坂本さん」

「え？」

「当たってます」

「え？」

「・・・胸が」

鈍い音が図書室に響いた。周りで勉強している生徒が驚いて振り返るくらいの音だった。

「死ぬっ！エロ原！！死ぬ！！」

「お、おおお・・・」

坂本の渾身のゲンコツを食らい、まるで動かなかった折原も悶絶していた。坂本は顔を真っ赤にしながら自分の席に戻った。秋乃と僕はそんな様子を見ながら苦笑していた。

色々ありながらも勉強会は進む。坂本は未だにご機嫌斜めだ。折原とは目も合わせようとしていなかった。数学の勉強は一通り終えて、英語の勉強に取り掛かっていたところ、再び折原が壊れた。

「ねえ・・・なんで俺たち日本人なのに英語を勉強しないといけないの？俺は日本を愛している！だから英語は使いたくない！アイラブジャパン」

「思い切り使ってるだろうが・・・」

僕はもう突っ込む元気も残っていないかった。折原もそろそろ本格的に限界なのだろう。部活で走りまくった後よりも、心なしかやつれて見える。そこまで勉強が嫌いなのか、お前は。

「はあ・・・」

人が少なくなってきた図書室に折原の長いため息が響く。そして遠い目をしながらとんでもない事を呟いた。

「俺、この試験で赤点じゃなかったら皆と一緒にキャンプに行くん

だ・・・」

「やめろ、死亡フラグだからそれ！取り消せ、取り消さないと死ぬぞ！赤点だぞ！追試だぞ！追加課題だぞ！」

突っ込む元気が残っていた。さすがにここまであからさまな死亡フラグを立てられては黙っていられない。僕は折原の首を絞めながら左右に揺さぶった。

「直人、折原君が違う意味で死んじゃう」

秋乃が笑いを堪えながらそう言った。

「でも、皆でキャンプっていいね」

坂本が折原の話に乗った。どうやらさっきの件の機嫌は直ったようだ。

「皆どうせ特に予定ないでしょ？私と折原は部活で時期は限られるかもだけど、秋乃と吉岡はオツケーっしょ？」

坂本が早口でそう尋ねる。どうやらなかなかの乗り気のようだ。

「私は夏休みの間は特に何も無いし、いいよ」

「俺も暇人だからオツケー」

「よし、決まりだね。ほら、死亡フラグにならないようにしっかりと勉強しろ、折原」

「・・・あうあう」

折原の立てたフラグは、思いも寄らない方向に発展した。キャン普なんて、そう言えば一度も行った事がなかった。何も無いだろうと思っていた夏休みに、予定が入った。試験と言う現実を目の前にして、少しだけ楽しみが生まれた。この試験、何としてでも赤点だけは阻止しないといけない。そう強く思った。

## 【第六話】

試練の時は終わった。僕は手元に戻ってきた答案を見て、ほっと胸を撫で下ろした。一番不安があった数学だったが、何とか乗り越えることが出来た。75点、優秀な成績とは言えないが、今この時ばかりは輝いて見える。

休み時間に入ると、折原が早速僕の席に寄って来た。表情を見る限りでは、折原も無事に切り抜けたようだ。

「何点だった？」

「42点。お前は？」

「・・・ぎりぎりじゃん！俺は75だよ」

「75とか、これだから優等生は困る・・・」

ぎりぎりでも赤点でない事は確かだ。折原にしては頑張ったと思う。それにしても内申がどうのこうのと以前僕に言っていた割には酷い成績だ。自分の事ではないと言つのに、折原の進学は大丈夫なんだろうかと不安が頭をよぎった。

「二人ともどうだった？」

秋乃が折原の答案を覗き込んだ。

「俺は何とか大丈夫だ。野川のおかげだな。それより吉岡の成績を見てくれよ、この優等生に何か言っちゃってくれ」

「え？ああ、うん、頑張ったね」

折原に言われて僕の答案にも目を向けた秋乃は、何故か引つかかるような口調でそう言った。自分の答案を持つ手に少しだけ力が入ったのを僕は見逃さなかった。

「野川のも見せてくれよっ！」

秋乃が裏返しにして持っていた答案を折原が一瞬の間を見計らって奪い取った。

「ちよっ、待つて！」

秋乃が慌てて答案を奪い返そうとする。

「減るもんじゃないからいいだろ？」

ニヤニヤしながら答案を見た折原の顔が固まった。

「どうしたよ折原」

「・・・吉岡先生、僕らは駄目過ぎる事がわかりました」

「何なんだよ？」

僕は折原が手放した秋乃の答案を見た。

「ちょっと、返してっば！」

「きゅうじゅう・・・はちだと？」

僕も折原と同じように固まった。秋乃が優秀な事は知っていたが、よくもまああの忙しい日々の中でこれだけの成績を出せたものだ。

僕だったら同じような状況だったらきつとひどい結果になっているだろう。素直に秋乃の底力に感心した。

「ダブルスコアで負けた、ダブルスコアで・・・」

「それ以上だろ・・・」

折原、お前は頑張ったよ。赤点じゃなかったただけマシだろ。僕は心の中で折原を慰めた。

「おーっす」

坂本も僕の席にやってきた。

「最後の希望来た！坂本は何点？赤点？」

ぐったりしていた折原が急に元気になり、矢継ぎ早に坂本に質問を投げかけた。

「はあ？86だけどそれがどうかした？」

「駄目だ、死のう」

「俺も死のう」

僕と折原は折り重なるようにして机に突っ伏した。僕としても正直、部活で忙しい坂本にまで負けるとは思っていなかった。まあ、自分の自堕落さが招いた結果である事は承知している。ただでさえ何もしていないのだから、次からはもつと頑張らないといけないなと強く思った。

「ちょっと、あんたら！何なのよ！私が86とっちやいけないわけ

？」

「ま、まあまあ理央ちゃん。二人にも色々あるんだよ、色々・・・」  
秋乃は苦笑しながら坂本をなだめていた。

「うるさいうるさい！この優等生同盟め。俺は吉岡と落第生同盟組むからいいんだ！」

「お言葉ですが折原さん、俺はどっちかと言うと優等生同盟に近い結果なんですが？」

「・・・裏切り者め」

「折原一人がバカって事でいいじゃん」

僕らのやり取りを見て坂本が厳しい突っ込みを入れた。折原はいじいしながら答案をポケットにしまいこんだ。

「で、でも良かったよね。皆無事に休みに入れそうだし、キャンプ行けるよね」

秋乃がさかさずフォロワーを入れる。折原の目に光が戻って来た。

「ところでさ、キャンプ行くにしても足がないじゃん？」

続けて坂本が切り出した。確かに、キャンプに行くにしても僕らはまだ車を運転出来る歳じゃない。荷物を担いで行くにしても、それはそれで結構な労力になるだろう。

「夏休みに入ったら私の姉貴が帰省してくるからさ、連れてって貰わない？保護者って部分も兼ねてさ」

「坂本って一人っ子じゃなかったのか」

「うん。四歳上なんだよね、姉貴。東京の大学に行ってるから、長い休みの時くらいしか帰ってこないのよね」

僕の質問に、坂本がはきはきと答える。今まで坂本の家の家族構成など話題にした事がなかったから、意外な事実だ。それにしても坂本の姉とはどんな人物なのだろうか。坂本みたいに暴れ・・・もとい、元気な人なのだろうか。僕は妙にその事が気になったが、実際に会った時のお楽しみにおこうと思いい、心の中にしまいこんだ。

「保護者だったら俺がいるから安心だろう」

「お前が一番心配だよ」

僕は折原の頭にきつめに突っ込みを入れた。

「とりあえず、どこに行くかも含めてゆっくり計画しようか。試験の結果も出たし、終業式までの一週間は暇だしね」

坂本はいつになく張り切っているようだ。折原の死亡フラグ立てから始まったキャンプ計画だったが、無事に進められる事になって本当に良かったと思う。せっかくの夏休みだ、楽しまなくちゃ損だろう。

キャンプの話題で盛り上がる三人を見ながら、僕はそつと窓の外に目をやった。今日も晴天。試験と言う煩わしい出来事から解放された僕らの心を映し出している様な景色がすぐそこにあった。

## 【第七話】

キャンプ当日、僕らは坂本の家に集合する事になった。予定していた通り、坂本のお姉さんが車を出してくれる事になっていた。今回僕らが向かうキャンプ場は、ここから大体来るまで一時間半くらい行った所にあるらしい。折原が以前、家族と行った事があると言っていた。

坂本の家が見えてきた。家の前に坂本と秋乃の姿が見えた。僕の存在に気付いた二人は、僕に向かって手を振っていた。

「お待たせ」

「おーっす」

坂本の元気な返事が返ってきた。

「ずいぶん荷物持ってきたね」

僕が背負っている膨れ上がったリュックサックを見て、秋乃はそう呟いた。確かに、僕の荷物は秋乃の荷物と比べると倍近くある。

まあ、こう言う時は力仕事は男の仕事だから仕方がない。

「食料とか色々な。まあ、これだけあれば心配要らないだろ」

「そうだねえ」

僕らが家の前で話し込んでいると、家の中から見慣れない女性が出て来た。

「皆集まった？」

その女性は落ち着いた口調で僕らにそう尋ねた。

「あ、まだ一人来てないの。そうそう二人とも、これ私の姉さん」

「いつも理央がお世話になってます。私、理央の姉の紗枝子と言います」

その女性は坂本のお姉さんだった。僕は一瞬呆気にとられた。想像していた人物像と違い過ぎていたからだ。

「あ、どうも。吉岡です、よろしくお願いします」

「野川です、今日はよろしくお願いします」



僕と秋乃はぺこりと頭を下げた。

「いいのよ、気にしなくて。私も出掛けるのなんて久し振りで、楽しみにしてたから」

紗枝子さんが優しく微笑む。

「あー、二人ともかしこまる必要ないから。でしょ、姉さん」

坂本が堅苦しい空気を振り払うかの様に、会話に割って入ってきた。紗枝子さんにもこにこしながら頷いた。

それにしても、普段の坂本を見ている限りでは、この紗枝子さんの人物像はまず想像がつかないだろう。柔らかな物腰と表情、落ち着いた雰囲気。どれをとつても坂本には似つかない。二人で並んでいる姿を見ると、余計に姉妹である事が信じられなくなるくらいだ。これはさぞかし、折原も驚く事だろう。

「折原遅いな」

「あ、なんか行商人みたいなのが来る」

僕の言葉に反応したかのように、折原が曲がり角から姿を見せた。坂本が言った行商人と言う表現がピッタリ当てはまるほどの大荷物を抱えて、ゆっくりとこちらに向かってくる。一体何を詰め込んでくればあんな大きさになるのだろうか。僕は折原に質問したくてたまらなくなつた。

「遅れて、すみません・・・」

折原は息を切らしていた。

「お前、何そんなに持つて来たんだよ」

僕は少しワクワクしながら折原に尋ねた。折原の事だからまた意味不明な物を担いで来たのかと思つたら、その答えは案外つまらないものだった。

「はあ？テントだよ、テ・ン・ト！二個持つて来るの大変だったんだぞ」

「ああ、私が頼んでおいたの。でかしたぞ折原」

「そうそう。テント分けないと吉岡が何をしでかすかわかつたもんじゃないしな」

「いや、あんたが一番心配だよ折原」

「えっ」

坂本は折原を誉めたり突っ込みを入れたりと忙しい。まるで夫婦漫才のようだった。

「折原、坂本のお姉さんにも挨拶しろよ。今日俺らの面倒を見てくれるんだから」

僕はまだ息が整わない折原に耳打ちをした。

「あっ、坂本のお姉さんでありますか。僕は折原陸哉、乙女座の十七歳です！好きな物は哲学と美人・・・」

「アホか！！」

なんだその口調は。なんだその設定は。余りに突っ込み所の多い折原の発言にどこから突っ込みもつか迷っていたら、勢いよく坂本のゲンコツが飛んだ。ガツンと鈍い音が響く。

「ちょ、ちよつと理央！ごめんね折原君、理央はいつも乱暴なんだから・・・」

「うっさい！こいつにはこのくらいで丁度いい！」

「大丈夫であります！今日はよろしくお願いします！」

折原は簡単には懲りないようだ。その意味のわからない根性を正しく使う事が出来たら、どれだけ素晴らしい事だろうかと僕は感じている。これだけの状況の中で、黙々と荷物を車に積み込んで準備をしている秋乃もさすがだなと思った。

一通り荷物を積み込んで、紗枝子さんの運転する車は目的地に向けて出発した。夏休みに入ったとは言え、道路の混雑は無いに等しい。すすいと車は進む。

「私ね、野川さんの事知ってるんだ」

車内でわいわいと盛り上がっていた僕らを見て、紗枝子さんが口を開いた。

「えっ？」

秋乃はきよとした顔をした。

「中学生の時だったけ？ 梟の絵のコンクールで金賞取ったよね。新聞

に載ってたから、野川さんの顔見た事あるなあって」

「えっ、あつ、そう言えばあの時写真も載ったような・・・」

「そうそう。その時に中学生なのにすごいなあって思ったつけ。理央が高校に上がってから同級生になったって聞かされていたの。理央ったら野川さんの事いつも嬉しそうに話すから」

「いえ、私なんてまだまだです・・・。今だって何を描いたらいいのかわからなくなる時があるし・・・」

「たくさん悩むのはいい事だと思うよ。悩んだ分だけ考えるって事だしね。そうでしょ、理央？」

紗枝子さんは優しい口調で秋乃に話しかけていた。

「なんで私に振るかなあ？」

さつそく菓子に夢中になっていた坂本が、後部座席からのっそりと運転席の方に顔を出した。

「理央はむしろ、少しは悩んだりした方がいいのかもね」

「はあ？私だって私なりに悩みとかあるし」

「そうは見えないけどね」

くすくすと笑う紗枝子さんに、坂本は顔を真っ赤にしながら必死に反論していた。なんだかんだ言っても二人とも仲が良さそうで、微笑ましい光景だった。一人っ子の僕としては、少しばかり羨ましく感じるシーンであった。

「私は悩みなんて無くたっていいんだもん。秋乃が悩んだ時に助けあげるからいいんだもんね。ね、秋乃」

坂本はそんな事を言いながら秋乃に抱きついた。

「ちよ、ちよつと理央ちゃん。恥ずかしいってば」

「秋乃はかわいいなあ、いい子いい子！」

「ちよつ、頭ぐしゃぐしゃになるってば」

坂本は秋乃の頭を撫でると言うよりは、わしづかみにしてぐしゃぐしゃとかき回していた。

「坂本、酔ってるのか？酒は入ってなかったはずなんだが、多分・・・」

「うっさい。女同士の友情に口を出すんじゃない」

「ハイ、ゴメンナサイ・・・」

さっきまでのハイテンションはなんだったのだろうかと思うくらいに、折原のテンションは下がっていた。少しだけ顔色が悪いようだ。「折原、どうしたんだよ？」

僕は小声で折原に尋ねた。

「ナンデモナイ」

棒読みの答えが返ってきた。ああ、わかった。恐らく車酔いだろう。ずっと前に酔いやすいって聞いた事があつたような気がした。

「窓開ける」

僕はそっぴいながら折原の近くの窓を開ける。折原は何故か僕に向かつて敬礼した後、外の空気に当たりながら遠くを見つめていた。僕の自転車の後ろに乗ってても何とも無い折原が、何故車だと駄目なのだろうかと疑問に思った。安定性ならどう考えても車の方が抜群に良いだろうに。

「お前、平気か？」

僕の問い掛けに黙って頷く折原。さっきよりも少しは顔色も良くなったし、放っておいても問題ないだろう。とりあえずこの件は折原の弱点として把握しておく事にした。そんな事をしている間も車は目的の地へと軽快に走る。秋乃、坂本、紗枝子さんのガールズトークもまた軽快に進む。

それにしても、さっき坂本が言った「秋乃が悩んだ時は助ける」と言う言葉、秋乃にとってはとても頼もしく感じた事だろう。秋乃はただでさえ人に頼る事をしない。一人で悩んで考えて答えを出す。それによって自分を追い詰めてしまわなければ良いのだが、と日頃から心配している部分はある。何にせよ、秋乃は良い友達を持ったと思う。僕自身も、秋乃がこの先何かで悩む事があるなら、何か少しでも助けになるような事が出来ればいいと強く思った。

## 【第八話】

「あー、やっとついたなあ」

折原は車から降りるなり元気になっていた。少し酔ってたばっている位が丁度いい気がしないでもないと思っただ。

「さーで、お腹も空いたし私たちは料理の準備でもしますかね。男衆はテントよろしくね！」

「坂本、料理なんて出来るの・・・？」

折原が不安げに坂本の方を見た。

「はあ！？失礼な・・・。食べた後で同じ台詞が吐けるかどうか楽しみにしてるわ」

「期待はしないでおく・・・」

坂本に聞こえない位の声で、折原はそう呟いた。坂本の料理の腕はわからない。ちなみに秋乃は調理実習ではあまり上手くなかったような記憶がある。今日は紗枝子さんもいる事だし、そこまで心配しなくても大丈夫だろう。僕は心の中で自分にそう言い聞かせた。

「さて、テント張らないとな。折原やり方わかるのか？俺はさっぱりなんだけど」

「なんだよ吉岡、テントも張れないのか。だらしねえ奴だな、まあ のんびり見てろって」

何をしていたのかわからない僕を尻目に、折原は手際よくテントを組み立てて行く。さすが、家族と何度か来たと言っただけあってなかなかの腕だった。僕は結局やる事もなく、折原が働き蟻の様に頑張る姿を、傍目から眺めていた。

しばらくして二つのテントが完成した。

「どんなもんよ？」

「ああ、さすがだ。おかげで俺は何もやらずに済んだよ」

「おい！思ってみりやお前何もやってないじゃないかよ。これだからインドア派は困る・・・」

「ああ、悪かったな。まあとりあえずは感謝しておいてやるよ！」  
誇らしげにテントの前で話す折原を、とりあえずおだてておいた。  
毎度の事ながらわかりやすい性格だなあと、僕は折原にばれない様  
に苦笑した。

僕と折原は、遠巻きに女性陣が料理している姿を眺めていた。

「いいすなあ」

突然折原が呟いた。

「何が？」

僕は即座に聞き返す。

「いや、女子が料理している姿はいいすなあ。家庭的と言うか何  
と言うか」

なるほど、そう言う事かと理解した。

「坂本も見た感じ手際良さそうだし、期待してもいいんじゃないか  
？」

「うーむ、毒を盛られるかも知れん・・・」

「それはお前の普段の行いが悪いんじゃない・・・」

「そんなことはない。坂本が凶暴なのが悪いのだ」

折原はきつぱりとそう言った。本人に聞こえたらまた物凄いゲン  
コツが飛ぶ事だろう。

「野川は見たまんま家庭的って感じだよな」

「見た感じはなあ」

「紗枝子さんも家庭的な雰囲気でもいいなあ・・・」

「お前は何でもいいのか」

「失敬な。私とて真剣だ」

折原の意味不明な口調に僕は思わず吹き出した。何についてそこ  
まで真剣なのか、問い詰めてやりたくなった。てっきり折原は元氣  
がいい人が好みなのかと思っただが、案外そうでもないのかも知れな  
いなと、この時初めて思った。

それにしても、僕の目から見て坂本はなんとなく折原に好意を持  
っている様な気がしてならない。いつもケンカと言うか小競り合い

を繰り返しているが、中が良いからこそだろうと思う。折原も満更ではないとは思っただが、こいつに関しては本当によくわからない。正直な所、恋愛など折原には全く似合わない気がした。何となく毎日と一緒に過ごし、何となく楽しい事などを共有する。そんな友達との延長線上の様な感じが折原には似合う気がした。そう言う意味では、僕の中では折原と坂本はとてもお似合いと言うイメージが強かった。

「おーい、出来たぞー」

坂本の元気のいい声が響く。下らない考えを頭に巡らせている間に、女性陣の料理が完了したようだった。こつ言う所ではよくある定番中の定番、カレー。これならいくら何でも食べられない物はないだろう。僕はそう思いながら目の前のカレーに手をつけた。うん、無難に旨い。何となく最悪の状態も想像していた僕は、少し安心した。横では折原が旨い旨いと言いながらひたすらに食べ続けている。

「折原君はよく食べるねえ」

秋乃が呆れた様な、感心した様などつちともつかない声を出す。

「吉岡が、何にも、しないもんだからさ。腹が減ってね」

「わかったから、とりあえず落ち着いて食べ」

「全く、役に立たない、吉岡だな」

もぐもぐと食べながらも僕に文句を言う折原。事実だから何も言えない事が、少しだけ悔しかった。

食べて遊んで、いつの間にかすっかり夜も更けていた。

「そうだ、俺いい場所知ってるんだ。これから行かね？」

折原が突然そんな事を言った。

「え、なにになに？」

「すかさず坂本が食いつく。」

「とりあえずついて来いって」

折原が先導し、僕と秋乃と坂本は後に続く形になった。紗枝子さんは色々その後片付けをしてくれるとの事で、残る事になった。

折原はどんどん山の方に入っていった。細い道をすいすいと抜けて、山を登って行く。やがて少し開けた場所に出た。

「ここだ。ほら、見てみ」

折原はおもむろに空を指差した。そこには、僕らの住んでいる所からでは見る事の出来ない満天の星空が広がっていた。僕らは揃って、感嘆の声を上げた。

「なっ、来て良かっただろ？」

「すごいね。うちからじゃ絶対見れないもんね」

得意げにしている折原に、秋乃が同調した。

「癒されるね、こう言うのは。なーんか夏休みって感じ」

坂本は空を見上げたままそう言った。

それからしばらく、僕らは星座を探したり、今日の事を話したりしながら過ごした。それにしても、いつもはバカをやっているだけの折原にも、ロマンチストな一面があったんだなあと僕は感じた。

帰り道も、折原が先導しながら懐中電灯で視界を照らして歩いた。

「あっ」

しばらく歩いたところで秋乃の声が響いた。同時に、地面を滑り降りるような音が聞こえた。

「野川！！」

「秋乃！！」

折原と僕はほぼ同時にそう叫んだ。折原が慌てて懐中電灯で声のした方向を照らす。少し降りた所にある沢で、秋乃の姿を見つけた。坂本はおろおろしながら秋乃の名前を呼んでいた。

「大丈夫、足を滑らせちゃっただけ！」

秋乃の声が聞こえた。僕は秋乃の無事を確認して、ひとまずはほっとした。そうしているのも束の間、折原は勢いよく斜面を走り降りていった。

「お、おい折原！」

僕は折原も滑り落ちてしまったのかと思い咄嗟にそう叫んだ。だが折原は滑り落ちたのではなく、秋乃を救出に行っていたのだ。す



ぐに、折原が秋乃を背負って沢から上がって来た。

「野川、大丈夫か！」

折原は秋乃の体を懐中電灯で照らしながら、怪我が無いかどうかを確かめていた。

「大丈夫だよ。ちょっと足捻ったかもだけだよ。ごめん、心配かけて」

「野川、右手怪我してるじゃねえか」

「擦り傷だから大丈夫だよ、心配ないよ」

「悪い。俺がこんなところに誘ったから・・・」

折原はいつになく神妙な面持ちだった。それに気付いてか、秋乃も必死に大丈夫だと繰り返していた。

「よ、っと」

「えっえっ？」

折原はまた秋乃を背負った。秋乃は突然おぶられてどうしたらいいのかわからないようだった。

「大丈夫だよ、歩けるから」

「無理すんな。俺がおぶっていくから掴まっててくれ」

折原はそう言つと、そのまま山を降り始めた。折原は自分が誘ったせいでこうなってしまったと、責任を感じていた。折原が悪いわけじゃない、その声をかけてやりたかったけど、折原の複雑な表情を見るとそれも言えなくなっていた。

「私、皆に迷惑かけてばかりだ。いつも皆に助けて貰ってるのに、いつも・・・」

秋乃は目に涙を浮かべながらそう呟いた。

「何気にしてるんだよ。友達なんだからいいだろ、別に」

「ああ、俺らだって困った時は助けて貰ってるだろ。ほら、この前のテストの時とかさ」

「そそ、そんな事誰も気にしてないんだからいいんだよ。無事だったならそれでいいんだから」

折原に続き、僕と坂本もフォローを入れた。それでも秋乃の中で

は自分自身に納得が行かないのか、山を降りるまでずっと黙り込んだままだった。

山を降りた後、とりあえず応急処置をして、その日は休む事になった。幸い骨折等ではないようで、僕は一安心だった。

僕と折原は一緒のテントで、お互いに何も話さずにいた。折原はずっと寝れない様子だったので、僕はそつと声をかけた。

「寝れないのか？」

折原は何も言わなかった。

「お前が気に病むことは無いって。元気出せよ」

さっきの件に責任を感じているようで、折原はずっと黙り込んでいた。しばらくして、ようやく折原が重い口を開いた。

「野川の右手はさ、絵を描く為に大事なもんだろ」

僕は黙って折原の話を聞いていた。

「俺だつて陸上やつてるから、カラダの大切さはわかる。それなのに俺の下らない思い付きのせいであんな事になっちまってさ」

「お前の言いたい事はわかるけど、事故なんだから仕方ないんだよ。皆で楽しんだし、それはそれでいいじゃないか」

「そうだけどさ。だけだよ・・・」

「お前が落ち込んでたら、秋乃もどう言う顔してお前と顔合わせたらいいかわからなくなるだろ。とにかく、元気出せよ。お前らしくしてた方がいいって」

僕はそれ以上は何も言わなかった。折原は黙って一つ頷いた。こんな風に落ち込む折原を見るのは、こいつと知り合ってから初めてのことであった。

夜は更けて行く。折原には折原の思いがあるのだろう。僕は僕で、あの時真つ先に秋乃を助けに行けなかった自分の行動を悔やんでいた。あの時の様子を思い出すと、胸がチクリと痛んだ。

## 【第九話】

「軽い捻挫だつてさ」

病院から戻つて来た秋乃は恥ずかしそうに頭を掻きながらそう言つた。

「ほんつとにすみませんでした！」

折原がすかさず土下座した。心なしか昨日よりはいつもの折原テシヨンに戻っている様な印象を感じた。

「本当だよ。もつと謝れ、ほれ」

坂本が折原の頭を押さえ込んで追い打ちをかける。額をグリグリと地面に押し付けられる折原を見て、僕は笑いを堪えていた。

「私がどんくさいから悪いんだよ。り、理央ちゃん、折原君を放してあげて」

「そうだと坂本！少しは紗枝子さんを見習つてだな・・・」

「秋乃が優しいからつて調子に乗んな！」

坂本の蹴りが折原の脇腹に飛んだ。何だかんだでいつもの光景だ。昨日の折原の様子を知っていたから、余計にこの普通の光景が嬉しく感じる。僕らはこうやってバカやって、いつも通り楽しく過ごしているのが一番だ。

「でもこれで絵の練習少しサボれるなあ」

「冗談交じりに秋乃が笑う。」

「秋乃はたまには休憩した方がいいよ、うん。ところで秋乃、この前のコンクールの結果つていつ出るんだっけ？」

「確か夏休み明けの少し前かな？まあ今回はあんまり自信ないんだよね」

坂本の問いに秋乃は少しとぼけるような感じで返答した。

「何を言うか。期待の高校生の癖に？」

「えー、だつて全国コンクールは今回初めてだよ？県のコンクールで賞を取ったのは中学生の時の話だし」

「そう言えば、何で去年には出さなかったの？夏と冬のあるんだよね？確か」

「まあ色々あってねえ。とにかく今回は初めてだし、期待も何も無いよ」

坂本と秋乃は色々と話し込んでいた。

確かに、秋乃は去年のコンクールには応募していなかった。その頃も絵は描いていたはずだが、何故応募しなかったのだろうか？僕は頭の中で去年の今頃の事を必死に思い出そうとしたが、何も印象に残っている出来事は無かった。そのうち秋乃に訳を聞いてみよう。何かのきっかけに話してくれるかも知れないし、今は特に突っ込まないでおこうと決めた。

この後は特に何事も無く、無事にキャンプは終わった。早くも夏休みの一大イベントが終わった。折原と坂本は部活が忙しいだろうし、これから先皆で何処かに行くと言うのも難しいだろう。まだ夏休みが始まって間もないが、あとは適当に課題を済ませて二学期が始まるのを待つだけだ。そんな事を思いながらダラダラと過ごしていたある日、僕の携帯が鳴った。坂本からだった。

「あー、吉岡元気い？」

「あー、ボチボチな」

「明日暇？」

「うん、当然のごとく暇。てか今この瞬間も暇なだけだね」

「あはは、吉岡らしいね。ところでさ、課題終わった？」

なるほど、坂本の言いたい事は理解した。きつと部活が忙しくて課題が終わっていないんだろう。とりあえず一通り終わらせていた僕だったが、少しだけ意地悪をする事にした。

「いや、まだ全然だわ。夏休みもまだあるし、後でいいだろうー」

「えー、吉岡駄目じゃん。仕方ないなあ、今度見せてあげよう」

「え？」

予想外の言葉が返って来た僕は変な声を出してしまった。てつきり、課題を見せてくれって事だと思ったがどうやら坂本の話の展開

的に違うようだ。

「えっ？つてなんだ、えつて。また課題見せてとか言うと思ったんでしょ？残念でした。」

完全に読まれている。何だか悔しさが込み上げて来た。

「課題の件じゃないなら明日何があるんだ？」

「ああ明日ね、お隣の県で花火大会あるじゃん。でつかいの。あれに皆で行かないかなって思ってたさ。姉さんがまた車出してくれるって言うから行かない？」

「マジか。紗枝子さんには世話になりっぱなしだけどいいの？」

「ああ、いいのいいの気にしないで。姉さん元々出不精だから、こ言う時に外に連れ出したほうがいいのよ。」

「紗枝子さんも苦労してるだろうな。」

僕はボソツと小声で呟いた。

「何か言った？折原と秋乃には既に連絡済だからさ。吉岡も来るよね？」

「ああ、行くよ。」

「そうこなくちゃねえ。明日は私の浴衣姿でも見て萌えるがいい。」

「え？坂本の浴衣姿・・・？なんか想像がつかないんだが。」

「よし、明日殺す。萌え殺す。ほんとに吉岡も折原に似てきたなあ。あんなバカに似てくると秋乃に嫌われちゃうぞ？」

坂本はそう言っつて悪戯っぽく笑った。

「何で秋乃が出てくんだよ？」

「何でだろうねえ。」

また坂本の笑い声が響く。何かを言いたそうな、何か見透かされているような、そんな感じがした。

「まっ、とりあえず明日三時くらいには出発するからうちに来なよ。そんじゃね。」

一方的に言いたい事を言っつて、坂本は電話を切った。

坂本の浴衣姿はまあ想像がつかないから置いておくとして、紗枝子さんや秋乃はどうするのだろうか。皆揃っつて浴衣姿とかなら、折

原が歓喜する事は間違いないだろう。僕はこの退屈な時間を、明日の折原の反応を予想して楽しむ事にした。

次の日、僕が坂本の家の前に着くと、早速折原が歓喜していた。女性陣は三人とも浴衣姿で、それを見た折原が大はしゃぎだった。大体僕が予想していた通りの反応で、相変わらずの折原の単純さを再認識するだけになってしまった。

「いいね、いいね！」

「誰が一番いい？」

喜ぶ折原に、坂本が返答に困る質問を投げかけた。

「・・・」

「誰が一番いいのかな？」

「・・・さて紗枝子さん、到着が遅れない様に出発するとしましようか」

「おい、待て折原。誤魔化すな」

折原はまた妙な口調のキャラになって坂本の追撃を振り切った。

「こつ言う時はお世辞でも坂本が一番いいって言ってもんだ。お世辞でも、聞いて来た本人を褒めるのがいいんだぞ」

「吉岡は一言多い！」

横から折原に突っ込んだ僕に、坂本の一撃が飛んで来た。痛い。

これは相当痛い。折原は事あるごとに坂本に一撃を食らわされていたが、これを毎回食らっているのはある意味修行になると僕は思った。

「あーもう、なんか今日は折原が二匹いるみたいなんだけど」

車に乗り込みながらばやく坂本に、折原がまた変なノリでしゃべりだした。

「折原動物園ですな？」

「閉園しろ」

きつぱりと坂本が言い切る。

「吉岡、折原動物園が閉園になったら俺らどうすりゃいいんだ？」

しょぼくれた顔をしながら折原が僕に尋ねる。苦笑しながら返答

に困っていると、横からさらりと秋乃が毒を吐いた。

「まとめてドナドナしちゃえばいいよ」

「ナイス秋乃。こいつらまとめて引き取って貰おう」

「俺を折原と一緒にすんな。折原だけ売り払えばいい」

折原のノリに付き合っていたら、いつの間にか僕まで折原動物園扱いになっていた。ここはとりあえず汚れ役は折原に押し付けて、僕はお先に普通の状態に戻る事にしようと思った。

「吉岡までそんな事を……。いいもん、紗枝子さんに引き取って貰うから！」

「うーん、いらないかも」

紗枝子さんも苦笑しながら毒を吐いた。紗枝子さんまでこの空気によって毒されてしまったらしい。僕はこんなやり取りを見ながら笑っていた。

道中、渋滞に巻き込まれながらもなんとか現地に辿り着いた。数時間かけて見に来た花火は最高で、そして少しだけ切なく映った。去年の夏は本当に何も無かったが、今年の夏は良い思い出が出来たと思う。そんな楽しい夏休みも終わりが来てしまう。まあ、学校が始まったらまた代わり映えの無い毎日で退屈だけど、退屈な中に時々こっぴどい刺激があるから余計に楽しく思えるんじゃないかと、ふとそんな事を考えた。

## 【第十話】

長いようで短かった夏休みは終わった。今日からまた学校モードに切り替えて過ごして行かなくてはいけないと思うと、少し憂鬱だった。まず何よりも、始業式がかったるい。校長の話もいつも同じ様な内容だし、長い時間立っていないければいけないのも面倒くさい。そう言うでは、授業を受けている方が余程マシな事だと僕は思った。いつも通り折原を拾って自転車を走らせる。通学路の生徒たちは、皆どこことなく気だるそうな雰囲気醸し出していた。

「ところでさあ」

後ろから折原の声が聞こえた。

「野川のコンクールの結果はどうなったんだ？」

「さあ？」

「さあ？つて、何も聞いてないのかよ」

「向こうから何も言っただけなのに聞くのもどうかと思うしなあ」

「まあそれもそうか」

折原は秋乃のコンクールの結果が気になるようだった。僕としても気になる部分ではあったが、秋乃が何も言っただけでは仕方がない。普段からメールでやり取りはしているが、コンクールの話題はまったく出なかったのだ。

学校に着くなり、僕は体育館に詰め込まれた。

「よっ」

「よお、坂本。野川は？」

「秋乃？朝から見かけてないんだよねえ」

「マジか。休み？」

「どうなんだろうねえ？今朝は一緒じゃなかったからさ」

坂本と折原の会話に耳を傾けながら、僕は秋乃の姿を探したが、クラスの前には見当たらなかった。結局秋乃の姿を見つけないまま、始業式が始まった。校長の話が思ったより短かった事が



せめてもの救いだっただ。

式も進んでそろそろ終わりかと思っていたところで、司会の教師から表彰があるとの発表があった。夏休み中の大会で成績を残した運動部の生徒などが表彰される恒例の時間だ。その生徒たちの列の中に、秋乃の姿があった。

「あ、野川いるじゃん」

折原が真っ先に気が付いて、壇上が上がっていく生徒たちの方を指差した。

「ほんとだ。って事は秋乃、賞取ったのかな？」

坂本も秋乃の姿を見つけてそう言った。

表彰は進んで、秋乃の番になった。校長にぺこりと頭を下げて正面に立つ秋乃の姿を、僕らはじっと見守っていた。

「二年二組、野川秋乃。全国絵画コンクール高校生の部、銀賞」

「おおっ、銀きたよ！」

賞状を読み上げる校長の言葉に、折原が即座に反応した。

「秋乃すごいじゃん！」

坂本もまるで自分の事のように嬉しそうな表情を浮かべた。

僕も、嬉しいのとほっとした気持ちとが混ざり合っていた。秋乃が今回の絵を描き始める時から見ていた僕は、彼女の努力を誰よりも知っていると自負していた。彼女の努力が結果と言う形で返って来た事が、何よりも嬉しかった。僕の隣にいる坂本と折原も、式の事などそっちのけで大盛り上がりだった。

式が終わって教室に戻ると、秋乃は早速坂本と折原に祝福を受けた。

「さすがは私の秋乃だ。すごいじゃん、全国で銀賞とか！全国で二番目って事だよ？」

「えー、たまたまだよ。運が良かったんだと思う」

秋乃はそう言いながらも、表情は嬉しそうだった。

「盾すげえ！俺もこんなの欲しいわ」

折原がそう言いながら、秋乃が貰った盾を持ち上げた。僕はそん

な折原にすかさず声をかけた。

「待て折原！それは……」

「え？え？」

「皆まで言わせるな。分かるな？」

「え？どう言う事ですか？吉岡先生」

「……それはあれだ、フラグだ」

「フラグ！落として壊すフラグだ！間違いなく俺は落として壊す！」  
折原は慌てて盾を秋乃の机にそっと戻した。僕らの中にどっと笑いの渦が生まれた。自分で言うのも何だが、僕らは良い仲間たちだと思う。仲間内で起こった事を共有し合える、そんな関係はとてもよいものだと思えて感じる事が出来た。

放課後、僕は秋乃がいる美術室に向かった。休み時間は坂本と折原のパワーに押されて、ろくに祝福してやる事も出来なかったので、ゆっくり伝えられればと思った。

「秋乃、入るぞ」

ドアを開けると、窓際で静かに佇む秋乃の姿が目に入った。こちらを振り向く秋乃に、僕は開口一番、祝福の言葉を伝えた。

「銀賞おめでとう」

僕の言葉を聞いた秋乃は、少し複雑そうな表情を浮かべた。

「ありがとう」

柔らかい彼女の笑顔が僕に向けられた。しかし、心なしかその言葉には感情が乗っていないように僕には感じた。

「どうした？何かあんまり嬉しそうじゃないな」

僕は思い掛けない秋乃の反応に少し困惑しながらそう尋ねた。

「……嬉しいよ？」

「そうか？何かあったのか？」

僕の追及に、秋乃は少し困った様な顔をしながら微笑んだ。

「今日の直人は、いつもより突っ込んで来るね」

「いや、何か休み時間と様子が違うからさ。何も無いならいいんだって。気になっただけだからさ」

秋乃の言葉にはつとした僕は、必死に弁明した。

ふう、と秋乃の短いため息が聞こえた。彼女は僕が入って来た時のように窓の外の方に向き直り、静かに話し始めた。

「・・・怖いんだ」

「え？」

僕には秋乃の言葉の意味が分からなかった。

「結果が怖い」

「・・・何で？全国で二番だぞ？誇っていいと思うよ、俺は」

「そう言う意味じゃないの」

「もしかして」

僕は彼女の言葉から、ある事を感じ取った。

「また期待されちゃうなあって」

彼女は僕の方を振り返って、静かに笑った。僕がすぐ前に感じ取った事と、同じ答えだった。思ってみれば、秋乃は中学生の時に賞を取って以来、周りの人間の期待を一身に集めて来た。僕としてはその期待がプレッシャーになっていのではないかと考えた事は何度もある。彼女がそんな気持ちを吐露した事は今までに一度も無かったが、やはり彼女の中では周囲の人間の期待はかなり大きく、重くのしかかっていたようだった。

「だから去年は出さなかったのか？」

僕は、心の中に留めておいた疑問を秋乃にぶつけた。

「それもあるけど、あの時は評価を受けるのが怖かった」

「なんでだよ？秋乃は絵がうまいだろう。お世辞でも何でもなくさ」「ありがと。でも、やっぱり怖いんだよね。色々考えて、結局まとまらない。一回賞を取っちゃうと、次はもっと上を取らないといけない。期待に応えるってそう言う事だから・・・。それが怖かったんだ」

秋乃はそう言ってうつむいてしまった。何か気の利く言葉は無いかと考えるが、頭の中で秋乃の言葉と僕の思いがぐるぐると回ってまとまらなかった。

「秋乃は頑張ってるよ」

秋乃のそばに歩み寄ってそつと声をかけた。そんな言葉が精一杯だった。その時、置いてあった秋乃の賞状が目に入った。『孤独』秋乃が今回受賞した作品のタイトルだった。秋乃は誰に何を告げるわけでもなく、独りで色々なものと戦っていたのだろうか。そう思うと、僕は何だか悲しくなった。それと同時に、大きなプレッシャーと常に戦う環境は、どれほど大変なのだろうかと考えた。僕自身、そんな状況に追い込まれた事はないから具体的にはわからない。だが、それが辛い事だと言う事は簡単に想像出来た。

「秋乃、ちよつとついて来いよ」

僕はうつむいたままの秋乃にそう言った。

「ほら、乗れって」

自転車に飛び乗って、秋乃に後ろに乗るように促した。秋乃は黙って僕の背中にしがみついた。

いつもは通らない道を、ひたすら自転車で駆け抜ける。

「秋乃はさ、考えすぎなんだよ」

スピードを上げていく。秋乃の返答が欲しいわけじゃない。僕が思っている事を、秋乃に率直に伝えたくかった。

「俺はさ、難しい事とか専門的な事はまるでわからないけどさ。秋乃が描きたい物を描いて、秋乃の好きな様にやるのが一番いいと思う」

坂道を一気に駆け下りる。遠くに海が見える、景色の良い坂道だ。夏の爽やかな風をきつて、僕はひたすら自転車を走らせる。

「周りの事なんて気にすんなって。弱音も吐いたっていいだろ？ 楽になるように俺でも坂本でも折原でも、誰にでも何でも話せばいい」

「・・・ありがと」

秋乃は小さくそう呟いた。その声は少し震えていた。

「直人は、高校生になって変わったね」

しばらくして秋乃が口を開いた。

「何が？」

「色々。口調とか考え方とか」

「これは、まあ。ノリみたいなもんだけど・・・」

今まで誰にも指摘されなかった事を指摘されて、僕は少しだけ恥ずかしくなった。僕自身まだまだ違和感が抜けていないのだから、傍にいる秋乃が違和感を感じるのは当然の事かも知れないと思った。

「・・・れるかなあ？」

「え？」

秋乃の言葉は風にかき消されてほとんど聞こえなかった。

「私も、強くなれるかなあ」

今度ははつきりと聞こえた。

「なれるよ」

僕もはつきりとそう返した。

独りで色々なものに耐えている秋乃は、僕から見たら十分過ぎるくらいに強いと思う。だが、それでもなお望むのなら、いくらでも強くなれるんじゃないか。僕はそう思う。だからこそはつきりと秋乃に答えた。

僕も本当の意味で変われるのだろうか。いや、変わらないといけないのだろう。秋乃の力になりたいなら、僕は秋乃よりも強くなるなくてはいけない。何も目立つものは持っていない僕。正直、秋乃みたいに才能がある人間を羨ましく思う事もある。だけど、こんな僕だからこそ感じられる事もあるだろうと思いたい。そう言う僕が感じている事を秋乃に伝えて、それが少しでも彼女の役に立つのなら幸いだと僕は思う。

## 【第十一話】

季節は夏から秋へと移り変わろうとしていた。暑苦しくて過ぎにくい日も、大分減ってきたように思える。僕らはと言つと、特に変わった事もなく日常を過ごしていた。折原と坂本はまた部活の大会に向けて練習の日々、秋乃は冬のコンクールに向けて構想中と言つた所だ。相変わらず、特に何をするでもなくブラブラしているのは、仲間内では僕くらいのものだろう。

教師たちは、来年は受験の年だとまるで口癖のように言い放つ。大学進学？就職？何も決まっていない。何がやりたい？何が出来る？たまに暇を見つけては自問自答するが、何も代わり映えの無い日常において、その答えが見つかる事は無いような気がしていた。

ふと秋が近い空を眺めてみる。僕はまるで、そこに浮かぶ雲のようなものだ。意思も無く、ただ周りに吹く風に乗せられてどこかへと流れて行く。その先に何かがある？何かがあるかも知れない、何も無いかも知れない。不安が無いと言つたら嘘になるけれど、今の僕には何の答えも無い。

「吉岡、メシ買いに行こうぜ」

僕の肩をポンと叩きながら、折原がそう言った。チャイムが鳴つた事にも気付かずにとぼつとしていた僕は、ビクツと体を震わせた。「何妄想にふけてんだよ。ほら、さっさと行かないとパン売り切れんぞ」

半ば強引に折原に促されながら、僕らは購買に向かう。普段は教室で食べる所だが、今日は天気もいいと言つ事で屋上で昼食をとる事になった。

フェンスを背にして座つて、また空を見る。知らない間に、ひとつため息が漏れた。

「なんだよ吉岡。元気無くな？」

「別に。お前がいつも元気すぎるだけだろ？」

「何だよ？お兄ちゃん寂しいぞ？悩み事があるんなら相談してもいいんだぜ」

「折原に相談してもドツボにはまりそうだ」

「ドツボにはまる事も若いからこそだよ、吉岡君」

折原の口調に、僕は思わず吹き出した。

しばらくして、折原がふと口を開いた。

「それにしてもさ」

「ん？」

「何か毎日代わり映えしなくてつまんねーよな」

僕が思っている様な事を、どうやら折原も感じているようだ。だが、僕から見ると折原は部活もやっているし、それなりに変化のある日常を送っているような気がする。

「折原はまだマシじゃないか？俺なんか学校来て家帰るだけの繰り返し。変わった事なんてこれっぽっちもありませんよ」

「んー、変えようと思わないと変わらないのかもな」

「何が言いたいんだよ？」

「べつにー」

今日の折原はよくわからない。いつもはストレートな表現を好む折原だが、何故か今日の彼は何かと遠回しだ。僕はそんな折原に少しだけ興味が沸いた。

「変えるって言ってもさ、何か変えられる様な物とかあるか？」

僕は折原に問い掛けた。

「俺は運動ばっかだからわかんねーけど、恋愛とか？」

少し考え込んで出した折原の答えに、僕は思わず笑いがこぼれた。

「何で笑うんだよ！」

「だってお前の口からそのセリフは意外だったわ。スポーツバカだと思ってたからさ」

「今日の吉岡君は毒が強いですね・・・」

僕らの会話はそこで少し途切れてしまった。流れをぶった切ってしまったかなと思い、今度は僕の方から話題を振る事にした。

「折原は好きな奴いんの？」

僕の問いに、勢いよく咳き込む折原。飲みかけのジュースが器官に入っただらしい。

「いきなりかよ！俺はともかくとしてお前はどうかなんだよ？え？」

「何で俺に戻すんだよ！」

「てか、吉岡は野川の事好きなんだろ？」

折原のストレートな攻撃に、今度は僕の方が咳き込んだ。

「はあ！？意味わかんないし」

「何だよ。凶星かよ？素直になっちゃいなさいよ、吉岡君」

「別にそんなんじゃないし」

「じゃあどなんだよ？」

「知るか」

「これだから吉岡君は・・・反抗期とかお父さん悲しいぞ」

「うるせー奴だな！お前はお前で誰かいるのかよ？最初に質問したのは俺だろうが」

僕と折原のやり取りが続く中、僕らの背後から突然声がした。

「ケンカ？」

僕と折原は向かい合ったまま硬直した。二人同時に後ろを振り返ると、そこには坂本と秋乃がいた。

「ケンカ？珍しいなあ」

坂本がさっきのセリフを繰り返した。

「何の話してたの？」

秋乃も興味津々な顔で僕らに尋ねた。

「え？なんだつけ吉岡君」

「俺に振るな」

僕は小声で折原に返した。

「なんだなんだ、私らには言えない話？もっと興味が沸いたぞ？」

坂本が僕らに攻勢をかける。さすがにさっきの話の内容は、ここでしたらまずい。何とか誤魔化せと、僕は折原にアイコンタクトで訴えかけた。



「あー・・・その、なんだ」

「なにになに？」

「えっと、そのね、何と言うかね」

「もったいぶらないで話しちゃいな、ほれほれ」

「健全な男子のエロトーク」

ガッツポーズを決めながら折原が吐いたセリフは、完全に決まっていた。

「・・・昼間っからお盛んですこと」

呆れたような表情で坂本が呟いた。秋乃も苦笑しながら僕らを見ていた。余計なイメージが付くのは勘弁して欲しいところだが、さっきの話を素直に話すよりはマシだ。きっと折原もそう思っている事だろう。それにしてもいつもの折原のノリだと、さっきの話を暴露して話題にするところだが、少しは大人になったという事だろうか。まあ、とりあえず助かったのは事実だからそう言う事にしておこうと思った。

放課後、折原はだるそうに部活の練習に向かっていった。坂本も後を追う様に教室を出て行った。帰り支度を整えている僕に、秋乃が近づいて来た。

「直人、今日はもう帰るの？」

「ああ、やる事もなし。秋乃は？」

「私も今日は帰ろうかな。なかなか構想もまとまらないし、気分転換しないとダメかもねえ」

「まあ、その内浮かぶだろ。無理すんな」

「うん」

僕と秋乃は、そんな話を話しながら帰路についた。

自転車を手で押しながら、秋乃の歩調に合わせてゆっくりと歩く。特に何を話すでもなく、僕らは歩いていた。普段なら色々と僕の方から話題を振るところだが、昼間に折原に言われた事が僕の頭の中で回っていた。秋乃が好きか？好きか嫌いかで言ったら好きだろう。でも、僕は自分の感情がよく分からなかった。幼い頃からずっと彼

女の傍にいた。気が付いたら中学生になって、高校生になって。ずっと傍にいたからこそ、彼女についてどう考えていいのか分からない。い。そもそも、秋乃がどう思っているのかもまるで分からない。今二人の間にあるのは、幼馴染と言う関係だけだ。幼い頃から一緒にいる。それが当然の事。だから今もこうして一緒にいる。ただそれだけの関係。

日常と言う名の『いつも通り』の壁を破るのは、何とも難しい。一緒にいる事が普通になっている時間が長ければ長いほど、その壁は厚くなっていく様に思えた。僕と秋乃の関係は『幼馴染』。少なくとも今の段階においてはそれ以上ではない。

「昼間さ、何の話してたの？」

秋乃の静かな問いが沈黙を破った。

「え？」

「何か二人とも変だったから。本当は別の話してたのかなってね」

秋乃が笑いながらそう言った。

「え？折原が言った通りだけど。興味があるなら話すぞ？」

僕の言葉を聞いた後も、秋乃は静かに微笑んでいた。

「何も無いならいいんだけど。今も難しい顔してたから、何かあったのかと思ってるね」

「別に普通だよ。特に何も無い」

「嘘。いつもはそんな顔してないし。一緒にいるとちょっとした変化でもわかるもんなのよ？」

「じゃあそう言う事にしておく」

秋乃には、僕のちょっとした違いもお見通しのようだ。彼女にとっても、いつも一緒にいると言う意識はあるようだ。そう言う共通の認識が、少しだけ嬉しく感じた。

「困った事があつたら話してよ？無理すんな」

秋乃がいつもの僕の口調を真似て肩をポンと叩いた。

「ああ、何かあつたらな」

秋乃の言う、僕の難しい顔は彼女のちょっとした気遣いで簡単に

解けていった。一緒にいる事で、お互いに必要とし合えるならば、それはとても良い事だ。彼女に必要とされているかは、正直分らない。僕が無駄にお節介を焼いているだけで、実際はそれほど彼女の役に立っていないのかも知れない。それでも、僕にとって彼女は必要な存在であると、この時初めて明確に理解が出来た。それでも、僕らの間にはまだどうにもならない壁がある事も事実であった。

## 【第十二話】

通学路の木々も、徐々に鮮やかに染まりつつあった。本格的に秋が近づいていた。

あれから間も無く、秋乃はある程度構想がまとまったようで、連日美術室に籠って絵を描いていた。僕もちよこちよこと美術室に通っては、彼女が絵を描いている姿を見守っていた。たまに雑談をするが、基本的に彼女が集中している時は黙っている。一人でそつと帰る時もある。毎日少しずつ進んでいる絵を見る度に、秋乃の世界が見えて来るようで楽しかった。

「おい、屋上でご飯食べない？」

坂本が僕に声を掛けて来た。

「あれ、折原と秋乃は？」

「何か二人とも用事があるんだってさ。だから一人寂しく食べてる吉岡を誘ってあげたって事よ」

「坂本も一人だと寂しいんじゃないか？」

「まあ、そーいう事にしてあげるわ」

素直じゃない坂本と一緒に、僕は屋上へと向かった。

ドアを開けると、前より少しだけ肌寒くなつた風が吹き抜けていた。ここからだ、景色がよく見える。遠くの山の紅葉を見ながらの昼食と言うのも、なかなか風情があつて良いものだと思つた。

「なんかさ」

不意に坂本が口を開いた。

「折原、最近タイム出でないんだよね」

「ふーん？」

「スランプなのかな。本人もよく分かってないみたいだけどねえ」  
少し心配している様な、少し嬉しそうな、どちらとも付かないような表情で折原の事を語る坂本。僕は彼女の話に静かに耳を傾けていた。

「あいついつもバカやってばかりだけど、いざスランプとかなったやうと何か心配でき。何とかならないかな」

「喝入れてやったらどうよ？」

「そうだねえ。大会も近づいてるし、どうにかなればいいんだけどねえ」

坂本は心配した様子を見せながらも、楽しそうに話を進めた。僕はそんな坂本に、ある疑問をぶつけたくなった。

「坂本は折原の事好きなの？」

僕の問いに、坂本は完全に硬直した。

「えっ？ いや、その・・・」

顔を真っ赤にしながら答えに詰まる坂本。

「いや、ほんと分かんないけどさ・・・」

「ほう？」

僕は少し意地悪っぽくそう言った。

「分かんないけど、バカすぎて放っておけないって言うか？ って、何を語ってるんだ私は・・・」

いつもの強気な様子とは打って変わって、今の坂本はかなりしおらしくなっていた。普段からは想像も出来ない姿だ。ギャップのせいか、普段の坂本よりも可愛らしく感じた。

「ま、まあこの話は置いて！ てか、絶対他言無用ね？ 秋乃にもだからね」

慌てる坂本に念を押されて、僕は適当に頷いておいた。

「ところでさ、この前俺と折原ここで話してたじゃん？」

「あ、うん。 あったねえ」

「あの時さ、あいつ急に恋愛の話なんてしてさ。何かあったのかと思ってた」

「へえ。 何で急にそんな話に？」

「俺が聞きたいくらいだわ。 意味不明だ」

「と、とにかく、今日の事は内緒ね！ 言ったら殺す」

「今日の坂本にすごまれてもまるでも怖くないんだが」

僕は明らかに動揺する坂本の姿を楽しく見つめていた。何だかんだで、僕の以前の疑問は確信へと変わった。折原も坂本とは仲がいいし、僕から見たらいい具合のデコボコさが本当にお似合いだと思う。坂本の恋愛がうまくいく事を、僕は静かに願うばかりであった。昼食を済ませて教室に戻ると、折原が席に戻っていた。

「折原、用事は済んだのかよ」

「ああ、終わらせて来た。てかメシ食ってないから腹減った・・・」

「そうだろうと思ってな、ほれ」

僕はさつき購買で余分に買っておいたパンを折原に差し出した。

「マジで？いいの？」

「ああ、死ぬ前に食っとけ」

「持つべきは友だね！そうだろ坂本」

「え？ああ、うん」

折原の言葉に微妙な反応を見せる坂本。僕だけが、彼女の反応の理由を知っているかと思うと、何だか微笑ましく思えてきた。頑張れ坂本、何とかなるさ。僕は心の中で坂本にエールを送った。

「あ、ところで吉岡」

「ん？」

「帰りにちょっと話があんだけど、グラウンドまで来てもらっていいか？」

「何だよ？決闘の申し込みか？」

「おう、ぶちのめしてやんよ」

折原はパンを頬張りながらそんな事を言った。話したい事があるなら今言えがいいのに、変な奴だと思ったが、僕はとりあえず折原と約束をした。

放課後に、帰り支度を整えて外に出る。折原との約束があるため、僕はグラウンドに向かって行った。まだ部活も始まる前で、誰もいないグラウンドで折原が待っていた。何となく、いつもと違う様子を感じた。それが何を意味するのか、この瞬間は分からなかった。

「折原、話って何だよ？」

「ああ、呼び出して悪いな」

いつになく真面目な表情で折原が呟いた。折原の言葉にはいつもの切れは無く、何か重苦しい雰囲気を感じた。そもそも話があるなどと改まって僕を呼び出した事など、今までに一度も無い事であった。

「どうしたんだよ？」

あえて僕は普段通りに折原に接した。何か悪い事があったのかもしれないと思い、頭の中で色々な展開を想像して折原の反応を待った。しかし次の瞬間に折原の口から出た言葉は、僕の想像したどの出来事にも当てはまらなかった。

「俺、振られちゃったわ」

「・・・は？」

突然の出来事で、折原の言った言葉の意味が分からなかった。

「野川に告った。でも振られちゃった」

折原は頭をぽりぽりと掻きながら、そう言った。その表情は非常に複雑で、色々な感情が混ざり合っているような感じだった。

「え・・・？」

僕は自分の耳を疑った。折原が秋乃に告白した？何で？どう言う経緯で？頭の中で折原の言葉がぐるぐると回る。折原が秋乃に好意を寄せている事など、夢にも思っていなかったのだ。だからこそ、意味が分からなかった。彼の言葉が理解できなかった。ガーンと殴られた様な鈍い衝撃が、僕の頭の中を突き抜けた。

「振られたって、お前・・・」

言葉が出てこない。親友ならこんな時、きつと気の利いた言葉で慰めるだろう。「気にすんな」とか「飯でも食って忘れようぜ」とか。でも、僕は何も言葉が出て来なかった。想像と違い過ぎる現実を目の当たりにして頭の中が混乱していた。何故？何で？どうして？疑問ばかりが頭に浮かぶ。僕の頭は完全に処理能力を失っていた。先を越されたとか、そんな嫉妬の様な下らない感情ではない。本当に予想外過ぎて、意味が分からなくなっていたのだった。

「悪い、お前の野川に対する気持ちは知ってた。とにかく、事実だ。やっぱ野川にはお前がついてないと駄目だと思っわ。じゃあ俺は帰る！また明日な」

折原は早口でそう言うと、いつもの様に僕の肩をポンと叩いて走り去っていった。僕は折原の背中が見えなくなるまで、ただ呆然と立ち尽くしている事しか出来なかった。

「折原・・・」

僕の言葉は、グラウンドに吹く風にかき消された。ただ静寂だけが、そこにあった。



## 【第十三話】

どのくらい時間が経ったのだろうか。僕はずっとその場に立ち尽くしたままだった。考えがまとまらない。一体どうしたらいい？僕は明日も折原に会うだろう。その時に彼に何と声を掛けたい？いつも通りに何事も無かったかのように・・・そんな事は無理だ。分りきっている事だ。今、僕の胸の中にある気持ちを整理しない事にはどうにもならない。自分自身がよく分からないと言う事など、これまでに数え切れないくらいあった。何だかんだでそれはそれだと割り切ったり、分かっている事も分からない振りをして逃げたり、そうやって今までのほとんどの事は乗り越えて来たつもりだ。だけど、今は違う。本当にどうしたらいいのか分からない。どうしたいのかも分からなかった。

僕の頭の中は混乱し続けていたが、ふと秋乃の顔が浮かんだ。彼女は一体、今どんな心境でいるのだろうか。昼に教室に戻って来た姿は見たが、あれからは口を聞いていない。彼女も少なからず、いつもと違う状況にある事は想像出来たが、今は自分の事が手一杯で秋乃の事を細かく考える余裕は僕には無かった。

重い足を無理矢理に動かして、人が増え始めたグラウンドを立ち去る。相変わらず何もまとまらないまま、僕は帰り道を歩いていた。そんな僕の背後から、小さな声が響いた。

「直人、どうしたの？具合悪い？」

声の主は秋乃であった。知らないうちに僕は相当うなだれながら歩いていたのだろう。心配そうに僕を見つめる秋乃の顔を見たら、心臓の鼓動が一気に速くなるのを感じた。今ここで会ってしまったとは、偶然とは皮肉なものだ。言葉が頭に浮かんで来なかったが、それでも僕は平静を装って返事をした。

「いや、別に。何とも無いよ」

「そっか。じゃあ一緒に帰ろっか」

「ああ」

今この状況で秋乃と並んで歩くのは、正直心臓に悪い。折原との事は知らない事にしておいた方がいいと思ひ、僕は口を閉ざした。秋乃に気付かれない様に、半歩彼女の後ろに下がり、大きく深呼吸をした。何度か繰り返して、ようやく僕の呼吸は落ち着きを取り戻し始めていた。

歩きながら、僕も秋乃も無言だった。いつもは、取り留めの無い会話が続くが、それも無い。お互いに、不自然過ぎるくらいの沈黙であつた。このまま不自然な状況が続けると、折原と秋乃の間に起こつた出来事を知っているのがばれてしまうのではないかと思ひ、僕は秋乃に声をかけた。

「今日も絵描いてたの？」

我ながら物凄く不自然で、分かりきつた問い掛けだ。しかし、今の僕の精神状態を考えると、これでもギリギリであつた。

「うん」

秋乃から予想通りの答えが返つて来る。

また二人の間に沈黙が生まれた。無理やりに捻り出した会話は、全く続かない。

それからしばらく歩き続けたところで、秋乃が急に立ち止まつた。

「私さ」

せつかく落ち着きを取り戻しかけていた心臓の鼓動が、また一気に速くなるのが分かつた。僕は息を飲んで、秋乃の次の言葉を待つた。

「折原君に告白されたんだ」

来た、と思つた。予想出来た言葉に対しても、僕の心臓は過度の反応を見せる。秋乃の言葉に対して、かける言葉が思いつかなかつた。普段何気なく使っている言葉と言う物が、こんなにも難しく感じた事は今までに無かつた経験だつた。

「・・・でも、断つちやつた」

何も言わない僕を尻目に、彼女は一人でそう続けた。

「どうして？」

僕は彼女の言葉に対して、最低の返しをした。言うつもりも無かった言葉が、勝手に口から飛び出してしまった。だが恐らく、これが僕の一番気になっている事で、一番知りたい事なのだろうと思っ

た。

彼女は僕の目を見て少し表情を緩めた。

「どうしてだろう」  
彼女の少し寂しげな微笑みと呟きが、秋の夕焼け空に静かに消えていった。彼女は静かに歩き出し、僕の前に出た。その背中が少しだけ切なく映った。

僕は、そんな彼女の姿を見て、自分の感情が抑え切れなくなった。「俺さ」

僕の意味とは関係なしに、言葉が溢れる。話すつもりは無かった。考えても来なかった。考えないようにしていた。僕と秋乃は幼馴染で、それ以上でもそれ以下でもない。僕の本当の気持ちは、秋乃をきくと悩ませる。彼女の枷にはなりたくない。そう自分に言い聞かせて、ずっと飲み込んでいた気持ち、一気に溢れ出した。

「秋乃の事が好きだ」

二人を包む時が止まった。周りにある何もかもが色褪せて行くような錯覚が、僕の全身を包んでいった。一瞬の時間が、物凄く長い時間に思えた。このまま永遠に時が止まってしまふのではないかと思っくらしいに。

「私も」

振り返った彼女が返してくれたその一言が、僕の時間を動かさず、景色に色を戻した。ほっとした様な、優しい微笑みがそこにあった。僕は、彼女の華奢な体を抱きしめ、そっとキスをした。

それから、家に帰るまでの出来事はあまり覚えていない。自宅の部屋に戻った瞬間、激しい自己嫌悪が僕を襲った。

僕は、秋乃の事が好きだ。恋人にしたいとか、どう言う感情なのかは分からないが、とにかく彼女の事が好きだった。でも、僕が気

持ちを伝える事で、彼女の心に余計なものを植え付けてしまおうのではないか。彼女が夢を叶える上で、それは枷にならないだろうか。そんな事ばかり考えて、自分の気持ちを伝えずにいた。だけど、それは単なる言い訳に過ぎなかった。僕は、彼女に否定されるのが怖かった。だから、ずっと何も言わずに彼女の傍にいただけだった。そして何よりも許せなかった事がある。

「僕は、折原を利用した……」

空しい呻きが、部屋の中に消えて行く。そう。彼の行動が無かったならば、今まで通り僕は何も言わずに彼女の傍にいただろう。折原が秋乃に告白した事により、僕の中には少なからず焦りや不安が生まれた。彼女の事を好きな人間が現れても、それは何もおかしい事ではない。それがたまたま、親友の折原だっただけで。それがたまたま、失敗に終わっただけの事で。何も言わずに彼女の傍に居る事は出来なくなるのではないか、そう考えると不安だった。だから僕は、秋乃に気持ちを伝えた。

折原はきつと、分かっていたんだ。自分が振られる事も、僕と秋乃ならうまくいく事も。

「やっぱり野川にはお前がついていないとダメだと思っわ」

折原が僕に掛けた言葉が、何度も頭の中でリピート再生された。

折原の話を聞いたあの時、僕は本当に予想外過ぎて混乱した。何もかも分からなくなっていた頭の中で、僕はひとつだけはつきり覚えている事がある。それは……ほっとしたと言う感情。あの時は何も気付かなかった。でも、思い返してみると、はつきりと覚えていいる。あの時僕は、確かにその感情を心の片隅に抱いていた。親友相手に抱いてはならない、卑怯な感情を。

僕は最低だ……。本当に、救えないくらいに。

## 【第十四話】

あれから数日が過ぎた。僕はまだ、自分の気持ちに整理が付かないままでいた。

いつも通り朝に折原を拾って学校に行く。何気なく会話も交わす。しかし、あれからと言うもの、折原とはまともに向き合えない毎日が続いていく。折原だけではない。秋乃や、坂本とも。あの出来事は、言ってしまうえば僕ら全員に関わる問題だと思ふ。折原は秋乃の事が好きで、坂本は折原の事が好きで、僕と秋乃は付き合う事になつて。それぞれの関係が複雑に絡み合つていて、一度に解決する事など出来ない。だから僕は、知らぬ間に向き合わずに彼らを避ける道を選んでしまつていた。

今日も、長い一日が始まる。学校で彼らと顔を合わせるのが、苦痛で仕方がなかった。話をするにも何を話していいのか分からないし、そもそも何から話せばいいのか見当も付かない。いつまでこうしていればいいのか。この状況を打開するとしたら、それは僕が動くしかない事は理解している。だけど、その勇氣は今の僕には無かつた。

昼休みを告げるチャイムが鳴つた。他の生徒たちは、皆嬉しそうに昼食を広げて会話を花を咲かせる。僕は教室にいる事自体が気まぐずく、そそくさとその場を後にしようとした。

「吉岡、ちよつと」

僕はどきつとして振り返ると、そこには怪訝そうな表情の坂本がいた。

「昼一緒に食べよ。屋上でもいこつか」

明らかに、昼と一緒に食べようとする誘う人間が見せる表情ではなかつたが、僕は断る事も出来ずに坂本に促されるまま屋上へと向かつた。

「今日は曇つてるねえ」

坂本はそう言いながら、いつもの様に景色が一番見える場所に腰を下ろした。立ったままの僕を坂本が手招きする。呼ばれるままに僕は坂本の隣に座った。

「まるで今のあんたの心の中みたいじゃない？」

僕の顔を覗き込みながら、坂本はそんな事を言った。坂本は実は全部知っているのだろうか。折原か秋乃から話を聞いた？僕は疑問に思った事を率直に尋ねてみた。

「坂本、何か話聞いたのか？」

「え？話って何の事？てか、最近元氣無さそうだったから適当に言ってみただけど、何？何かあった？」

僕はやってしまったと思った。坂本の言葉を聞く限りでは、何も知らされてはいないようだ。だが、どうする？ここであの話をするには、結果的に坂本の事も傷つけてしまう事になるだろう。伝えるべきか、伝えずに誤魔化すべきか。僕は悩んだ。

そんな僕の様子を見て、坂本はポツリと呟いた。

「何か最近、変だよ。折原も秋乃もあんたも。皆していつもと雰囲気が違う」

僕はまだ何も言えなかった。

「私の勘違い？違うよね。吉岡、あんた何か辛そうなんだよね。何がって言われると分からないけどさ。とにかく、最近疲れてない？」

「ああ、ちよつとな」

僕は何とか言葉を搾り出した。坂本はそんな僕を見て、ひとつ大きなため息をついた。そして自分の頬をパンパンと叩き、真剣な表情に切り替えて僕に言った。

「吉岡、私の目を見る。うむ。私らって、そんなに気を遣う関係じゃないよね？私が救い出してやるから、話したい事があるなら話しちゃいなって」

彼女らしい真つ直ぐな何気ない言葉。自分で自分を追い詰めていた今の僕にとっては、どれほど優しく響いただろうか。僕は、坂本に何を話しても驚かないでくれと前置きして、ゆっくりと静かに全

てを話した。折原が秋乃に告白した事。僕も秋乃に告白した事。僕と秋乃が付き合う事になった事。僕が今自己嫌悪に陥っている事。何もかも、洗いざらい話した。

坂本は動揺する事も無く、僕の話に真剣に耳を傾けていた。全てを話し終えた時、僕は心の重圧から解放された様な気持ちになった。「なるほど、色々あったね。でも取り敢えずはおめでとぅって言うておくわ。ちゃんと秋乃の事大事にしてやるのよ」

「・・・ああ」

いつも通りの笑顔を見せる坂本に、僕は静かに返事をした。坂本に話した事で、解放された部分もある。だが、僕はまたひとつ、大きな罪を犯してしまった。

「それにしてもなあ」

坂本はすつと立ち上がり、僕に背を見せた。彼女は、ずっと遠くの景色を見つめていた。

「あいつが秋乃の事好きだったのは、知らなかったなあ」

そう呟く坂本の声は、微かに震えていた。

「まあ、私は見ての通りガサツだし。秋乃はいい子だし、可愛いし、仕方ないか」

坂本は、僕の方を振り返り、無理に笑って見せた。彼女の頬は、涙で濡れていた。そうだ、僕はこの話をする事で彼女を傷つけてしまった。彼女の折原への気持ちを知っていたにも関わらず、避ける事が出来なかった。これで良かったのか？あの出来事の一部始終を坂本に話した事は、正しかったのか？僕の頭の中で、また疑問がぐるぐると回り始めた。

「吉岡！」

俯き加減でそんな事を考えていた僕は、彼女の言葉にはっと我に返った。

「話さなければ良かったか思ってる？」

「・・・少し」

「何で？」

「いや、だつてさ。坂本の事、傷つけてしまったし。何て言ったらいいか分からないけど、その、ごめん」

そこまで言ったところで、僕の頭に鈍い衝撃が走った。坂本のゲンコツが、僕の頭にクリーンヒットしていた。

「あのねえ。私はね、蚊帳の外にされる方がよっぽど傷つくんだけど？」

そうか。坂本は僕らの雰囲気を見て、自分だけ部外者扱いになっている事を何となく感じ取っていたのかも知れない。彼女は強い。こんな状況でも、他人を気遣えるだけの強さを持っている。そんな彼女に、僕は伝えなければならぬ事があった。

「坂本」

「ん？」

「話聞いてくれて、ありがとな」

僕の言葉を聞いて、坂本は優しく微笑んだ。

「私の方こそ、ありがと。あー、これで振られなくて済んだわ。要するに、ノーカウントって事。黒歴史を残さずに済んだ」

彼女はそう言って笑った。

「てか、さっきのはナシね。ナシ！私のあんな姿、恥ずかしいっからありやしないからねえ」

「ああ、俺の心の中だけに残しておく」

「・・・強制消去してあげようか？」

「すみませんでした・・・」

そんなやり取りをして、僕は笑いあつた。

教室に戻る途中、坂本が口を開いた。

「折原はねえ、そんな事いちいち気にするようなヤツじゃないと思うよ。一回ちゃんと話してみれば？」

「そうするわ」

「それとねえ、秋乃も何か元気なかつたよ。あんた彼氏なんだから、ちゃんと秋乃の様子も見てやらないと。泣かせたら三倍痛めつけるからね？」



「肝に銘じておきます・・・」

「よかるう」

僕は、今回の出来事を坂本に話して良かったと思う。結果的に坂本を傷つけた事は事実だが、彼女の言葉を信じて前に進むしかない。未だに向き合えない折原とも、あれからまともに話をしていない秋乃とも。

僕に勇気くれた坂本には、感謝をしても仕切れないだろう。だから、僕らの環境を以前の皆で笑って過ごせるような状態に戻す事で、彼女への答えにしようと僕は思った。

## 【第十五話】

その日の放課後、僕は覚悟を決めて折原と話す事にした。既に折原は部活に向かった。坂本も秋乃もいない。僕は頭の中で一通りやり取りをシミュレートして、グラウンドへと向かった。

グラウンドでは、折原がウォーミングアップを始めていた。まだ他の生徒たちの姿は少ない。話すなら今しかないと思い、僕は折原に声を掛けた。

「おーい、折原」

僕の声に反応した折原は、不思議そうな顔をしながら歩み寄ってきた。

「何だ何だ？どうしたよ？」

折原はいつも通りの屈託のない反応であった。

「ちょっと話したい事が。悪いけど時間取れるか？」

「おう。何だよ改まって」

僕は、折原を連れてグラウンドの隅の方にやってきた。話す事を色々と考えてきたが、緊張でほとんど忘れてしまった。だが、幸いな事に一番言いたかった事だけは覚えていた。

「折原、すまん」

僕は思いつきり頭を下げた。不思議そうな表情をしていた折原が、今度はあたふたし始めた。

「お、おい。いきなり何だ？何がすまんのよ。お前何かしたっけ？」

「いや、あのさ、何と言うか」

「は？何の話だかさっぱり分からん。俺の弁当盗み食いた？ノートに落書きした？あと何かやらかしてたっけ？」

「・・・どれもやったことないんだが」

こんな状況でもボケる折原。本当に何の事か分かっているのか、さっぱり読めなかった。

僕は意を決して、折原に本題を切り出した。

「いや、秋乃の事なだけどさ」

秋乃と言う単語を聞いて、折原の表情が途端に真剣になった。その様子に少し物怖じしてしまいそうになった僕だが、もうここまで来たら勢いで切り出すしかなかった。

「あのさ、ほんと折原には何て言っつていいか分からないんだけど」「ふむふむ」

「・・・俺もあの後、秋乃に告白した。で、付き合う事になった」  
ようやく伝える事が出来た。僕の言葉に、折原はさっきの表情のまま固まっていた。無言のままの折原から、痛いほどにプレッシャーが伝わってくる。いつその事ぶん殴られたりした方がマシだ。折原と向き合うその時間が、物凄く長い時間に思えた。

「マジで！良かったじゃんか！」

折原の口から、僕の予想もしていなかった言葉が飛び出した。

「は？お前何を言っつて・・・」

「え？いや、マジで良かったじゃん。今度皆で祝つか！」

「いや、お前ほんと何を？てか、それ本心かよ」

「本心？意味が分からん。普通に良かったじゃねえか。それ以外に何があるよ」

折原はきょとんしながら僕を見つめていた。

「だっつてさ、お前も秋乃に告っただろ！その後に俺も告っつて、付き合う事になっつて、ふざけんなっつて感じないのかよ」

「ああ、そう言っつ事か」

折原はおちやらけていた表情から一転して、真面目な表情に変わった。少し考える様な素振りを見せて、そしてゆっくりと口を開いた。

「だから、お前ここ数日俺の事避けてたんだろ。変な自己嫌悪に陥っつてたんじゃないのか？」

折原の発言は的を射ていた。もうこうなれば洗いざらい話すしかないと思ひ、僕は今考えている事を折原に全てぶつつけた。僕は折原

を利用した卑怯者だという事も、何もかも。

僕の話に黙って聞いていた折原だったが、一通り話を聞いたところで突然笑い出した。

「吉岡、お前はほんつとにバカだなあ。そんな事で悩んでたのかよ」「そんな事って何だよ」

「俺言っただろうが。野川にはお前がついてないとダメだって。アしはなあ、もう告っちまえよって意味で言っただけだ」

「いや、意味分らないし。だったら何で折原は秋乃に告っただよ」

「そりゃ、好きになっちまったもんは仕方ないだろ。お前が野川の事好きなのは前から感じてたけど、そこだけは仕方なかった。むしろ抜け駆けみたいになって、謝らなきゃいけないのは俺の方だと思っただけど、あの時はさすがに余裕がなかった。すまん」

違う。折原の行動は何も間違っただけだ。本当に謝らなきゃいけないのは、僕だけでいいはずだ。次に何を言おうか考えていると、折原は続けて話し始めた。

「俺はさ、振られる事は分かってたからいいんだよ」

「は？」

「だってさ、野川もお前の事好きなんだろうなって思ってたし」

「だったら何で」

「ちょっと前から部活で調子が悪くてな。で、俺なりに色々考えた。つかえてる物は何だろうって」

僕は坂本が言っていた事を思い出した。折原のタイムが出ないと、坂本が心配していた。折原は、この事を言っているのだろうと思っ

た。  
「で、俺は自分で気持ちの整理をつけるために行動しただけ。結果として野川の事も悩ませてしまっただろうし、お前の事も悩ませた。俺は吹っ切れたけど、身勝手な理由だよな」

「・・・そんな事ないって」

折原は、僕が考えているよりもずっと色々と考えていて、そして

大人なんだと思った。

「てかさ、こんな事があつたけど」

「ん？」

「俺らこれからも普通にやっていけるよな？」

「むしろそうして行きたい」

僕が言いたかった事は、折原が言ってくれた。これからもこのままで。僕が今一番望んでいる事だ。折原が折原でいてくれて良かった。僕は強くそう思った。

「ところでさ」

突然辺りを気にするようにしながら、折原が僕に耳打ちをした。

「今回の話は坂本には内緒な？」

「どの部分を？」

「いや、俺が野川に告つた辺りとかさ」

「まずいところなのか」

「何となく、な。とにかく内緒だからな」

念を押してくる折原に、僕は黙って頷いておいた。既に全て話してあるとは、とても言えなかった。だが坂本の事だから、知っていたとしてもその話題に触れるような事はないだろう。

「そんじゃ、練習行つて来るわ！」

じゃあなと手を振り立ち去る折原の背中に、僕は声を掛けた。

「坂本が心配してたぞ。最近折原のタイムが悪いつて。ちゃんと練習しろよ」

「ああ、知ってる。あいつも心配症だから、悪い事したな」

「タイム出せば安心するだろ」

「ああ、練習して結果で応えてやるわ」

折原は僕にそう告げると、駆け足でグラウンドに戻って行った。その背中に、迷いはなかった。吹っ切れたと言っていたが、本当にそうなのだろう。変な話だが、僕は今日の折原は格好良いと思った。それに比べて、僕は考えるのも嫌なくらいに格好悪くて仕方がない。折原には言えなかった、あの時抱いてしまったほつとしたという

気持ち。消したくても消せないその記憶が、僕の胸に突き刺さっていた。だが、僕は決めた。消したいくらい恥ずかしい過去は、これからの行動で消していこうと。消せないまでも、薄れさせて行けるように頑張ろう。そうする事で、折原へのせめてもの償いにしよう  
と僕は思った。

動き出した季節に、僕らは戸惑う。だけど、それぞれ前に向かって進んでいけると思う。折原も、坂本も、秋乃も。もちろん僕も。関係は変わっても、僕らは僕らのままでいたい。いつも笑い合っていていられれば、それが一番いい。

## 【第十六話】

折原との話を終えた僕は、解決しなければならぬもう一つの事に向かおうとしていた。そう、秋乃とも話さなければならぬ。秋乃に告白したあの日以来、一緒にはいたものの秋乃とすらまともに話していなかったのだ。周りから見たら、僕は独りで塞ぎ込んでいた様に見えていたかも知れない。僕のせいでおかしくなっていた僕らの環境は、秋乃との話が済めば元通りになるだろうと僕は思った。グラウンドを後にして校舎に戻ろうとしたら、昇降口のところでも偶然秋乃の姿を見つけた。

「よっ」

僕は秋乃の背中に声を掛けた。

「あれ、直人。何してたの？」

「これから美術室行こうと思ってたんだけど、もう帰るの？」

「うん、今日はもう帰ろうかなと思ってね」

「じゃあ帰るか」

僕は秋乃と一緒に昇降口を出た。

さて、何から話そうか。毎度の事だが、僕は話をする前に一度相手との会話の内容をシミュレートする癖がある。最初からある程度のやり取りを想像しておけば、相手との会話に困る事はないだろうと思うからだ。だが、さっきの折原の事といい、僕のシミュレートはあまり役に立っていない気がしないでもない。色々と考えを巡らせていたら、秋乃が先に口を開いた。

「直人、何かあった？」

「え？」

「顔。表情が柔らかくなってる」

「そう？」

僕はここ数日、大分難しい顔をしていたのかも知れない。折原との件が一段落ついたことで、少しだけ緊張が緩んでいたのだろう。

「うん。なんかあの日からずっと悩んでるみたいなき感じまで元気がなかったから。でも、何か聞いちゃいけない雰囲気だったし……」  
「悪い。もう大丈夫だ、多分」

僕はまだ秋乃に話す事がまとまっていなかった為、適当な返事をした。

「あのさ」

突然秋乃が立ち止まった。さっきまでの柔らかい表情が、急に堅く強張ったものになっていた。

「もし直人が、私と付き合う事で悩む事があるなら、何も無かった事にしてもいいんだよ？」

秋乃は静かにそう言った。僕は一瞬、心臓が飛び出しそうな感覚を覚えた。話す事はまとまっていけないけど、この状況では悩んでいても仕方がない。僕は思っている事を素直にぶつける事にした。

「そうじゃない。それは違うんだよ」

「だって、あれからほとんど話もしてないし、ずっと辛そうな顔してたから。色々考えてたら直人の事が心配になってきて……」

「確かに悩んでた。でも、秋乃との事じゃなくて、俺自身の事なんだ。あの日折原が秋乃に告白した事、実は折原から聞かされた。それで、色々分からなくなって……」

僕は、自分で何を言っているのか分からなかったが、何とか言葉をつないだ。

「坂本は折原の事好きで、折原は秋乃の事が好きで、俺たちは付き合い合う事になって。自分たちの中で関係が複雑に絡み合う状況になって、それを全部知ってたから悩んでた。どうしても、素直に喜べなかった」

秋乃は、僕の言葉を黙って聞いていた。一通り僕の話聞いた秋乃は、そっと微笑んだ。

「直人は、いつも一人で悩むんだ」

「え？」

「無理すんな」



秋乃が、いつもの僕の口癖を真似する。僕は、何も言えずにいた。「誰かに話す事で楽になる。その事を教えてくれたのは直人でしょ？だから、直人も一人で無理すんな」

そう言つて秋乃は僕の手を握つた。

「ああ」

僕は静かにそう答えた。僕が悩んでた事は、坂本の優しさ、折原の潔さ、そして秋乃の小さな手の温かさで完全にとかされていった。僕は秋乃の手を、そつと握り返した。

「帰ろつか」

「ああ、そうだな」

僕は歩きながら、あの日あつた事から今日の出来事まで、失つていた時間を取り戻すかの様に秋乃に話をした。坂本にも折原にも言えなかつた事も、秋乃になら話せる気がした。

「俺さ」

「ん〜？」

「折原が振られたつて知つた時、何かほつとしちゃつたんだよな。最低だよな、俺」

唯一胸につかえてた気持ちを引き出してみたが、言つた後で少しだけ後悔し、秋乃の反応が怖くなつた。自分で言つておきながら、改めて自分はひどい奴だと痛感した。

「何で？」

秋乃が僕に尋ねる。何で？そう言えば何でだろうか。そんな事は考えていながつた。あえて考えた事もなかつた。だが、その答えはすぐに頭の中に思い浮かんだ。

「・・・秋乃の事、他の奴に取られたくなかつたからだよ」

ああ、言つてしまった。我ながら口にするのも恥ずかしいが、これが本心だ。つくづく、秋乃に隠し事は出来ないなと思つた。隠したい事でも、大抵こんな感じで引き出されてしまう。気付くといつても、秋乃のペースに乗せられてしまう事が多い気がした。

僕の言葉を聞いて、秋乃は静かに笑つた。

「でも、それはきつと当たり前の感情。私も多分、そんな状況になつたら同じ事を感じると思う」

「坂本が相手でも？」

「ん、理央ちゃんか。理央ちゃんになら譲ってもいいかな」

「おい」

僕らはそんな事を言つて笑い合つた。

「でも、やっぱり理央ちゃんは折原君の事好きだったんだね」

「やっぱりって、知つてたのか？」

「ううん。でも、見る限りではお互いに関係だなあつて感じだつたし。だから、折原君に好きだつて言われた時はほんとにびつくりした」

「折原はいつも予想外だからな・・・でもあいつらしいっちゃあいつらしいよ」

「そうだねえ」

いつの間にか、いつも通り、いやそれ以上に僕らは色々なことを話していた。胸につかえていた物も取れ、やっと僕らはいつも通りの日々に戻る気がした。ほんの数日だったが、大分長く離れていた様な、そんな気がした。

「私さ、皆の事大好きなんだよ」

「俺もだよ」

「でも、直人はまた違う。直人は私の中で特別な存在なんだ」

「どんなところが？」

僕は少しだけ意地悪な質問を試みた。

「色々。沢山あるから分からない。でもね、一つだけ分かつてる事はあるんだ」

「ん？」

「私は、直人の存在に救われてる。辛い時に、何気なく掛けてくれる言葉とか気遣いにほつとする」

珍しく、自分の気持ちを率直に話す秋乃。僕は、何だか照れくさくなつて何も返す事が出来なかつた。何を言つていいかわからず、

恥ずかしさから頬を掻く僕に、秋乃が静かにこう言った。

「これからもよろしくね」

そこには久しく見る事がなかった、彼女の屈託のない笑顔があった。その優しい表情に、僕は昔の秋乃を重ね合わせた。ああ、絵を描き始める前の秋乃みたいだ。僕はそう感じた。

絵を描くと言う事は、彼女を少し変えてしまったかも知れない。期待がかかる中でそれを続ける事は、大変な事なのだろう。だけど、僕が傍にいる事で彼女の本当の笑顔を取り戻せる事が出来るのかも知れない。僕は隣で笑う彼女に、静かに問い掛けた。

「秋乃、将来の夢はある？」

「画家になる・・・多分」

「そうか」

彼女の答えは分かりきっていた。本当は質問しなくても分かっていた。だけど、僕はある事が言いたいが為に、あえて質問をしていた。

「直人の夢は？」

「俺の夢は、秋乃が夢を叶えるのを見届ける事だ」

「じゃあ尚更頑張らないとね」

「無理はすんな」

僕に微笑みかける彼女に、僕はいつもの言葉を返した。

僕は決めた。秋乃の傍で、彼女の夢を応援し続ける。それが僕にとつての夢であり、今の僕が一番望んでいる事だ。彼女の傍で、辛い事も嬉しい事も、何でも共有していければいい。傍から見たらつまらない男かも知れないが、僕の立ち位置はここでいい。どんなに見事な像があっても、地べたに置かれていたのでは格好がつかない。立派な土台があつてこそ、その上の像も輝く事だろう。僕はその土台になる。彼女が自分らしく輝ける場所を、僕が作っていく。そう決めた。

## 【第十七話】

次の日、ここ数日のぎくしゃくした雰囲気は消え、僕らの間に笑顔が戻った。気持ちに整理をつけた折原。気持ちを心の奥に飲み込んだ坂本。先を見据えて進みだした秋乃。言いたかった事を吐き出して楽になった僕。それぞれ様々な気持ちを抱えながら、今日という新しい日を迎えている。

僕は折原にも秋乃にも、言いたい事は言えたと思う。全部と言うわけにはいかなかったけど、それはこれからの僕の行動で示していることと決めている。今は何よりも、いつも通りの僕らに戻れたという事に、喜びを感じている。

「よっ」

放課後、帰り支度を整えていた僕の背後から、陽気な声が響いた。

「ああ、坂本。どした？」

「ん？特に何ってわけじゃないけど、うまくいったっばい？」

「ああ、折原と秋乃の件？」

僕の言葉に、坂本はうんうんと頷いた。

「おかげさまで、二人にはちゃんと話せたよ」

「そっか」。今日は皆で普通に話せてたから、吉岡が何とかしたんだろうなと思ってたけど。とりあえずGJ！」

嬉しそくに僕の肩を叩く坂本。元はと言えば僕が原因なわけだから、むしろ当然の事をしただけのような気がする。

「まあでも、色んな事があってもこうやって何も無かった様に帰れる所も、うちの美点よね？」

「そっだなあ」

僕は坂本の話の聞きながら、考え事をしてた。折原と話した時に、彼が言っていた事を伝えるべきかと。坂本は折原が不調である事を心配しているだろうから、早く安心させてやりたいという気持ち僕にはあった。そんな考えを巡らせている時、折原の言葉が

僕の記憶の中に蘇った。

「結果で応えてやる」

そつだ、折原は坂本の心配する気持ちを知っている上で、結果で応えると言っていた。あいつがそう言うんだから、僕がここで坂本に伝えてしまうのは野暮と言うものだろう。坂本を安心させたいという気持ちはあったが、僕はその言葉をぐっと飲み込んだ。

「どした？」

坂本が僕の顔を不思議そうに飲み込んだ。考え事をすると、会話の途中でもそつちのけで時間を止めてしまうのが僕の悪い癖だ。

「いや、何でもない」

「そつか？じゃあ私も練習行って来るわ」

「ああ、折原によるしくな」

小走りで駆けていく坂本の背中を見送り、僕は秋乃がいる美術室へと向かった。そう言えば秋乃と付き合う事になったあの日以来、何か気まずくて美術室に顔を出さなっていた。いつもの日課だった美術室に向かう廊下を歩く事も、随分と久しぶりに思えた。

「秋乃、いるか？」

教室のドアをノックして、中に入る。

「直人、久しぶりじゃない？」

「ははは・・・」

秋乃の言葉に、僕は苦笑した。

近くの机に荷物を降ろし、僕は秋乃が描いている絵を覗き込んだ。

「あれ？」

「ん？」

「この前描いてた絵と違わない？」

「うん」

「前の絵は？」

「あれは没にしちゃった」

「何で？」

「何でも」

秋乃はそう言って微笑んだ。せつかく描き始めた絵を、何故途中で辞めてしまったのだろうか。疑問に思ったが、彼女の表情を見る限りでは、何かマイナスの理由で捨てたのではないようだ。

「テーマを変えたの？」

「テーマと言うか、描きたい絵が変わったから思い切ってやり直した」

「はあ」

「何その気の抜けた反応は」

「いや、何かもつたいなと思って」

僕の反応を見て、彼女はまた笑った。僕からしたら、純粹にもつたないと思ってしまう。ただそれは僕が持っている感覚である。絵なんて夏休みの宿題や、美術の授業でしか描いた事がない。特に描きたいわけでもないから、さっさと終わらせてしまおうと言う気持ちで先に立つ。だから、途中で変更するなどという考えがそもそもないのだ。秋乃は僕などとは全く違う。絵に関しては天と地ほどの差がある。技術も考え方も。秋乃には秋乃の考えがあるのだろうから、僕はそつと見守るしかないのだ。

「今度は何を描くの？」

「ん、内緒」

「仕方がない、完成を楽しみにするか……。次のコンクールっていつだっけ？」

「次は冬だから、十二月かな。結果は冬休み明けくらいじゃない？」

「あと二ヶ月くらいか。忙しいだろうけど休みながらやれよ？」

「今回ののは大丈夫そうだよ。早く完成しそう。多分だけど」

「それならいいんだけどな」

僕はそれだけ話して、あとは邪魔にならないようにキャンバスに向かう彼女の姿を黙って見つめていた。

僕はふと考えた。僕と秋乃は付き合う事になったが、僕は秋乃のどんな所を好きになったのだろうか。改めて考えるとよく分からない。だけど、キャンバスに向かう真剣な表情の彼女の横顔には、

何か心地良さを覚える。静かに応援したくなるような、そんな気持ちだ。一人で色々なものと戦う彼女に内在する強さ、時々垣間見える弱さ。彼女のそう言う所はとても人間らしく、魅力的に思える。

僕は、人間は完璧な存在になんてなれないと思う。だからこそ、誰かに頼り、寄り添いながら生きて行くのではないか。秋乃に弱い所が無かったら、きっと僕がいなくても彼女は一人で何でも出来るだろう。きっと人を好きになると言うことは、その人の中に自分の居場所を見つける事なんじゃないだろうか。何もかも平凡で夢も無い僕は、夢を持って生きる彼女の存在によって足りない部分が満たされている気がする。彼女の弱い部分は、僕が支えていければと思う。僕と秋乃が付き合っている事は、きつとお互いにとって意味がある事だと思う。そう思いたい。

「何か考え事？」

「ちよつとだけね」

「分かりやすいんだから」

秋乃はそう言って静かに笑った。

僕にとって心地よい世界は、確かにここにある。色々な事があって疲れたところはあるけれど、そんな疲れも何もかも取り除かれるような、そんな不思議な世界がここにある。

## 【第十八話】

「吉岡」

「あん？」

背後から響いた間の抜けた声に、僕も同じ様な声で返事をした。

眠そうな目をこすりながら、折原が立っていた。

「進路希望調査どうする？」

「ああ、そう言えばそんなもんが来てたな・・・」

「うむ。とりあえず書いて出さなきゃいけないだろ。どうすつかコレ」

「いつまでだっけ？」

「週明けまでっばい。何も考えてないからマジでヤバイ」

そう言えば僕らは来年は受験生だ。折原の言葉を聞く限りでは、何も考えていないようだ。しかしそれは僕も同じ事だ。今の今まで、来年は受験だという事も意識の外だった。僕らの学校は、県内でもそこそこの進学校だ。教師たちは二年に上がった頃から、口を開けば受験受験とうるさく言っていたけど、僕の耳はそんな事はずっとスルーし続けていた。さすがに、そろそろちゃんと考えないといけないなと思う。でも、考えるとしてもどう考えよう？やりたい事がある訳でもないし。将来どうなりたいかなんてまだ分からないし。何か一つでも見つかったらいいれば楽なのにな。僕はそう思った。

「おい、秋乃、坂本」

僕は秋乃の席で話している二人に声を掛け、手招きした。

「どした？」

坂本が不思議そうな顔をしながら尋ねる。

「これだよ、これ」

「あ」

折原が持つ進路希望調査のプリントを見て、秋乃も複雑な顔をし



た。僕らはまるで会議でもするかの様に、一つの机を囲んで向き合っていた。

「さて、こいつをどうするかだな」

折原がいつになく真剣な表情で呟いた。

「うちらも来年は受験生か……。まだ高校受験終わったばかりって感じなのになあ」

「だよ。早いよねえ」

坂本の嘆きに、秋乃がうんうんと相槌を打った。

「ところでさ、皆大学行くんだろ？」

僕はそう尋ねた。

「俺はまあ、その予定だけでも。ただ、どこに行きたいかって言うと分からんわ」

「私も。どんな大学があるのかすら知らないし。秋乃は美大じゃないの？」

「美大かあ。入れるかな？」

秋乃は少し考えるような素振りですわえた。

「秋乃が入れなかったら、他の人絶望的っしょ……。全国で銀賞が何を言うか」

「痛い、痛いよ〜」

坂本が秋乃を捕まえてぐりぐりと攻撃し始めた。確かに坂本が言うように、秋乃なら問題無く入れるとは思っただが。

「吉岡は？」

「え？」

「え？じゃないでしょ。吉岡はどこ行きたいのよ」

「俺も分からん」

僕は坂本の問いにはつきりと答えた。結局のところ、秋乃以外は予定は未定と言う感じだ。僕は少しだけほっとした。これで皆が将来の事などをしっかり考え、既に進路も決めていたとしたらどれほど焦った事だろうか。焦らなきゃいけないのだからけど、周りの仲間が同じ様な状況で良かったとは思っ。

「まあ、何とか書いてくるしかないわな」

「何とでもなるでしょ。多分」

だるそうに呟く折原に対し、坂本は何かなるさと楽観的だった。「しゃーない、部活に行くか！じゃあな吉岡」

「だねえ。悩むより体動かしてた方が性に合うわ……。秋乃もまたねえ」

折原と坂本は、そう言いながら教室を出て行った。考えるよりも体を動かす方がいいとは、やはり二人は似た者同士だなあと僕は思った。

「秋乃は今日は？」

「また少し描いて行くよ」

「じゃあ俺も少し顔出すわ」

「うん」

秋乃の絵は毎日少しずつ完成に向かっていった。僕が思うに、秋乃の絵は以前に比べて明るい感じになったと思う。色調や雰囲気、色々な部分からそれが見て取れた。秋乃が前に描いていた絵を没にした理由も、何となく分かって来た気がした。

「秋乃の絵さ」

「ん？」

「何か明るい感じになったよな？」

「そうかな？」

僕の問い掛けに、秋乃は少し嬉しそうに微笑んだ。彼女にとって、自覚があるようだ。僕はいつも彼女の姿を目にしているから、分かる事がある。パラパラ漫画のように、少しずつだけ動きがあつて、変化がある。

以前は彼女は難しい顔をしながらキャンバスに向かっていった。真剣に絵を描いていたと言えはそうかも知れないが、それだけではなかつたと思う。最近の彼女は、比較的穏やかな表情でキャンバスに向かう。真剣な中に見せる優しい表情に、僕は引き寄せられていた。今秋乃が描いている絵は、今の秋乃らしさが出ていてとても良いと

思う。彼女はきつと、今は描きたい絵を描けているのだろう。そう考えると僕は少し嬉しくなった。

「この絵、俺は好きだよ」

「え？」

「秋乃らしさが出てていい。詳しい事はさっぱりだけど、何かいい」  
「え、その・・・ありがとう」

秋乃は少し恥ずかしそうに返事をした。

結局秋乃の作業が一通り終わるまで、僕はずっと美術室にいた。  
帰り道に秋乃がふと、口を開いた。

「私さ、実は先生から言われてたんだ」

「何を？」

「美大に推薦で行かないかって」

「マジで？良かったじゃん！」

僕は秋乃の話を聞いて嬉しくなってそう答えた。しかし当の本人である秋乃は複雑そうな表情を浮かべていた。

「嬉しいんだけどさ・・・」

「だけど？美大行きたいんだろ？」

「私だけこんなんでいいのかなって」

「どう言う事だ？」

「自分だけ楽しちゃっていいのかなって」

秋乃はそんな事を言った。僕は何だか可笑しくなって、笑ってしまっただ。

「な、何かおかしい事言った？」

「いや何も無いけどさ、秋乃がこれまで頑張ってきた結果だろ？それでもいいじゃん。認められたって事さ」

「でも私は、皆と一緒に勉強したりしながら進学目指したかったから」

「秋乃は俺らの中でも一番勉強も出来るんだから、俺らに教えてくれればいいだろ？余裕があるなら尚更さ」

「ん、教えるのはいいけど私も勉強する。推薦の事、折原君と理

「央ちゃんには内緒だからね？」

「はいはい」

僕は必死にそう言う秋乃の姿がおかしくて、ずっと笑っていた。

「何で笑うかなあ？」

「いや、だってさ」

「だって」

「秋乃はいい奴すぎるわ」

「・・・バカにしてるね？」

「してないって。普通は受験なんて周りの事気にしてる余裕なんて無いだろ。なのに周りの事にはかり気を遣うもんだからな」

「偽善者って言われている気がするな！」

「違うって」

すっかり暗くなった通学路に、僕らの笑い声が響く。大変な時も、僕らはこうやって笑い合っていていけるだろう。バカをやって、沢山笑って、時には泣いて。そんな風に過ごしていければ一番いいと思う。

## 【第十九話】

家に帰ってから、僕はベッドに寝転びながらボーっとしていた。

進路希望調査のプリントを見つめながら、一体何を書こうか考える。まだ二年生だなんて思っていると、きつとあつという間に時間は過ぎて行くのだろう。正直な所、まだ全くと言っていいほど僕に危機感はない。周りがそうだからかも知れないけど、結局最終的には自分で何でもやらなければならない。周りがそうだから、そんな言い訳をいつまでも続けていられないことくらいは理解している。

「直人、夕飯できたわよ」

階下から母親の声が響いた。僕は進路希望調査のプリントを手にしたまま、居間へと降りて行った。

「何？そのプリント」

母親の問いに、僕は無言でプリントを差し出した。

「あら、進路希望調査ってもう始まるの？あんだどこに行きたいとか考えてるの？」

「全然。だから見ての通り白紙のままなんだよね」

呆れた様な表情を見せる母親を尻目に、僕は目の前の夕食を頬張った。何を言われても思いつかないものは思いつかない。仕方がない事だ、と割り切りながら食事を続けた。

「そう言えば秋乃ちゃん、全国的美術コンクールで銀賞取ったんだって？」

「ああ、そうだよ」

「って事は美大にでも行くつもりかしらね」

「推薦の話が来てるって言った。よくわからないけどさ」

僕は秋乃と付き合っている事は仲間内でしか言っていない。それほど仲良くしていると言う事も親には話していない為、適当に話を流しながら応対した。

「あんたも何か才能みたいなのがあればねえ・・・」

「本当だよ」

ため息混じりにそう言う母親に、僕はあっさりそう返した。才能なんて物は持たないで生まれて来る人間の方が多いと僕は思う。才能にも色々種類があるとは思うが、あくまで天性の物であると思っっている。秋乃が才能を持っているかどうかは僕にはわからないが、少なくとも彼女は人一倍の努力家である事だけは知っている。彼女のそんな姿に惹かれた僕が言うのだ、そこは間違いない。

「才能を持った人間は、それはそれで大変だと思うけどねえ」  
僕はそんな事を呟いた。

「それはそうよね。周りの期待もあるだろうし、自分一人の話つてわけにもいかなくなるだろうしね」

「そう言う事。あいつはあいつなりに苦労してんじゃないかな」

「あんたも暇なら、たまに話くらいは聞いてあげたら？秋乃ちゃんも気休めくらいにはなるでしょう」

「暇な時は、ね」

本当は毎日話をしているが、僕は気の無い返事を返しておいた。

付き合っている事がばれたらばれたで、また面倒くさい事になりそうだと思った。

「ごちそうさま」

僕は食事を終えて立ち上がった。

「ちよつと直人、進路希望調査どうするの？」

「とりあえず適当に書いて見るわ。まだ最終とかじゃないし、とりあえず色々見てみる」

「そう。あと一年なんだから、少しは真面目に考えるのよ」

「はいはい」

母親の言葉を背中で受けながら、僕は自分の部屋に戻った。

机の上の携帯に目をやると、折原から着信が入っていた。僕は折原に折り返しの電話をかけた。

「折原、何かあったのか？」

「いや、進路希望調査どうする？」

「ああ、早速母親にうるさく言われてきたよ」

「俺もだよ。スポーツバカって言われて来た」

「合ってるじゃないか」

「うるせーよ！バカは余計だぜ」

僕は折原としばらく取り留めのない話を続けた。

「ところで折原、お前スポーツ推薦とか行けるんじゃないの？」

「あ？無理に決まってるだろ。去年も今年も予選落ちだぜ？インターハイとかまで行って良い成績残してりゃ行けるかも知れないがよ」

「お前ちゃんと練習しないからだろ……。実際真面目にやったらどうなんだよ」

「無理無理。絶対無理だつて。短距離はすげえ奴が沢山いるしなあ」

「まあ、確かに折原じゃ無理かもな……」

「おい、はつきり言われると傷ついちゃうぞ？泣くぞ？」

「泣けよ」

「……グスッ、グスッ」

「鼻すすってるだけじゃねーか」

「何かもうボケるのも突っ込まれるのも悲しくなってきた」

「俺もだよ」

僕らは進路希望調査の話などすっかり忘れて、くだらない話を繰り返して笑い合っていた。

「ところでさ」

少し声のトーンを元に戻して、折原が切り返してきた。

「ん？」

「野川とは最近どうよ？うまくいってるのか？」

「どうだろう。ぼちぼちじゃね？」

「青春してやがるなコノヤロウ。うらやましいぜ。俺なんて毎日暑苦しい男どもに囲まれて……ああ、もう！」

「部活には坂本もいるだろうが。他の女子も練習一緒だろ？」

「坂本！今日も練習サボってたらぶん殴られた……。恐ろしい……」

」

「またケンカしたのか・・・」

「ケンカじゃない！一方的にだ！」

「はいはい。仲の良い夫婦ですこと」

「俺が尻に敷かれていると言う意味でか？」

「色んな意味で」

僕は折原をからかうのが少し面白かった。折原も不器用だが、坂本はもっと不器用だ。折原の事を想っている分、何かと気になっとうるさく口を出すのだろう。好きな子がいるといじめてしまうタイプの女子版と言った所だろうか。とにかく、あの性格では素直には行かないだろうな。折原も秋乃に告白したばかりだし、今の段階では恋愛感情なんてレベルではないだろう。僕も秋乃も、この二人がくっつけばうまくいきそうだと思うている。裏で工作してくっつけてしまうのもアリかも知れないが、バカと超不器用が相手では一筋縄ではいかない。自然にどうにかなるのを待っている事くらいしか出来ないだろう。

「何笑ってんだよ！」

「いや、こつちの話だ。気にすんなって」

「先生、吉岡君が気持ち悪いです」

「誰に言っただよ」

結局折原と話しても、進路希望調査の話は全くと言っていいほど進まなかった。雑談は楽しかったが、終わった後に後悔した。

夜が更けていくが、僕の手元の進路希望調査のプリントは、未だ白紙のままだった。



## 【第二十話】

この前の進路希望調査は、結局適当に書いて出してしまった。自分の頭の程度も考えずに、取り合えず近場の国立大学を羅列した。目標は高い方がいいだろうと、自分に言い訳をする事にした。

僕が購買で昼食を買って戻ってくると、折原がやけにニコニコしながらこちらを見つめていた。

「な、なんだよ？」

僕はいつもと違う折原の視線に耐え切れず、声を掛けた。しかし折原はニコニコしているだけで何も言わなかった。困り果てた事と気持ち悪い事でどうしようもない為、僕は秋乃と坂本に助けを求めた。

「おい、坂本！秋乃！折原がぶっ壊れた」

「なにになに？」

「いつもの事だろ？」

坂本と秋乃が近寄って来て、三人で折原を取り囲む形になった。

「何ニコニコしてんの、このバカは」

呆れ気味に坂本が吐き捨てる。それに僕も続いた。

「知らん。パン買って戻って来たらこの有様だよ、このバカ」

「誰がバカか！」

「お？やつと動いた」

思わず折原が反応した。

「バカバカ言ったらかわいそうだよ。折原君何かいい事でもあった？」

秋乃がそう尋ねると、待っていましたと言わんばかりに折原が口を開いた。

「よくぞ聞いてくれた。ここで君達に問題を出そう」

「どう言う流れだよ・・・」

僕は思わず折原に突っ込みを入れた。

「うっさいわ！・・・さて問題だ、今日は何の日でしょうか？」

今日は11月14日。何の日だろうか。何か特別な事がある日？いや、そんな記憶はない。僕達三人は、顔を見合わせて皆揃って首を横に振った。坂本も秋乃もわからないようだ。

「君達はだらしがない・・・。仕方がないから答えを教えてやろう」「もったいぶらないでさっさと言いなさいよ」

徐々に坂本の苛立ちが表に見えてきた。答え次第ではそろそろ手が出てもおかしくない勢いだ。

「何を隠そう、俺の誕生日だ！」

折原は大声でそう言いながら、机の中に隠し持っていたクラッカーをおもむろに鳴らした。教室が騒がしくなり、他の生徒の視線が僕らの周りに集中した。

「バカ！危険物を学校に持ってくんない！」

予想していた通り、坂本の一撃が折原の頭に入った。

「誕生日のプレゼントがこれだなんて・・・」

折原は悶絶しながら言葉を搾り出した。

「お前今日誕生日だったのか。知らなかったわ」

「折原君おめでとう。でも残りのクラッカーは没収ね」

「ああっ、皆に鳴らしてもらおうと思っただけで来たのに・・・」  
坂本に殴られ、秋乃にクラッカーを奪われ、折原の誕生日は散々な幕開けとなった。

「ほら、プレゼントやるよ」

僕は購買で買って来たカレーパンを、折原に差し出した。折原の誕生日は去年聞いたような気もしたが、完全に忘れていた。僕が今あげられるものは、手元にはこのくらいしかなかった。

「カレーパン・・・っていらんわ！他のものがいい！」

「何だと？俺の貴重な昼休みを五分も使って買って来たカレーパンをいらんといと？」

「いらん！愛がない！」

「パン工場のおばちゃんのお愛がこもっているぞ、多分」

「おばちゃんの愛はいらない！お前の愛が欲しい！」

「キモい……」

折原は激しく駄々をこね始めた。皆に誕生日を忘れられていた事が、余程悔しかったようだ。

「野川は！野川は何かないの！？」

「えっ」

「野川は優しいから覚えててくれたよな！なっ！」

「えっ、いや、あの……こ、今度何か奢るから！ね？」

「ヒドイ……誰も覚えていてくれないなんて」

折原が本格的に落ち込み始めたのが面白くなり、僕はさらに突いてみる事にした。

「11月14日とか地味な日に生まれるお前が悪い」

「うっさいわあ！地味ってなんだ地味って！クリスマスとかに生まれたらプレゼントまとめられて悲惨な思いをするんだぞ！それよりマシだ！地味でもいい！」

「わ、わかったから落ち着け。クリームパンの方やるから落ち着け」  
マシンガンのように言葉を吐き出す折原。面白半分で突いた僕はその勢いに押されてしまっていた。そんな僕らのやり取りを見て、坂本は大きなため息を残して席を立った。スタスタとロッカーに歩いていき、大きな紙袋を持って戻って来た。

「ほら、折原」

坂本は乱暴にそう言うと、持って来た紙袋を折原に押し付けた。何が起こったのかわからない折原は、きよとんとしながら間抜けな声を出した。

「えっ？」

折原は坂本と手渡された袋に何度も視線を往復させた。そして紙袋の中に入っていた袋をこそこそと漁り始めた。

「これは……？」

「トレーニングウェアよ。前にそろそろ新しいのが欲しいってばやいてたでしょ」

「坂本が俺にプレゼントだと？」

「何よ、何か文句ある？誕生日だから、こんなバカでも人並みに祝ってやらないと気の毒でしょ」

僕と秋乃は、折原と坂本のやり取りを見て、顔を見合わせてニヤニヤしていた。折原はまだ頭が混乱しているようで、間抜けな表情をしていた。

「折原、良かったな」

「坂本・・・覚えていてくれたのはお前だけだ〜！！」

折原は感激のあまりか、そのまま坂本に抱きついた。

「な、何すんのよ！このバカ！！」

坂本はそう怒鳴ると、折原が手にしていた紙袋を奪い取り、それを折原の頭に被せて一撃を加えた。そしてそのまま顔を真っ赤にしながら教室を出て行った。

「あゝあ、ちよつと追いかけて来るね」

走り去った坂本の後を追って、秋乃も小走りで廊下に飛び出して行った。残された僕は折原を紙袋から解放して声を掛けた。

「何やってんだよお前は」

「いや、嬉しくてつい・・・」

「まあ、良かったじゃないか」

「うむ。色んな意味でな」

そう言った折原の表情は、何故か少しだけ誇らしげに見えた。

その日の放課後、折原は早速坂本に貰ったトレーニングウェアに着替えて部活に向かおうとしていた。

「折原、早速着てたのか」

「ああ、せっかく貰ったしな。それにしても、サイズぴったりなんだよな。よく分かってたなあ、あいつ」

「坂本はああ見えてちゃんと周りを見ているからな。あとで謝つとけよ」

「だな。少しだけやる気が回復したぞ〜」

「お前は真面目にしてりゃまともなのに、何でいつもあんなにバカ

なんだかなあ・・・」

「バカと言うな。ムードメーカーと呼べ。俺のような存在も必要って事だ。つまり、必要悪と言っ事だ」

「なんか違うないか？それ・・・」

「まあ細かい事はいいってことよ。そんじゃ俺は行くぜ」

「ああ、頑張つて来い」

僕は張り切りながら練習に向かう折原の背中を見送った。

「折原君、嬉しそうだったねえ」

僕の背後から秋乃が声を掛けてきた。

「そうだなあ。あいつもいつもあんな感じで真面目にしてればいいのになあ」

「それが折原君らしさだから、今のままでいいんじゃない」

「まあね。ところであの後坂本は大丈夫だったのか？」

「理央ちゃんは照れ隠しだよ。あの性格だからねえ」

「相変わらず不器用だよなあ、どっちも」

「直人もね」

「俺？俺が不器用とかないわ」

「あるある。色んな意味でね」

秋乃は僕の顔を見て微笑んでいた。

「冬のコンクールの締め切り近いんだっけ？」

不器用と言いつ返されて戸惑った僕は、唐突に話題を別な方向に持った。

「あと一ヶ月くらいだねえ。冬休み前には出さないといけないよ」

「なるほどな。まあ、その方が冬休みにゆっくり出来るよな」

「うん。今回は苦労してないから、大丈夫だよ」

「そっか。とりあえず・・・」

「無理すんなよ？」

言おうとしていた事を秋乃に先に言われ、僕はきよとんとしなから一つ頷いた。その後で、二人揃って大笑いした。僕と秋乃はこんな感じだ。折原と坂本はあんな感じだ。人それぞれ、持っている世

界は違う。だけど、どれも良いものだと思つた。

「折原と坂本、うまくいけばいいのになあ」

「そうだねえ」

僕達はそんな話をしながら、帰路に着いた。

通学路にゆらゆらと並ぶ二人の影。

ただ寄り添って、二人で歩いていくこの世界が僕と秋乃の世界。

## 【第二十一話】

ぼんやりとした風景の中に、懐かしい声が響く。

「直人っ、早く早く！こっち！」

目の前には、遠い記憶の中に残る幼い日の秋乃がいた。甲高い声で僕を呼び、しきりに手招きをする。

「待ってよ秋乃。早いつてば」

何も考えていないのに、言葉が出て来る。僕は秋乃に呼ばれるままに、彼女が背負う赤いランドセルを目印に後を追いかけた。着いた先は、小学校のすぐ裏にある小高い丘の上。ここは公園になっていて、僕らが住む町が一望出来る秋乃のお気に入りスポットだった。

「直人遅い！」

「秋乃が速すぎるだけだよ。僕は遅くない」

「ほら、丁度いい時間」

「わあ」

秋乃が指差す先には、遠くに見える水平線に向かって夕陽が沈んでいく瞬間であった。

「いいよね、ここ。町がほら、ぱーっと赤く染まっっていくのが見えるよ」

「うん。秋乃はここ好きだよね。よく来るもんね」

「この場所気に入ってるんだ。ここからだ、私が住んでる町の色んな顔が見えるから」

「色んな顔？」

「うん」

「よくわからないなあ？」

「私はわかるからいいの」

「ふーん」

僕は秋乃と、そんな会話を交わしていた。その後も、一方的に話

を進める秋乃に、僕は相槌を打っているだけだった。

「こらっ、その二人！」

不意に僕らの背後から声が聞こえた。

「あっ、先生！」

振り返ると、そこには僕らの担任の船木先生が立っていた。船木先生は、当時の僕から見てもすらっとして綺麗な先生だった。皆に慕われていた、いい先生だった記憶がある。

「もう暗くなるよ？早く帰らないと」

「えー、もう少しだけいいでしょ？」

秋乃が、少しふてくされた様にそう言った。頬を膨らます秋乃を見て、先生はくすりと笑みを浮かべた。

「先生、秋乃がね。ここからだど町のいろんな顔が見えるんだって。色んな顔って何？」

僕は、さつき秋乃に馬鹿にされたのが悔しくなり、先生にそんな事を尋ねた。

「うーん、それはねえ言葉で説明するものじゃないと思うんだ」

「どう言う事？」

「難しいなあ。心で感じるって事かな」

「ふーん・・・」

先生に説明されても、僕はよく分からなかった。

「先生はわかるの？」

秋乃が少し嬉しそうに先生にそう言った。

「わかるよ。直人ももう少し大人になったらわかるかな」

「直人は子供なんだって。あはは」

「子供じゃないよ！秋乃の方が背小さいくせに！」

「なにおう！」

「はいはい、ケンカしないの。二人とも仲がいいんだから」

子供だと言われてふてくされた僕と、背が小さいと言われてふてくされた秋乃。二つの膨れ顔を見て、先生は笑っていた。

ぼんやりとしていた景色が、更にぼんやりとしていく。ああ、や



つぱり夢だったんだなとこの時点で僕は確信した。

「よしっ、終わり」

すぐそばで響いた声で、僕ははっと目を覚ました。間の抜けた表情で辺りをきよきよと見回し、自分の今の状況をようやく認識した。今日は冬休みに入る一週間前、12月15日。たまたま午前で授業が終わりだった今日は、秋乃の絵が完成間近と言う事で、一緒に美術室にこもっていたんだった。

「目、覚めた？」

「ああ、どのくらい寝てた？俺」

「二時間くらいかな？」

「ああ、悪い。起こしてくれても良かったのに」

「気持ち良さそうに寝てたから、起こすのも悪いと思って。ねえ、見て」

秋乃はそう言って、目の前のキャンバスを指差した。

「完成したのか」

「うん」

「お疲れ様。よく描けてるよ」

「ありがと」

秋乃は、嬉しそうに笑った。僕は絵の事はよく分からないけど、以前に比べて色調が明るくなってきている事はわかる。秋乃の心境の変化が、彼女の描く絵にも変化をもたらしていると言う事なのだろうか。何にせよ、僕は今の彼女の笑顔は、目の前のキャンバスに広がる明るい色調の世界に相応しいと思う。秋乃らしい、いい絵だと思った。

「あとは応募するだけだな」

「うん、とりあえずやっと落ち着けるよー」

「今日はもう帰るか？」

「そうだね、帰ろっか。お昼食べてないからお腹空いたしね。直人もお腹空いたでしょ？」

「ん？俺はそんなに・・・」

「・・・私が食いしん坊みたいじゃない？」

「い、いや。寝起きだからだつて。膨れるなよ」

僕はそう言いながら笑った。

「秋乃、後ろに乗れよ」

僕は自転車置き場で、後部座席を指差しながらそう言った。

「道、凍つてないかな？」

「大丈夫だろ、天気もいいし。ほら乗った乗った」

秋乃は少し嬉しそうにしながら、僕の背中にしがみついた。いつも秋乃と帰る時は、僕は自転車を手で押しながら歩いて帰る。秋乃を後ろに乗せるのはしばらくぶりだった。彼女は僕の自転車の後ろに乗るのが好きな様で、声のトーンから上機嫌である事が伝わって来た。

「あれ、帰り道違うわいな？」

「ちよつと寄り道していこう」

僕は腕時計に目をやった。時間は大丈夫だ。坂道を登るために、僕は自転車を一気に加速させる。

「ちよつと、速いよー！」

「しつかり掴まつてろよー」

緩やかな長い坂道を、僕は立ちこぎで駆け上る。目的地に着いた時には、僕は完全に息が上がっていた。

「あれ、ここ」

「久しぶりだろ？」

僕は、さつき夢で見た丘の上の公園に秋乃を連れて来た。何故だか無性に、ここに来たくなったのだ。

「懐かしいねえ。どうして急にここに？」

「さつきさ、夢で見たんだ。小学生の頃、よく秋乃と一緒にここに来たなあつて」

「そうだね。よくここで景色を見てたね」

秋乃は、懐かしそうに眼下に広がる景色を見つめていた。懐かしむような、少し安心したようなその独特な横顔は、夢で見た記憶の

中の秋乃と全く変わっていなかった。

「夕陽、綺麗だね」

「ああ」

あの頃と同じ様に、夕陽が少しずつ沈んでいく。そしてあの頃と同じ様に、僕らもまた二人一緒にその景色を見ている。少し不思議な感じがした。

「あの時さ」

「ん？」

「秋乃が言ってた、この町の色んな顔ってやつ。今なら何となくわかる気がするな」

「そう？」

「秋乃とずっと一緒にいたからかな。少しずつ分かって来た気がする」

「少しはオトナになったって事かな？」

僕の話聞いて、秋乃は悪戯っぽく笑った。

「それにしてもさ」

「ん？」

「あのおてんば娘がねえ・・・今はこんなに大人しくなって」

「ちよ、ちよつと、何それ！」

「俺は大人になったけど、秋乃の背の小ささは変わってないな。あの頃よりも差が広がっちゃってまあ・・・」

「うー・・・仕返しのつもり？」

「どうだろうなあ？」

「直人は変な事ばかり覚えてるんだから！」

ぼかぼかと僕を殴りつけてくる秋乃がかわいらしく思えた。昔は強気でおてんばだった秋乃。今はその面影はすっかり消え失せているけれど、秋乃は秋乃なんだなあと改めて感じた。

懐かしい場所で昔話に華を咲かせていた僕らは、自分達の背後に人の気配を感じ同時に振り返った。

「あっ」

僕らと、背後から忍び寄ってきた気配の主は同時に声を上げた。

「先生！？船木先生？」

秋乃が驚いたようにそう言った。

「もしかして、吉岡直人と野川秋乃？」

気配の正体は、僕らの元担任である船木先生であった。夢で見てこの場所に来て、夢の中に出てきた人物が全て揃う。奇跡の様な巡り合わせに、僕は心底驚いた。

「それにしてもまあ、二人とも大きくなって。同じ町に住んでもなかなか会わないものね」

「先生もお元氣そうで。まだ学校で先生を？」

「そうよ。それで、ここへの見回りは毎日の日課。君達みたいな悪ガキが、時々寄り道しているからね」

先生はそう言いながら笑った。僕らは二人揃って恥ずかしそうに頭を掻いた。

「秋乃の活躍は、新聞とかで目にしていたんだよ？ああ、私の教え子が頑張ってるなあって嬉しくてね」

「活躍なんてそんな・・・まだ何もしてませんし。これからですよ」

「あの頃から秋乃は感性が優れた子だなあって思ってたけど、こんなに大物になるなんてねえ」

「お、大物じゃないですよ！全然ですから・・・」

「あらあら、昔と違って随分謙遜するのねえ。強気なおてんば娘はどこにいったのかしら？」

「先生もそう思いますよね？俺も同じ事言ったら怒るんですよ、こいつ」

「先生まで！直人もまた！もう・・・昔は昔で仕方ないじゃない」  
しよげる秋乃を見て、僕と船木先生は声を出して笑った。それから色々話し込んでいるうちに、すっかり辺りは暗くなってしまった。

「もうすっかり暗くなったね。二人とも、気をつけて帰るんだよ」

「子供じゃないんだから、大丈夫ですよ」

僕はいつまでも僕らを子ども扱いする先生にそう返した。

「そうそう、秋乃！」

「えっ？」

「私は秋乃のファンだから、これからもいい絵をたくさん描いてね」

「は、はい。頑張ります！」

秋乃は恥ずかしそうに、しかし力強く返事をした。

「でも、無理はするんじゃないよ？」

先生は優しく微笑んだ。

「先生、それ最近直人の口癖なんですよ」

「あはは、そうなんだ？直人も、すっかり秋乃の面倒見てあげるんだよ」

「言われなくてもわかってますよ〜！」

僕らは自転車に飛び乗ると、先生に見送られながら坂を下って行った。

「期待されるのも、悪くない。うん」

僕の背中にしがみつきながら、秋乃がそんな事を言った。

「そう？」

「先生に会えて、ちょっとやる気出た」

「そうか。秋乃はもっと上にいけるだろ。無理せず頑張れ」

「うん。私、もっと頑張る事にする」

今日先生に会えた事は、僕らにとっても良い事だったと思う。僕らは毎日を歩んでいく中で、少しずつ変化したり、わき道にそれたりしてしまう事もある。自信を無くしたり、落ち込んだりする日もある。でもそんな時に、変わらずに見守ってくれる人がいるから、僕らは負けずに前に進むことが出来るのではないだろうか。僕も、秋乃に負けられないように頑張らないといけないな。まだまだこれからだ。そうですよね、先生。

## 【第二十二話】前半

朝から雪が降っていた。世間で言う、ホワイトクリスマスと言うやつだ。秋乃と付き合い始めて最初のクリスマス。秋乃には悪いけど、いつも一緒にいるものだからあまり特別という感じはしなかった。一応、秋乃の希望で夕方に待ち合わせをしてぶらぶらと買い物をして、夜には街に出て今日から始まるイルミネーションの点灯式を見に行く事になっている。

夕方まではまだ時間があるが、家においても退屈な僕は、一足先に街に繰り出す事にした。

「さむっ！」

雪が降っているせいか、外は予想以上に冷え込んでいた。夜まで降り続いたら大分冷えるだろうなあ、などと考えながら僕は駅へと向かった。既に世間は冬休みに入っているからか、街へと向かう電車は平日とは思えないほど混雑していた。見渡す限りカップルだらけで、一人でぼつんと電車に乗っている僕は妙な違和感があった。

「さて、出て来たはいいけどどこで時間を潰すかな・・・」

駅から出て中心街を見渡すと、どこもかしこも人ばかりであった。往来する人の数も半端じゃなく多い。さすがはクリスマスと言ったところか。この時期はどうせどこも混雑するだろうと思ひ、街に出て来た事が無かった僕は、目の前に広がる光景に面食らっていた。

しばらく外をぶらぶらしていたら冷え込んで来たため、僕は駅ビルの中に戻り適当に中に入っている店を回り始めた。ふらふらと行き来していると、予想外の人物に出くわした。

「お？吉岡？」

「おお？坂本、何やってんだ？」

目の前に現れたのは坂本だった。坂本はぶんぶんと手を振りながら僕の方に近づいてきた。

「あれ、秋乃は？クリスマスなのに一人？」

「あとで合流するんだよ。坂本も一人なのか？」

「違うよ。ほれ、あれを見よ」

坂本はおもむろに後方を指差した。その先には、大量の荷物に埋もれてぐったりとベンチに座っている折原の姿があった。

「あれは一体……」

「前に誕生日プレゼントあげたじゃん？だから今日奴隷として引っ張ってきたの」

「ほほう？」

「な、何よ？その意味ありげないやらしい笑みは」

「奴隷とか言いつつ、坂本嬉しそうじゃん」

僕は坂本の耳元でそんな事を呟いた。

「ばっ、何言ってるのよ！」

僕の言葉に過剰反応して、坂本は顔を真っ赤にして声を上げた。

折原はぐったりして、僕らのやり取りには全く気付いてないようだった。

「ここだけの話、あいつ誕生日プレゼントかなり喜んでたぞ」

「え？だから何なのよ……」

「顔がゆるんだぞ、姉さん」

「ちよっ、何なのよ！今日の吉岡は！」

僕は坂本の反応を見ながら大笑いした。少しからかうつもりだったが、だんだんと面白くなってきて止まらなかったのだ。

そんなやり取りを何度か繰り返して、僕はようやく落ち着いて一息をついた。

「まあ俺がこんな事言うのも何だけど、坂本と折原はうまくいくと思っただ」

「……」

「切り出しちゃうのもアリじゃない？」

「うっん……」

坂本は、僕の言葉を聞いて考え込むような表情を見せた。彼女の心の中にどんな想いがあるのか全部かっている訳ではないけど、

折原の事を好きだという事だけは理解していた。

「何か問題？」

「問題って言うかさ」

「ん？」

「あいつ、前に秋乃に告白したばかりじゃない？だから、何と云うかその、落ち着くまで待ちたいって言うか、私が自分の気持ちを押し付けたらあいつに悪いじゃない？」

「ああ、そう言う事か・・・」

「あいつ最近さ、何か目標見つけたみたいだね。部活も大分力入れるようになったし。何を思っているのか分からないけど、あいつ自身がそれを形にするまでは見守っていようかなって思ってたね」

普段あまり自分の心境などを言葉にしない坂本が、珍しく心の中を曝け出していた。

「好きとか、付き合うとか色々あるけど、ただ見守ってあげたいって言うのも一つの形かなって思うからね」

「ふむ」

「まあ、今の状況で私から何か言って押し付けになっても嫌だし、あいつが振り向くまで待ってもいいかなって思うんだ。振り向かなかったらその時はその時って事で」

坂本はそう言って優しく微笑んだ。僕は、彼女の気持ちが痛いほどに理解出来た。秋乃に告白する前の僕にそっくりだったからだ。何をしてもない、何の役に立っているかは分からない。それでも、ただそばで見守る事を続けてきた自分。その姿が、今の坂本と重なって見えた。僕とは違い、周りの状況を知りながらもサポート役に徹する事が出来る彼女は、僕なんかよりもずっと強い存在だと思う。だからこそ、僕は坂本の事をより強く応援したくなった。

「坂本は、いい奴だよな」

「あつ、馬鹿にしてる？」

「いや、めっちゃくちゃ褒めてる」

「何だよ？私何かいい事した？」



「うん、めっちゃくちゃいい奴だと思う」

「真顔でそんな事言われると照れるんだけど・・・」

「まあ、坂本はうまくいくって。うん」

僕は、坂本の肩をぽんぽんと叩いてそう言った。

結局僕と坂本の会話が終わるまで、折原が僕らに気づく事は無かった。僕は折原に静かに歩み寄って声をかけた。

「お前は何やってんだ・・・」

「吉岡か・・・。鬼じゃ、鬼がおる・・・」

「鬼って何だ・・・」

「坂本だ。俺を荷物持ちにしてやがる・・・。鬼なんて生易しいものじゃない。あれは鬼畜じゃ・・・」

「誰が鬼で鬼畜だって？」

気が付くと、背後に坂本が立っていた。その形相は、まさしく鬼のように見えた。

「せっかくジュース買って来てやったのに、これはやらん！」

坂本はそう言うのと、折原の目の前で手にしているジュースを一気に飲み干した。その豪快な飲みっぷりには、言葉も出なかった。

「ああ、殺生な・・・」

折原の疲れっぷりに同情した僕は、坂本にその辺の喫茶店で休憩しようとして提案した。坂本よりも折原が元気よく反応し、僕は近くの店で休憩することにした。

「生き返るぜ・・・」

折原は満面の笑みでそう言った。

「クリスマスにまで荷物持ちとはご苦労なこった」

「誰が好きでやるか！これは坂本に脅されて・・・」

「なあに？」

「いえ、何でもありません・・・」

坂本の不敵な笑みに、折原の心は完全に押さえ込まれてしまっていた。

「ところで吉岡、何で一人にいるんだよ？野川はどうした」

「ああ、あとで待ち合わせる事になってる。暇だから先に出て来ただけだ」

「買い物でもすんのか？」

「買い物して、その後でイルミネーションの点灯式見ていく予定だよ」

僕はジュースを飲みながら、折原の質問に答えていた。僕らのやり取りを横で黙っていた坂本が、ニヤニヤしながら口を開いた。

「でも吉岡、あの点灯式の話知ってる？」

「何の話？」

「点灯式見に来たカップルは、高確率で別れるんだってよ？」

「どんな統計だよ・・・」

ずっと前にそんな話は聞いた事があったが、自分にはまるで関係ない話だと思つてすっかり忘れていた。確かに、このイルミネーションの点灯式に来たカップルは別れると言つ噂がある。もっとも、地元民しか知らないような都市伝説に近い代物だが。

「まあ、秋乃が見たいって言つからいいんじゃないね」

「・・・それはきつと吉岡と別れたいと言つ秋乃の密かな意思表示では？」

「うっさいわ。ところで、折原と坂本はこの後どうするんだよ？」

「どうする？」

「何で俺に振るんだよ」

折原と坂本は顔を見合わせてそんな事を言った。

「一緒に見ていくか？イルミネーション」

二人とも予定が決まっていけない様なので、僕はとりあえず誘いを掛けてみた。しかし折原と坂本は二人揃つて僕の方を見つめると、ニヤニヤし始めた。

「吉岡と野川の邪魔しちゃ悪いしなあ」

「なっ！」

どうやら僕の事をからかいたくてたまらない様子だ。だがそんなものにも乗らず、僕はハイハイと適当にあしらつておいた。

三人で盛り上がっている間に、気づいたら秋乃との待ち合わせの時間が迫っていた。折原と坂本は、もう少し適当にぶらぶらと買い物を通けるらしい。もちろん荷物持ちは折原が継続だ。折原はため息をつきながらも、健気に坂本の後ろにくっついて行った。僕は二人と別れ、秋乃との待ち合わせ場所である秋の改札口に戻る事にした。

【第二十二話】後半

「あれ、もしかして遅かった？」

改札口の外で待つ僕の姿を見つけた秋乃は、急ぎ足で駆け寄って来てそう言った。

「いや、俺が早すぎただけ。家にいてもやる事がないから、先に出て来てたんだ」

「なんか直人らしいねえ」

「ほつとけ。ところで、折原と坂本も来てたぞ。さっきあいつらと駄弁ってたんだ」

「へえ？デートかな？」

「いや、坂本が折原を奴隷にした。この前の誕生日プレゼントの見返りなんだとか」

「あはは、理央ちゃんも素直じゃないなあ」

僕と秋乃は色々と話をしながら、賑わいを見せる街中へと繰り出しました。

適当に店を回り、服や小物などを見た。

「あ、これ見て。すごい可愛い」

「ん、どれどれ？」

秋乃は楽しそうに、あれこれと動き回っていた。いつもは絵を描いているイメージしかない秋乃だが、こうやって見るとどこにでもある普通の女の子なのだと再認識出来る。彼女がどう思っているかはわからないが、この時ばかりは本当の意味で対等な付き合いが出来ているような、そんな気がしていた。普段の僕は情けない事に、秋乃の才能に感心している事しか出来ないし……。

「直人、あっちの店にも行こう」

「ああ、行こうか」

秋乃は僕の手を握ると、お目当ての店の方向へと歩き出した。本当に楽しそうに振舞う秋乃を見ていたら、僕の考えている事などど

うでも良くなつてしまった。事あるごとに自虐的になつてしまふのは僕の悪い癖だ。今は彼女のこの屈託のない笑顔に応える事が、僕に出来る一番の事だろう。

あちこち店を回っているうちに、徐々に荷物が増えてきた。秋乃はここぞと言わんばかりに、色々と気に入つた物を買つていた。折原もきつとこんな状況で大量の荷物を抱える事になつたんだらうなと思つた。坂本は秋乃に比べて活発な分、余計に大変だつた事だろう。

「秋乃、重いだろ？俺が持つよ」

「え？悪いからいいよ。それにほら、そんなに重くないしね」

秋乃は荷物を上げ下げして、重くないよアピールを繰り返した。

「いいから、たまには男らしい事もさせろつて。・・・荷物持ちが男らしいのはわからないけどな」

半ば強引に荷物を持つた僕を見て、秋乃は笑いを堪えるような表情を浮かべていた。

「それじゃあお願いね。重くなつたら交代するからね？」

「そんな華奢な秋乃に心配されてもなあ」

「あ、今失礼な事言つたね？それでも力はあるんだから、ほれほれ」

「ふにゃふにゃじゃないかよ」

「うゝん、理央ちゃんみたいに鍛えないとダメかな？」

「いや、そのままでもいいです」

僕と秋乃は顔を見合せて笑つた。

気が付くと、イルミネーションの点灯式の時間が迫っていた。僕らは少し急ぎ足で、目的地へと急いだ。点灯式には外部からも沢山の観光客がやって来る。僕らの目的地は、地元民にしか広まっていないベストポジションであるビルの屋上の展望台。観光客は大体が街中に展開していくため、ここに来るのはほとんどが地元民である。間近で見ると街全体を見渡す事ができるため、一番いい場所とされているのだ。

屋上の展望台には、案の定カップルだらけであつた。一人身お断

りのな雰囲気を醸し出す、カップルの聖地的な意味合いも併せ持つこの場所で、僕と秋乃は静かにイルミネーションの点灯の瞬間を待った。

やがて、一斉に街に幻想的な光が灯った。周囲のカップルから、歓声があがる。そんな中秋乃の方に目をやると、彼女と目が合った。秋乃は静かに微笑んでいた。秋乃の手を握ったら、彼女はその小さな手で少し強く握り返してきた。

「ありがとう」

「ん？」

「一度、見に来たかったんだよね」

「地元なんだからいつだつて来れただろ？」

「好きな人としてこと」

秋乃は少し恥ずかしそうにしながらそう言った。僕は、そんな秋乃が愛おしく見えて仕方がなかった。同時に、普段はそれほど感じた事がなかった感情が僕の中に沸き起こってきた。

「秋乃」

「ん？」

「俺は幸せもんだよ」

僕の言葉を聞いて、秋乃は顔を真っ赤にして下を向いた。そんな彼女を見て、僕は静かに微笑んだ。同時に、僕なんか彼女の傍にいてもいいのだろうか、また悪い癖が始まった。何だかんだで何事も無かったように過ごしている僕だが、折原と秋乃の事も忘れていくわけではない。折原の勇氣に勝手に後押しされて秋乃に告白したはいいが、折原よりも僕は彼女に相応しい人間なのだろうかと考える事はある。

彼女は才能ある人間だ。僕から見れば、選ばれた人間だ。絵の神様に愛された人間、そう感じるくらいに僕は彼女の才能を評価していると同時に、自分がどれだけ平凡かも感じている。秋乃と対等でいたい。僕はそれを願っているが、それだけの力も才能も僕にはない。だから、自分の立ち位置で迷う。彼女の才能に嫉妬しているの

か？自分にはないものを持つている彼女が羨ましいのか？いいや、そんな事を思えるほど近い存在じゃない。僕にとって彼女は……。

「直人」

不意に彼女が僕に声を掛けた。完全に自分の考えの中に入り込んでいた僕は、彼女の声に驚いてしまった。

「場所変えよつか」

「え？」

「直人に話したい事があるんだ」

話したい事？秋乃は一体何を話したいのだろうか。そう考えた時に、ふと坂本が言っていた言葉が頭の中をよぎった。

「吉岡と別れたいって意思表示では……？」

いや、幾らなんでもそれはないだろう。と頭の中で掻き消したが、秋乃の真面目な表情を見たら、簡単に掻き消す事も出来なくなってしまった。僕は秋乃に促されるまま、展望台を後にして外に出た。

「秋乃、話したい事って？」

僕は沈黙に耐えかねて、自分から話を切り出した。

「直人、重くない？」

「え？このくらい全然。軽いから大丈夫だって」

僕は秋乃がやってみせたように、荷物を上げ下げした。

「そうじゃなくって」

「え？」

「私の存在が」

秋乃の口から出た言葉に、僕は反応する事が出来なかった。彼女の言葉の意図がわからずに、僕はどうすればいいのかわからなくなってしまった。

「私、直人が気を遣ってくれている事知ってるよ。私が何不自由なく絵を描けるように、私の邪魔にならないようにって。私もそれに甘えちゃってる。でも、そのせいで直人が悩む姿は見たくない……。直人がよく難しい顔で何かを考えてるところ、見えてるんだから」。秋乃は早口でそんな事を言った。

「私ね、直人の枷にはなりたくない。私の存在が直人から笑顔を奪うなら、私は」

「違う!!」

僕は思わず声を張り上げた。秋乃は勘違いをしている。僕は秋乃の事でそういう風に思った事は一度もない。僕が悩んでいるのは、不甲斐ない僕自身の事だ。

「俺は違うんだよ。そんな事を考えているんじゃない」

「だって、直人よく考え込むじゃない。さっきだって・・・」

「違うんだよ・・・俺が悩んでいるのは、もっともつと下らない事だ。秋乃の事がどうこうじゃなくて、自分自身の何も無さに呆れているだけだ。俺は秋乃に相応しいのか、折原よりも秋乃に相応しい存在なのかって考える。俺自身に何も無いから、こんな奴でいいのかっていつも自問自答する。でも何も見つからない。何かを手に来る訳じゃない。だからただ一人で悩んでるだけなんだよ」

僕はさっき考えていた事も含めて、思いの丈を秋乃に吐き出した。

「やっと話してくれた」

「え？」

「やっと直人の心の中を覗けた。いつも難しい顔をするだけで、何も話してくれないから」

「そんな事は・・・」

「ねえ直人、私前に言ったよね。直人は私の中で特別な存在だって」

「ああ」

「私はね、下絵だけが描かれたキャンバス」

「え？」

「直人は色」

「俺が、色？」

「そう。たくさん、数え切れないくらいの色」

秋乃は、真面目な表情でそう言った。彼女は一呼吸置いて、また僕に語りかけた。

「私は白黒。何も無かった。ずっと絵を描いているうちに、何のた



めに絵を描いているのかわからなくなつてた。言われるままに、褒められるままに、何を思うわけでもなく、ただ絵を描いていた。そんな私に直人が色をくれた」

「俺が？」

「そう。私は直人と付き合い始めて、色んな感情や、自分の想いを絵に乗せたくなつた。何より、私の絵を好きだつて言ってくれる人の為に、絵を描きたいと思えるようになった」

「秋乃・・・」

「私は、そんな直人を苦しめる存在にはなりたくないって思った。だから」

僕は秋乃の言葉を最後まで聞かずに、彼女の体を抱き寄せた。驚いた表情で言葉を失う彼女に、僕ははつきりと言つた。

「俺にとつても、秋乃は色だ。俺には何も無かつた。何も無い色褪せた世界に、命を吹き込んでくれたのは秋乃だ」

確かに僕はいつも迷う。いつだって自虐的で、自分に自信も何も無い存在だ。けど一つだけはつきりしている事がある。それは秋乃と言う存在が、僕の何も無い日々が輝きを与えてくれていると言ふ事だ。秋乃が傍にいなかったら、僕はどれだけ無気力な日々を過ごしている事だろうか。確かに秋乃の傍にいる事で僕の何も無さが目立つ事はあるかも知れないが、それは秋乃のせいじゃない。僕自身がだらしないだけだ。ただそれだけの事だ。

「直人は何も無い存在じゃない。たくさんいいものを持つてる。私は知ってるから。だから、何も悩まないでそのままいてほしい」  
「わかつた。でも俺はもつと、秋乃に相応しい存在になりたいって思う。だから、何か見つけたいんだ」

「見つかるよ、直人なら」

秋乃はそう言つて静かに微笑んだ。

僕には今は何も無い。だけど、きつと何か見つけてみせる。僕は秋乃の色に、秋乃は僕の色に。お互いがお互いの役に立って存在している、こんなに素晴らしい事はない。秋乃に心配をかけないため

にも、もう彼女の前で悩むのはやめよう。何より、秋乃がかけてくれた言葉は、僕にこの上ない力を与えてくれた。

僕と秋乃の世界は、少しずつ前に進んでいくだろう。急ぎ足で紡いできたまだまだ小さな僕らの世界。強く長く、僕はこの世界を紡いでいきたい。ずっと先へと、僕らの道を繋げていきたい。

## 【第二十三話】

毎年思う事だけど、冬休みは短すぎると思う。短い中にクリスマスがあつて、年明けがあつて、あつという間に過ぎてしまった。今日から三学期が始まる。もうすぐ高校二年も終わりだ。来年は恐らく受験一色になってしまふのだろう。そう考えると、まだギリギリ気楽でいられる最後の期間がこの三学期だ。

軽く雪が混じる今朝の天気に加えて、ここ最近の冷え込みのせいで路面はすっかり凍結していた。この状態では自転車に乗る事も出来ないため、僕は仕方なく徒歩で学校へと向かっていた。いつもの交差点の前で、折原が腕組みをしながら僕を待っていた。

「よう吉岡、ここ数日寒すぎだな。ところでチャリはどうしたよ？」

「この状態で乗れるわけないだろ。俺一人なら何とでもなるけど、少なくともお前を乗せるのは無理だ」

「ずっと寒い中待ってたのに・・・」

「諦める」

がつくりとうなだれる折原を説得し、僕らとはほとほと歩き出した。しばらくして、坂本が曲がり角を曲がってくるのが見えた。いつもは坂本と秋乃は揃って歩いてくるはずだが、今日は秋乃の姿が見えなかった。僕は軽く手を上げて、彼女に挨拶した。

「あれ、歩きなんて珍しいねえ」

「道路がこんなだからな。ところで秋乃は？」

「今日は会わなかったよ？ほら、表彰あるから先に行つてんじやない？」

なるほど、そう言えば秋乃は毎回始業式で表彰されているんだつた。今日も恐らくその準備の為に早めに登校しているのだろうと僕は思った。

僕は学校に着くと、そのまま始業式の為に体育館へと入った。式が始まるまでの時間、僕は雑談をしながら過ごしていた。

「しかし、相変わらず野川はすごいよな。毎回賞取ってるんだもんな」

折原がふとそんな事を口にした。

「今回は自信作だったみたいだから、金取れてればいいんだけど」「秋乃は頑張り屋さんだからね。まだまだあの子は上に行けると思うけどな」

坂本の言うとおり、秋乃は頑張り屋だと僕も思う。才能もちろんなあるんだろうけど、人一倍努力を欠かさないのが秋乃だ。だからこそ、今まで取った事のない金賞を取って欲しいと言う願いが僕の中にあつた。

「俺も今度の大会では上に行くぜ？」

話の腰を思い切り折るように、折原が自信満々に言った。

「はいはい、あんたはいつも口だけなんだから。期待してないからせいぜい頑張りな」

「吉岡聞いた！？坂本は相変わらず俺には手厳しい・・・」

「折原はとりあえず結果を出してから色々言うべきだな」

「お前までそんな事を・・・」

やがて、式が始まった。ざわざわと落ち着きがなかった体育館内もすっかり静かになり、肅々と式が執り行われた。一通り式が終わって、さあいよいよ表彰だと思っていたら、退場の合図がかかった。

「あれ？」

僕らは三人揃って顔を見合わせた。

「表彰式は？」

「さあ？」

「てか、野川はどこ行った？」

疑問は解決される事なく、僕らは退場していく生徒の波に飲まれながら体育館を後にした。

教室に戻ってから、秋乃の姿は無かった。

「どう言う事なの？」

秋乃の姿が見えない事を不思議がった坂本が声を掛けてきた。

「いや、わからん。秋乃休んだのか？」

「野川が休みとか珍しいだろ。てか、今まで皆勤だったんじゃないか？」

折原が言うように、今まで秋乃は学校を休んだ事など無かった。

「ちよつと電話してみる」

坂本は携帯を取り出して、秋乃に電話をかけた。

「呼び出しはするんだけど、出ないね。何かあったのかな？」

難しい顔をしながら坂本はそう呟いた。

秋乃に何が起こったのかわからない僕らは、ああだこうだと不毛な想像と議論を始めていた。特に折原の想像だけは度を越えてぶっ飛んでいた。秋乃が誘拐されたただの家出をしただけの、好き放題に想像を巡らせていた。その時、坂本の携帯に秋乃からメールが届いた。「おい、何て書いてあった」

折原は坂本の携帯を奪い取らんとばかりに体を乗り出した。

「落ち着け！さわんな！」

折原を払いのけて、坂本が携帯を開く。

「で、何だつて？」

僕は坂本に尋ねた。

「今は出れないつて。でも家にいるから大丈夫だつて」

「何があつたんだ？」

「わからない。そこまでは書いてないから」

坂本はそう言つて一つため息をついた。ほつとした様な、気の抜けたようなそんなため息だった。

「吉岡」

「はい？」

坂本が急に真剣な表情で僕の方を見た。思わず僕は真面目に返事を返してしまった。

「今日学校終わったら秋乃の家に行つてあげて」

「え？」

「え？じゃない。詳しくは分からないけど何かあつたんでしょ。こ

「言う時はあなたの出番でしょ」

「いや、その、状況が分からないからどうすりゃ良いのか・・・」

「吉岡！あんた秋乃の彼氏なんだから、話聞いてあげればいいでしょ」

「いや、俺秋乃の家とか久しく行ってないんだが」

「つべこべ言わないで行って来なさいっての」

「はい・・・」

坂本に睨みをきかされると、逆らえない。と言うより、逆らわない方がいいのは明白だ。どんな目に合うかわかったもんじやない。

「おい吉岡、俺も一緒に行ってやるうか？」

「あんたが行くと迷惑だからやめときなさい」

「はい・・・」

折原の提案は一瞬でお取り潰しにあつてしまった。

結局僕は秋乃の分のプリントを持たされて、秋乃の家に行く事になった。秋乃が今の家に引っ越して以来、場所は知っていたが一度も立ち寄った事が無かった。そもそも、引っ越す前とか後とか関係無しに、秋乃の家に行くのは小学校の時以来かもしれない。僕は少し緊張しながら、秋乃の家のインターホンを鳴らした。

「どうも、吉岡です」

「あら、直人君？しばらくだったわねえ」

ドアが開いて、秋乃の母親が姿を見せた。

「秋乃に今日の分のプリントを。休みだったみたいなので」

「わざわざ来て貰ってごめんなさいね。あの子昨日から部屋に閉じこもったきり全然出てこないのよ。何があつたか分からないんだけど、話もしてくれなくて」

秋乃の母親は困った顔をしながらそう言った。

「ちよつとお邪魔してもいいですか？少し話をしてみます」

「ええ、どうぞ。声を掛けても放っておいてくれって言っばかりで、どうしようもないのよ」

僕は秋乃の母親に案内されて、二階にある秋乃の部屋の前までや

つて来た。

「秋乃、直人君が来てくれたわよ。いい加減に出て来なさい」

秋乃の母親は部屋の中にいる秋乃にそう声を掛けると、階下に降りて行つた。僕は部屋のドアをノックして中に入ろうとしたが、鍵が掛けられていた。

「直人、私の事は放っておいて。一人にさせて」

ドアの向こうから細かい声が返ってきた。

「秋乃、何があつたんだよ。折原も坂本も心配してたぞ？」

「心配掛けたのは謝るから、放っておいて。誰とも話したくない」「さつきより少し強めの口調で、そんな言葉が返ってきた。何があつたのかは分からないが、僕はどうしても秋乃と話さなければならぬような、そんな気分になつた。

「とりあえず落ち着けて。落ち着くまで待つてるから、それからでいいから何があつたのか話してくれ。」

僕は秋乃が落ち着くまで部屋の前で待つ事にした。秋乃と僕の根競べのような状況になつた。どのくらい時間が経つたか分からないが、秋乃の部屋のドアから鍵を開けるような音が聞こえた。

「秋乃、入つていいのか？」

返事は無かつたが、僕はそつとドアを開けて秋乃の部屋に入った。カーテンが閉め切られ、暗く閉ざされた空間に秋乃はいた。足元には、バラバラになつた何かが散らばつていた。

「どうして来たの」

消え入るような声で秋乃がそう言った。

「どうしてって、心配だつたからだよ」

元々は坂本にほぼ無理矢理行かされたようなものだが、今の僕は秋乃の事が心配でならなかつた。

「カーテン開けていいか？暗くて何も見えないし」

「駄目。こんな顔直人に見られたくないし……」

「……開けるぞ」

僕は秋乃の制止を振り切つて、カーテンを開けた。暗く閉ざされ

た空間に、光が差し込んできた。明るくなった事で、僕はようやく足元に散らばっていた存在の正体を理解する事が出来た。

「秋乃、これは・・・」

僕はその一部を拾い上げて言葉を失った。紛れも無くそれは、冬の絵画コンクール用に秋乃が描いて応募した絵であった。

どうしてこんな事を？そう言い掛けた僕は、何となく秋乃に何が起こったのかが理解できてしまった。

「落選したの」

秋乃は大きめの枕で顔を隠したままそう呟いた。そして、更に言葉が続けた。

「それで、昨日戻ってきた」

僕と秋乃の間に沈黙が生まれた。僕は秋乃に何と声を掛ければいいのかわからなかった。どの位の沈黙が続いたかは分からない。どちらから話を切り出すでもなく、時間だけが過ぎていった。実際はほんの短い時間なのだろうが、僕にとってはものすごく長い時間と思えた。しばらくして、ようやく秋乃が口を開いた。

「直人」

「ん？」

「私さ、直人と一緒にいて色んな事を知った」

秋乃はゆっくりと、小さな声で話し始めた。

「直人と一緒にいて、直人の話を聞いて、私の世界は今までに無かった色で満たされた」

「私、ずっと何も分からずに絵を描いていた。描きたいかどうかも分からなかった。でも、今回初めて、絵を描きたいと思って描いた」

「直人と付き合って、私の世界に直人から貰った世界を混ぜて、初めて自分の世界を表現したいって思って描いた」

「でも、駄目だった」

秋乃の声は震えていた。僕は胸の中で沢山の感情が渦巻いていたが、何を言葉にしているのか分からなかった。何を言えば秋乃を救えるだろうか。何を言葉にすれば、秋乃を癒せるだろうか。僕には



分からなかった。

「ごめんね」

「え？」

「直人から沢山色んな色を買ったのに、私じゃそれを表現する事すら出来なかったよ・・・」

秋乃は枕から顔を上げて、無理矢理作った笑顔を僕に向けた。その顔は涙でぐしゃぐしゃになっていた。そんな秋乃を目にした僕の心の中で、何かが音を立てて弾け飛んだ。

「なんで謝るんだ！」

僕は秋乃を抱きしめて強い口調でそう言った。

「秋乃が秋乃らしくいらればそれでいいんだよ・・・。結果なんていいんだ。秋乃が描きたいって思って描いたものなら、それでいいんだよ」

「でも悔しくて・・・」

「まだ俺たちの世界なんて始まったばかりだ。これからもっと沢山色だって増えていく。秋乃は描きたい絵を描けばいいんだ」

「でも・・・」

「俺は絵の事は分からない。でもこれだけは言いたい。俺は少なくとも、今回の絵を描いてた秋乃の姿は輝いてたと思ってる。俺の中では、今回の秋乃は間違いなく金賞だ」

「直人・・・」

「描きたい絵を描けたんだから、それでよしだよ。また次に向けて、世界は広がるんだから」

この後、秋乃は僕の胸の中で大きな声をあげて泣いた。今まで溜め込んでいたものを、何もかも吹き飛ばすように。僕はそんな秋乃をそっと抱きしめていた。秋乃は強い、そして脆い。今回の落選は秋乃にとってこの上なく悔しく、そして耐え難い洗礼となっただろう。だが、秋乃はきつと前に進めると思う。迷いも悔しさも、全てを自分の力に変えて、新しい彼女の世界を表現していけると僕は思う。



## 【第二十四話】

高校二年も終了間近に迫った三月、僕らは普段と変わらぬ日々を送っていた。

「俺カレーパンな。もう一個は吉岡のセンスに期待する」

「豆パンにしてやろうか？」

「豆は嫌だ・・・豆は・・・」

「冗談だよ。しゃーないから行ってくる」

「頼んだぜ」

ニヤニヤしながら僕を送り出す折原。ジャンケンに負けた僕は、折原の分のパンを購買に買いに行く事になった。時々こうやって買っていく役を決めていたりするが、正直折原に任せるとろくな事にならないので、僕が行った方がマシだ。以前折原に頼んだ時は、こねるだけごねて、結局売り切れで何も買わずに戻ってきた事があった。あの時の午後からの地獄は忘れない。

僕は購買で折原に頼まれたカレーパンと、クリームパン。後は自分用にパンを二つ買ってさっさとその場を後にした。昼休みの購買の混雑具合は異常だ。何より数がそこまで多くないため、奪い合いになる。僕らの戦場といっても過言ではない。

僕は両手にパンを抱えながら、教室の扉を足で開けた。その時、不意に背後から小さな声が飛んだ。

「あの、すみません」

そこには見た事がない女子生徒が僕の方を見ながら立っていた。雰囲気からすると恐らく一年生だろう。

「俺？」

僕は確認のために彼女に聞き返した。

「はい。すみません、折原先輩いますか？」

「ああ、いるけど。君、折原の知り合い？」

「はい。私、陸上部なんです。すみませんが、折原先輩呼んで貰っ

てもいいですか？」

「ちよつと待つてな。おい、折原ア！」

僕の声に反応して、折原がこちらに向き直った。だが、こちらに来る様子はなかった。僕は折原の席に近づき告げた。

「あの子、陸上部の後輩だろ？お前に用事だとさ」

「ああ？ああ、何だ急に」

「とりあえず行って来いよ」

僕に促されて、折原はそのそと教室の入り口に向かっていった。あれえ？茜じゃん。何しに来たんだろ？」

坂本が教室の入り口に目をやってそう言った。

「茜って言うのか、あの子」

「うん、上条茜。折原と同じ短距離の子なんだよね。あのバカに何の用かねえ」

「さあ？俺も呼んでくれって言われただけだしな」

僕と坂本がそんな話を話していると、入り口で立ち話をしていた折原がこちらに戻ってきた。

「茜なんだって？」

坂本が弁当を頬張りながら折原にそう尋ねた。

「ああ、悪い。ちよつと俺出てくるわ。吉岡、そのパン食ってていぞ」

「はあ？こんなに食べるわけないだろ。ってか、どこ行くんだよ」  
「まあまあ。ちよつくらいつてくらあ」

折原は何も詳しい事は言わなかったが、その表情は何故か緩んでいた。後輩からの呼び出し、折原の嬉しそうな顔……って事はまさかなあ。僕は色々と想像を巡らせた。

「何なんだ、あの嬉しそうなバカ面は……」

ふと横から不穏なオーラが流れてきた。坂本の方に目をやると、目が笑っていなかった。僕は背中に嫌な汗を感じた。

「り、理央ちゃん。フォーク曲がつてる、フォーク……」

秋乃があたふたしながら坂本をなだめた。坂本の手元に眼をやる

と、弁当箱の中のたこ型ウィンナーが真っ二つに分断されていた。それだけでは飽き足らず、秋乃の指摘通りフォークが折れそうな勢いで曲がっていた。

「おい、坂本落ち着け。どうどう」

「うっさいわ！」

坂本は簡単には落ち着きそうもなく、僕と秋乃はどうしたらいいかわからないまま時間だけが過ぎていった。

「はあ」

ようやく落ち着きを取り戻した坂本は、一つ大きなため息をついた。

「理央ちゃんどうしたの？あの子と折原君何かあるの？」

秋乃がそう尋ねた。

「うん、ちよつとね。てか、ごめんね。やっと落ち着いた」

「気にしなくていいよ。何かあるなら話は聞くからね？」

「うん、ありがと秋乃」

「で、あの茜つて子は何なんだ？」

僕は単刀直入にそう尋ねた。

「あの子はねえ、さっきも言ったけど折原と同じ短距離の子で、折原と一緒に練習してるのよね」

「ふむふむ」

秋乃は真面目な表情で坂本の話に耳を傾けていた。

「で、あの子多分、折原に気があるんだよね」

「理央ちゃんの恋敵？」

秋乃がさらつと言ったその言葉に、坂本は飲み物を嘔き出して咳き込んだ。

「何で秋乃が、そんな事を！？」

咳き込みながらそう言った坂本は、僕の方に向き直った。そう言えば、あの話は内緒と言う事になっていた気がする。だが、しばらく前に僕は秋乃に全部話してしまっていた。

「お前か？」

「えっ」

「お前だな？」

「・・・はい」

坂本の眼力に負けた僕は、いとも簡単に白状してしまった。それと同時に、坂本のヘッドロックが僕の首を襲う。

「これだから！男ってやつは！信用ならないんだ！」

「ギブ・・・ギブ・・・！」

ギリギリと締め上げられながら、僕は必死に坂本の腕を叩いてギブアップ宣言を出した。

「り、理央ちゃん、大丈夫だよ。私応援してるんだから」

「ちょ、何言ってるのよ！そもそも私は何も認めたくじゃ・・・」

「まあまあ、理央ちゃんも素直になった方がかわいいよ」

「か、かわいいとか！無いから！」

「えっ？かわいいよねえ？」

秋乃は僕の方を向いて、同意を求めてきた。こんな状況で振られても困るため、僕は必死に首を縦に振った。

「まあ、吉岡はどうでもいい。この裏切り者め」

「まあまあ、結果オーライって事で」

「何がオーライなのかわからないけど、秋乃がそう言うならまあ許す・・・」

坂本はやつと僕への敵意を解いたようだ。あのままやられていたら、たまったものではない。約束を破ったのは否定出来ないが、秋乃が言うように結果オーライと言う事で落ち着いて本当に良かった。

「で、恋敵なわけね」

「はい・・・多分」

すっかり大人しくなった坂本は、静かにそう言った。秋乃はいつもと違って、何故かお姉さんモードで話を進めていた。

「んー、でも私は折原君と理央ちゃんはお似合いだと思うけどなあ。折原君もその辺は感じてると思うんだけど」

「どうだか。あのバカの事だから餌を垂らされたらホイホイ食いつ

いて行きそうなもんだけど」

「折原君もそこまでじゃないと思うけどね。バ・・・ちよつと普段の行動がアレなのは認めるけど」

「私も私で、何であんなのが気になるのか・・・。自分が恥ずかしくなるわ」

「そんな事ないと思うけどなあ。折原君は行動はアレだけど、根はしっかりしてると思うよ？」

「でも見たでしょ？さっきの嬉しそうな顔。あんなもんなのよ」

「うーん、まあ何があつたのかも分からないから、とりあえず待ってみようよ」

「でも茜、いい子なんだよね。私と違って気もきくし、お淑やかだしね」

「理央ちゃんには理央ちゃんの良い所があるんだから、そんな事気にしたつて仕方ないよ？」

秋乃はふて腐れる坂本を説得しようと、あれこれと話を進めていた。

昼休み終了のチャイムが鳴った辺りで、折原が急いで教室に戻ってきた。そのまま授業に突入したため、結局折原と話す機会はなかった。

そして放課後、折原を置いて坂本はさっさと部活に行ってしまった。僕は、荷物をまとめて部活に行こうとする折原を呼び止めた。

「おい折原」

「ん？」

「ん？じゃないっての。昼休み何があつたんだよ」

「ああ、あれか。吉岡になら話してもいいか。俺今日は部活出ないから、帰りながら話すわ」

「おう」

僕と折原は、校門を出るまでは何も話さなかった。折原も、柄でもなく真面目な表情を浮かべていた。

「で、どうしたんだよ？」

「ああ。まあお前の事だから察しもついているかと思うが」  
「告られた？」

「ん、まあ、そんなもんだ」

あれこれと段階を踏んで話すのも面倒だった僕は、最初から率直に折原に尋ねた。折原の答えは、彼が言ったように僕の創造の中に含まれていた答えであった。

「驚かないのか？」

「まあ、大方予想通りだから。てかお前案外モテるんだな」

「茶化すなよ。別にそう言う訳じゃねえって」

「悪い。気にすんな」

僕は一息ついて、一番気になっている事を尋ねた。

「で、どうなったんだよ」

「断ったよ？」

折原から、さらつと答えが返ってきた。当たり前だろ？と言いたそうな表情で、折原は僕の顔を見つめてきた。

「そっか」

「何で？とか理由は聞かないのか？」

「別に、折原自身の事なんだから俺が根掘り葉掘り聞いても仕方ないだろう。そこまで詮索するつもりはないよ」

「詮索してくれよ」

「して欲しいのかよ！」

「まあ、な。お前にだからこそ言いたい事もある」

「じゃあ聞くけど、何でだよ？」

「何でだと思っ？」

「そう返すか・・・」

どっちが質問をして、どっちが答えているのか、僕にはわからなくなってきた。ただ、折原は僕に対して何かを言いたそうにしている。その事だけははっきりとわかった。それと同時に、僕はある事を折原に伝えたくなくなった。彼の中で、それがどんな位置付けなのかはわからないが、とにかく一度話しておきたい、そんな気持ちだった。



た。

「わかんねーけど、俺は一個だけ言いたい事がある」

「何だよ？」

「坂本はお前の事気になっただよ」

「それだよ」

「は？」

「俺だつてさ、そこまで鈍くはねえよ。わかってんだ、あいつの事は」

折原はまっすぐ前を向いたまま、はっきりとそう言った。僕はその張り詰めた空気を感じ取って、一息を飲み込んだ。

「だから断った」

「・・・そうか」

「俺はさ、坂本の気持ちには気づいてるよ。何となくだけどさ。そこまで自分に自信がある訳でもないから、何となくだ」

「おまえ自身はどうなんだよ。坂本の気持ちを知って、お前自身の気持ちはどうなんだよ？」

「そこが悩みどころだ」

「え？」

「あいつ、知ってたんだろ？俺が野川の事好きだったって事」

「・・・」

「隠さなくてもいいよ。俺らの仲間内で、隠し事なんか出来やしないだろ」

折原はそう言っただ笑った。

「だからこそ、悩むんだよ」

「どついう事だか、俺は分からない」

「そう簡単に乗り換えていいのかわかって事だよ」

「え？」

「俺は野川が好きだった。でも、今は未練は無い。だけどそれでも、今ここで簡単に坂本に乗り換えていいのかわかって思っただよ」

「乗り換えるって言っても、別に悪い事ではないと思っただよ・・・」

「そりゃ、長い人生だ。色んな人を好きになつたりは普通だと思う。だけど、なんか申し訳ないだろ？坂本にさ」

「何でだよ？」

「何でもだ。俺の中でそう思うだけだ。俺はあいつに好かれるほど、上等なもんじゃない」

「いや、意味がわからん。坂本はお前の事好きだつて言うんだから、それでいいじゃないか」

「ちげーよ。坂本の気持ちは嬉しい。でも俺は、ケジメつけないといけない気がしてな」

「何のケジメ？」

「自分自身にだ。野川に振られて、じゃあ次は坂本つてのは俺自身何か気に食わない。だから、俺は坂本に好かれるに相応しい存在になつてから、あいつに気持ちは伝えたい」

「坂本の事は好きつて事か？」

「ああ、好きだ。今の俺が好きでいて良いかは分からないけどさ」

「何も悪くないだろ」

「それでも、俺は決めたんだ。俺は結果を残す。それからあいつに気持ちは伝える」

「そうか・・・」

「こればかりは、絶対に内緒だぞ？」

「ああ、わかつてるよ。俺もそこまで空気読めない奴じゃないつて」

「だよな」

折原は軽く笑いながらそう言った。

「6月」

「え？」

「6月に俺の最後の地区予選がある」

「大会か」

「俺はそこで結果を残す」

そう言う折原の表情は、真剣そのものだった。普段の折原からは感じられないような自信が、その表情から見て取れた。

「お前なら出来るよ」

「ああ、ありがとな」

「でもさ、それだったら部活休んじやダメだろ」

「それを言うなって。友情を深める事も大切だ」

「とりあえず、これ食べよ」

僕は昼に残っていた折原用のパンを手渡した。

「サンキユ。実は結局何も食ってなくてな」

「バカだなあ」

僕は笑い合いながら、いつもの道を歩いていた。

## 【第二十五話】

短い春休みが終わり、ついに僕らは三年生に上がった。僕には、今年一年を過ごしたら卒業だと言う実感はあまりない。何故だか分からないが、いつも過ごしているようなゆったりとした日々が永遠に続いていくような、そんな錯覚にとらわれる。それが僕の望みなのかどうかは、自分でもよく分からない事だけど。

「遅いぞ、吉岡！」

ぼんやりとしながら自転車をこいでいたせいか、いつもよりも折原ポイントへの到着が遅れてしまったようだ。折原は待ちくたびれたと言わんばかりに、僕の自転車の後ろに飛び乗ってきた。

「ほれ、さっさと走れ。遅れちまうぞ」

「ちよ、そんな急かすなよ。のんびり行こうぜ」

「今日はクラス替えがあるんだから、さっさと行かないと掲示板見てる間にチャイム鳴っちまうぞ？ほれ急げ」

折原はそう言うのと僕の背中を勢いよく叩いた。鞭を入れられた馬のように、僕は一気に自転車を加速させた。背中から、折原の驚く声が聞こえる。お構い無しに僕はさらに自転車を加速させる。こんなくだらないやり取りが僕の日常だ。これもあと一年で終わってしまう。そう考えると少しだけ寂しく感じた。だからこそ、今のこの瞬間を少しでも楽しんでおきたかった。

「ちよ、安全運転！安全運転ですよ、吉岡君！？」

「えー、当自転車は急停車や急加速を行う場合があります。お乗りのお客様はしっかりとお掴まり下さいませ・・・」

「お客様は大切に扱ええ！！」

折原の焦った声は何故か心地よく響く。僕はだんだん楽しくなってきた。

「よし、新記録っ」

必死に自転車を走らせたおかげで、今までと比べるとありえない

くらい短い時間で学校に到着した。まだ春先だと言うのに、僕は朝から汗だくであった。

「速過ぎだったの！いくらなんでもな！」

折原は違う種類の汗を滲ませながらそう言った。顔は笑っていたが、目は完全に死んでいた。

クラス替えの告知は、昇降口前の掲示板に貼り出されていた。人だかりを掻き分けながら、僕と折原は掲示板の前まで辿り着いた。

「折原、何組？」

「ちよつと待てよ・・・よく見えねえ。あつ、俺1組だ。お前は？」

「俺、4組だ。今年は別々かー」

「うわつ、受験の年に4組とか縁起悪ッ」

「いや、関係ないだろそれ・・・」

僕と折原は掲示板の前でそんなやり取りを行っていた。

「野川と坂本はどこだあ？」

「お、秋乃は折原と同じだ。で、坂本が俺と同じ。何か変な分かれ方だなあ」

「マジだ。まあ、全員別々よりはマジじゃね？」

「そうかも知れないな」

僕と坂本が4組。折原と秋乃は1組になった。一年、二年と四人で同じクラスで過ごしてきたから、違和感とちよつとした寂しさが僕の胸の中に沸き起こった。完全にバラバラにならなかったのは確かに救いだ。受験の年、高校生活で一番重要な年だからこそ、本当は皆一緒に固まっていらればとは思ったけれど、そう簡単にはいかなかった。

僕と折原は教室前で別れを告げて、それぞれの教室へと入って行った。

「よし」

僕が教室に入ると、坂本が既に席についていた。彼女は一番後ろの窓際と言うベストポジションに陣取って僕に向かって手を振った。この学校では最初の席は早い者勝ちであった。きつと坂本はベスト

ポジション確保の為にいつもより早く登校していたのだろう。僕はまだ空いている坂本の隣の席に腰を下ろした。

「坂本と一緒にあ」

「なんか引つかかる言い方じゃない？」

「いや、そう言う意味じゃなく、皆一緒だったから何か違和感ない？」

「あー、それはある。てか、そもそもこの組み合わせが珍しいよね」「うむー」

僕と坂本はそんな話を話して笑いあった。

やがて始まった始業式で、僕らの担任は去年の担任と同じ長沼美羽先生に決まった。彼女はこの学校のゆるキャラと呼ばれるくらいおっとりしていて、穏和な教師である。ゆるキャラと言っても全てにおいて緩いわけではなく、案外しっかり者な部分もある。最後の一年を過ごす上で、この上なく良い人選であると僕は感じた。かたや折原のクラスはと言うと、学校一厳しいと噂の数学教師、通称デコメガネに決まってしまった。寂しくなった額と特徴的な黒縁眼鏡のせいで、彼は密かにそう呼ばれていた。

「折原と秋乃には悪いけど、うちはミーちゃんであつたよね……」

坂本が苦笑しながら耳打ちしてきた。

「ほんとになあ……。最後の最後に物凄いババ引いたな、折原……」

僕も、折原たちの悲劇を想像すると、苦笑するしかなかった。

その日の昼休み、僕と坂本は折原と秋乃がやってくるのを待っていた。しかし、彼らはいつまで経っても現れる気配はなかった。

「折原と秋乃遅いな」

「そうだねえ。ちよつと私様子見てくるわ」

坂本はそう言うとはたはたと教室を出て行った。そしてすぐに、大きく手でバツを作り首を横に何度も振りながら教室に戻ってきた。「なんだなんだ？」

「無理。おつそろしいオーラが漂ってるよ、あのクラス」

「一体何を見たんだ・・・」

「メガネが熱弁ふるってた。お説教？くわばらくわばら・・・」

「そいつは何とも・・・」

僕は心の底から、折原と秋乃に同情した。

結局待っても無駄と言う結論に至り、僕と坂本はいつもの様に屋上へとやって来た。

「桜、もうすぐかなあ」

坂本がフェンスから体を乗り出し、学校の周りの桜並木を見つめながらそう言った。

「かな」

「もうすっかり春だよ。風が気持ちいい」

「そうだな。あと一年でこの学校ともお別れか」

「ちよつと、始まったばつかなのにお別れとか。しんみりさせんなよ。最後の一年なんだから思いつ切り楽しんでやえればいいでしょ」

坂本はそう言いながら僕の背中を叩いた。彼女のポジティブ思考は、時々羨ましく感じたりする。

「俺はいいとして、坂本は悔いがないようにな？」

「え？意味が分からないなあ？」

少しの皮肉と悪戯っぽさを含めた僕の言葉に反応した坂本は、ニコニコしながらそう返してきた。僕にははっきりと分かった。これ以上つくと危険だという事が。

昼食を取りながら色々な話を進めていると、段々と坂本がヒートアップしてきた。

「ところでさあ、聞いてよ吉岡。茜ったらさあ、相変わらず折原にベタベタしちゃってさあ」

「はあ」

「そもそも、あの折原も折原よねえ。はっきりしないからな、あのバカ原は」

「はあ」

「つて吉岡、気が抜けまくってるなあ」

「はあ」

「はあ、じゃないわよ。秋乃がいなくて吉岡しか話し相手がないんだから、ありがたく付き合いなさい」

「坂本サンは秋乃にいつもこんな感じで話を・・・？」

「そうだよ？秋乃はいい子だぞ」。素直に聞いてくれるし、ちゃんとアドバイスをくれるし」

「秋乃、カワイソウに・・・」

「何か言った？」

「いえ、何も・・・続けて下さい」

結局休み時間が終わるまで坂本のマシンガントークは続けられた。女子同士の繋がりとは恐ろしいものだ。僕は痛感した。坂本も、以前の後輩告白事件以来色々となんか気がなまるところがあるのだろう。折原と坂本、双方の気持ちを知ってしまった僕としては、むしろもうはつきりと言ってしまった方が幸せになれるのになあと考えた。折原も変に真面目と言うか、形式ばったところがあるし、坂本はずっと前からこの調子だ。まさに凸凹コンビと言うに相応しい二人だと僕は思う。

「合わさればすんなり四角になるのになあ」

教室に戻る途中にふとそんな事を呟いた僕に、坂本が反応した。

「何か言った？」

「何でもない。こつちの話さ」

坂本の問いかけを軽くかわし、僕は心の中でほくそ笑んだ。折原と坂本・・・二人の運命は決まっているけれど、その結論を知るのには今のところ僕と秋乃しかいない。この神様みたいな立場を、せつかくだから楽しんでみよう。僕は決めた。すれ違ったり、遠回りしたり、素直になれなかつたり、色々な事がこれからも起こっていくのだから。僕はそれをそつと見守っていよう。そう言う日々の先に、僕と秋乃の様に、彼らにも明るい結末が待っているのだから。





## 【第二十六話】

三年生に上がって二カ月。あつという間に六月がやって来た。新しいクラスにも慣れ、僕は穏やかな日々を送っていた。

今月は、折原にとって重要な月になる。彼にとって最後の地区予選が迫っていたからだ。成績次第で、インターハイへの出場が決まる重要な大会だ。とは言っても、うちの学校はこれまでに陸上においてはインターハイ出場者を出した事がない。当の本人である折原に関しても、大会で優勝できるほどの実力を持っているのかどうかはかなり怪しい所だ。だけど、今まで大して真面目に取り組んできなかつたあの折原が、今回ばかりは本気モードになっている事を僕は知っていた。

去年の冬あたりから、彼はいつも一人で遅くまで練習していたし、休日も自主練習に励んでいた。インターハイに出場してくれとは言わない。それが簡単な事ではない事は、誰にでも容易に想像できる。ただせめて、彼にとって納得のいく結果を……。

「明日だなあ」

夏の絵画コンクールに向けて、絵の下書きを始めた秋乃がいる美術室。僕は遠くの空を見つめながら、ぼつりとそう呟いた。

「ん？」

秋乃が、そんな僕を不思議そうに見つめる。

「折原と坂本の大会」

「そうだね。二人とも頑張ってくれればいいけど」

秋乃は静かにそう言った。

「実はさ」

「ん？」

「折原、この大会が終わったら坂本に告白するんだってさ」

口止めされてはいたけど、もう明日に迫った事だしもういいだろ

う。僕はそう思っ、秋乃に折原から聞かされていた事を話した。

「そうなんだね。だとしたら本当に頑張ってもらわないとね」

「うむ。これで惨敗だったらかと思うとき、俺の方が胃が痛くなる  
っ」

「大丈夫。折原君はやれるよ。私はそう信じてる。だっ」

秋乃はやけに真面目な表情でそう言った。

「だっ？」

「折原君、あれ以来ずっと頑張ってきたもの。迷いとかそう言うの、  
無くなった様な感じで」

「秋乃に告白してから？」

僕の言葉に、秋乃は何も言わずに頷いた。

「あいつさ、秋乃の事好きって気持ちの中に、きつと憧れみたいな  
ものもあつたんだと思うな」

「憧れ？」

「そう、憧れ。俺とか折原にとって、秋乃は遠い世界の存在だから  
さ。そんな高みに近づきたいって、考える事も自然じゃないかな」

「遠い世界って、そんな事ないってば」

「いや、あるんだっ。実際俺もそうだった時がある」

「そうなの？」

「うん。だけど、俺にとっては高みを目指すのもアリだけど、秋乃  
の傍で支える事の方がいいって思ったから。だから俺は今の立場を  
選んだ。・・・諦めて妥協したみたいに見えるかな？」

「そ、そんな事ない。嬉しいよ、私は・・・。だから、直人の為  
も結果が欲しいなって思っちゃう。本当は、こういう事って自分の  
為に頑張らないといけないのかも知れないけど、自分以外の人の為  
に・・・って言うのも良いよね？」

秋乃は照れくさそうにそう僕に聞き返した。

「他の人はそうなのかも知れないけど、俺らは俺らで、これでいい  
んじゃないかな。俺も秋乃も、自分らしくいらればそれでいいと  
思う。それが一番いい」

「そつだよね」

秋乃もそう言つて微笑んだ。

「秋乃は、絵を描くのが好き？」

僕は、ふとそんな事を尋ねた。

「好きだよ。すごく」

「そつか」

僕と秋乃の会話が途切れた。美術室には、秋乃が下書きをしている音だけが心地よく、そして少し寂しげに響く。僕は少しだけ、以前の事を思い出していた。

以前、彼女はどんな表情で絵を描いていただろうか。楽しそうに描いていただろうか。そんなに過去の事じゃないはずなのに、何故かはつきりと思いつ事が出来なかった。その答えは、すぐに僕の目に飛び込んできた。沈みかけの太陽に照らされた彼女の表情は、以前とは見違えたように耀いていた。昔の秋乃の姿を忘れてしまっていたのは、きっと今の秋乃の耀きが、以前よりもずっとずっと強いからだろう。本当に楽しそうに絵を描くようになった秋乃。僕はそんな秋乃が愛おしくなり、絵を描く彼女をそつと後ろから抱き寄せた。

「私さ」

「え？」

「絵を描くのが好きだよ」

秋乃は、静かにそう言った。

「私さ、自分を言葉で表現するのそんなに得意じゃないから。だから、こんな小さなキャンバスにだけど、自分の想いとか、何もかも詰め込みたくなる。今のこの気持ちも、鼓動の高鳴りも全部……」

秋乃は、振り向かずそう語りだした。

「前は、自分でも何描いてるんだろう？って疑問に思ってた。でも今は違う。絵を描く事は、私って存在をアピールする事。私の気持ちを表現する事。だから、絵は私を映す鏡みたいなもの」

落ち着いた口調で、淡々と話す秋乃。

「絵を好きになれたって事は、きつと自分の事も、少しだけ好きになれたんだと思う」

秋乃はそう言いながら振り返った。言葉に迷う僕を尻目に、秋乃はさらに続けた。

「そんな風に思えるようになったのは、直人のおかげなんだと思う。だから・・・ありがとう」

秋乃は僕にそつとキスをした。

「こんな私を好きになってくれて、ありがとう」

秋乃は、少し照れくさそうにしなから僕に微笑みかけた。

その時、急に美術室のドアをノックする音が聞こえた。三回のノックの後、ジャージ姿の坂本がひょっこりと顔を出した。

「おや、二人ともいたか」

「り、理央ちゃんどしたの？」

秋乃は急な出来事に慌てながら、そう尋ねた。

「いや、もう帰る時間だったのに、折原がさっぱり練習止めなくてさ。明日大会だったのに、今日無理してどうするんだか。二人からも何とか言ってやってよ」

坂本はそんな事を漏らした。

「じゃあちよつと俺が見てきてやるよ。てか、坂本と秋乃二人で先に帰っててもいいぞ。俺、折原と帰るからさ」

「そつか。じゃあ頼むわー」

坂本と秋乃に見送られながら、僕は荷物を持って美術室を後にした。

それにしても、折原はまだ練習しているのか。明日は大会だから今日は早めに切り上げているものだと思っていたけれど、やはり折原は予想通りには行かない奴だなと思った。

グラウンドに出ると、確かに折原がまだ練習していた。もう他の陸上部員は切り上げたようで、残っているのは折原だけであった。

「折原！」

僕はグラウンドの隅から、折原に声を掛けた。だが、彼の耳に僕

の声は届いていないようで、またゆっくりとスタートラインに戻ると、自分でストップウォッチを持って走ろうとしていた。見かねた僕は、グラウンドに入って折原の肩に手をかけた。

「折原、お前だけ練習してんだよ」

「ああ、吉岡か。もうチヨイだけ、もうチヨイな」

「明日大会だろ？見た感じもうクタクタじゃないかよ」

「もうチヨイなんだって」

「何がもうチヨイだよ。止めとけて」

「じゃあ、これでラストにするから。ちょっとタイム計ってくれ」

「本当にラストにしろよ？約束だからな？」

「ああ、約束だ。って事で頼むわ」

強引な折原に負け、僕は仕方なくタイムを計る事にした。とは言っても勝手が分からない。ボタンを押せばいいだけではあるが、なれていないせいか手元が怪しい。

僕の合図で、折原がスタートする。スタート時は上手い具合にボタンを押せた。ほっとしている間に、折原がゴールする。折原は僕が思っているよりもずっと速く、一瞬だけストップのタイムミングが遅れてしまった。

「なんぼだった？」

折原が息を切らしながら僕のところに寄って来た。僕は無言で折原に、ストップウォッチのタイムを見せた。

「ふむ……」

「なんだよ、難しい顔して」

「いや、サンクス。さて、今日は帰るか。そう言う約束だったしな」

折原は僕にそう言うと、着替えの為に部室に戻っていった。そこに、坂本と秋乃がのんびりと歩いてきた。

「おーい、吉岡。折原どうした？」

「ああ、坂本。今着替えるからって部室に戻っていったよ」

「そかそか。あれ？ところで、それうちの備品じゃない？」

坂本はそう言って僕の手元のストップウォッチを指差した。

「さつき折原にタイム計ってくれって言われて、返すの忘れてたわ」  
僕は坂本にストップウォッチを渡した。その時、坂本の表情が固まった。

「何だこれ？」

「え？まさか俺壊しちゃった？」

「いや、このタイム。折原の？」

「ああ、さつき折原が走った時のタイム。でも俺慣れてないから、正確じゃないと思う」

「だよねえ。びっくりしちゃったよ」

坂本はそう言いながら笑い飛ばした。僕は坂本の言葉の意図するところが理解出来なかったから、この時は何も言わなかった。

「じゃあ私と秋乃は先に帰るから、吉岡は折原と仲良くね。一緒に帰ると汗臭くてたまらんからね」

そんな事を言い残して、坂本と秋乃は先に帰ってしまった。

「吉岡、待たせたな」

しばらくして折原が部室から戻ってきた。自転車を持ってきて待っていた僕は、折原をいつものように後ろに乗せた。

「安全運転で頼むぜ」

「はい、お客様・・・」

「うわ、めちゃくちや嫌な予感がするわ・・・」

僕と折原は顔を見合わせて笑った。いよいよ明日に迫った陸上大会。何とか頑張つて欲しいと心の中で祈りながら、僕はゆっくりと自転車を走らせた。今日ばかりは、折原は大切なお客様だから。

## 【第二十七話】前半

決戦の日がやってきた。この日は丁度休日で、僕と秋乃は待ち合わせて二人で会場へと向かった。

「何だか緊張するねえ」

「俺の方が緊張してても、どうしようもないよな」

会場に着いた僕と秋乃は、他校の応援団や生徒でいっぱいになった観客席で、そんな事を言い合った。僕らの学校では応援は任意である。もちろん応援団なんてものは来ていない。ぱつと見たところ、僕らの学校の生徒らしき集団は見当たらなかった。

「うちは吹奏楽部とか来てないのかねえ？」

「んー、見当たらないよね。せつかくの大会なのにちよつと寂しいな」

「まあ、うちは陸上はお世辞にも強いとは言えないからなあ・・・。仕方ないっちゃ仕方ない」

僕は、会場をぐるりと見渡しながらそう言った。

しばらく退屈そうに色々と見回していると、坂本が手を振りながら僕らの方に近づいてきた。

「よっ。応援来てくれたの？」

坂本は緊張している様子もなく、いつも通りの軽い口調で僕らに声を掛けた。

「理央ちゃん、やつほー。緊張してないみたいだねえ」

「緊張も何もなあ。私は結果分かってるようなもんだし、最後の記念大会よ、記念」

あつけらかんとした口調で、坂本はそんな事を言った。

「折原君は？」

「あー、あいつは出番早いみたいだからどっかでアップしてるんじゃないかな」



「そっか。折原君は緊張してないっばい？」

「うん、多分。てかあいつ、そう言うのとは無縁な気がするけどね」  
秋乃と坂本は、顔を見合わせて笑った。

「だけど」

「だけど？」

「何か今日の折原は集中してると言うか何と言うか、ちよつと朝から怖い雰囲気なんだよね。気合が乗っていると言うか、何と言うか「へえ。そんな折原君見た事ないね。でも、集中してるなら良いんじゃないの？」

「まあ、空回りしなきゃいいけどね。そうだ、これ今日の予定表ね」  
坂本はそう言って、僕に競技の予定表を手渡した。それによると、折原の最初の出番は後30分後くらいのようにだ。

「坂本、どのあたりからだと見やすい？」

「ん？この辺からでも見えると思うけど、前の方がいいんじゃないかな。すぐ目の前のコース使うからね」

「そっか、サンキユ。お前も頑張れよ」

「まあ、ほどほどに頑張るよ」

坂本は僕に笑顔を見せた。パツと見たところ、いつも通りの坂本なのだが、僕には少しだけ違って見えた。自分の結果が気になるというよりも、恐らく折原の結果の方が気になるのだろう。そんな雰囲気だった。

「秋乃、ちよつと前の方に移動しよう。埋まっちゃう前に」

「だね」

僕と秋乃は、一番前の席へと移動して、折原の登場を待つ事にした。どうやら、予定表によると最初に予選があつて、準決勝、決勝と流れていくようだった。とりあえず、最初くらいは勝ち上がってもらいたいところだが、これまでに実績のない折原の事だし、蓋を開けてみるまで全く結果は予想出来ない。僕は、少し胃が痛くなるのを感じながら、じつとその時を待っていた。

「あ、折原君来たよ」

「マジで？どこと？」

「一番向こう側のコース」

「ほんとだ」

秋乃が指差す先に、折原の姿が確認出来た。確かに、坂本が言ったようにいつもの折原とは雰囲気が違う気がした。いつもはバカげている折原でもこんな真剣な表情をするもんなんだなと、僕は少し感心した。

たった100メートルで、全てが決まってしまう。今までの折原の努力や、想いや、その他色々なものが評価されるには、100メートルは短すぎる。僕はそう思った。だけど折原は、この短い距離の中で戦う事を選んだんだ。あいつにとっては、短くないのかも知れない。果てしなく長いのかも知れない。どっちだっていい。あいつにとつて、何らかの結果が残れば、それでいい。僕は祈るような気持ちで、スタート地点に立った折原を見つめていた。

一体いつ始まるんだ？そう思うくらい、時間がゆっくりと流れている気がする。僕の胃がきりきりと音を立てる。ふと秋乃の方に目をやると、彼女もまた硬い表情で一点を見つめていた。

ついにスタートが切られた。一斉に前に飛び出す折原と他の選手たち。周囲の応援の声が一際大きくなる。僕も声を出そうと思ったが、息をする暇もないくらい集中していたせいか、声が出てこない。少し出遅れたように見えた折原は、ぐんぐん前に行く選手との距離を縮め、堂々と二着でゴールした。彼がゴールした瞬間、僕はずっと止めていた息を一気に吐き出した。

「直人、折原君二着に入つたよ！？」

「すごい、折原すごい！！」

僕と秋乃は、二人で大盛り上がりだった。周囲は歓喜とため息の両極端であった。何はともあれ、無事に予選を通過できた事を、僕と秋乃は手を取り合って喜んでいた。

僕は一旦秋乃を席に残し、折原が引き返してくるのに合わせて、選手が使う連絡通路の方に向かった。たくさんの選手や、観客が行

き来る中、僕は戻ってきた折原の姿を見つけた。

「折原！」

「お、吉岡。来てたのか」

「見てたぞ折原。予選突破やったじゃん」

「ああ、サンキュ。ぼちぼちってところか？」

「ぼちぼちも何も、毎回予選落ちだっただろお前。快拳だよ、快拳」

「案外ひでえ事言っな、吉岡先生」

僕と話す折原は、普段通りの折原であった。

「てか、しばらく時間空くんたる？ちゃんと休んでおけよ」

「ああ、そうだな。まあ、別に疲れてないんだけどな」

「いいから、休んでおけて。後悔するぞ」

「しねーよ。ところで吉岡君、こっそりと……こっそりしないかね？」

「は？」

「いいから、こっちに来なさい！」

「な、何なんだオイ！」

僕は半ば強引に、秋乃が待つ観客席とは違う観客席へと誘導された。

「何だつてんだよ、急に」

「吉岡君……あのチアの子、可愛いとは思わんかね？」

「はあ？」

「さつき走る前に目を付けていたのだよ。まあ、しばし目の保養と  
言う事で……」

「お前、坂本に殺されんぞ」

「なあに、この大人数の中だ。吉岡君が何も言わなければバレやしないよ」

折原はにやにやしなからそんな事を言った。少しでも折原の事を尊敬した自分がバカらしくなってきた僕は、大きなため息をついた。しばらく折原のバカトークに付き合っていると、ふと観客席にいる秋乃の姿が目にとまった。その隣には坂本の姿もあった。二人は

きよるきよると会場を見渡して、何かを探しているようだった。僕は、その様子を見てはっとした。

「おい折原、坂本と秋乃が俺らの事探してるって。戻らないとまずい」

「まあまあ、見つかるはずがない」

折原は全く聞く耳を持たなかった。その時、僕と坂本の目が合ってしまった。坂本は秋乃と一緒に席を立ち、一度会場の内部に姿を消した。

「折原、坂本にバレた！絶対バレた！」

「マジで？お前一体何してたんだよ！？」

「いや、俺のセリフだよ！とりあえず中に入って身を隠すぞ」

僕は折原を無理やり引つ張って、会場内部へと身を隠そうとした。その時であった。丁度こちらへ向かって来ていた坂本と秋乃に、思い切り鉢合わせしてしまった。

「いやあ、私の出番終わっちゃったよ」

坂本は、少し恥ずかしそうにしながらそんな事をいった。どうやら、僕らを問い詰めに来た様子ではないように思えた。僕は少しほっとしたのも束の間、空気を読まない折原がとんでもない事を口にした。

「え？終わったの？」

「ちよ、バカヤロ！」

僕は慌てて折原の口を塞いだ。

「え？見てなかったの？」

「いや、その、あのですね」

折原は自分の言った事に気づいて、慌てて言葉を濁し始めた。

「てか、あんたあそこで何やってたの？私の競技見てたんじゃないの？」

坂本の口調が怖い。顔は笑っているが目が笑っていない。

「吉岡、正直に言ったらあんたは無罪放免してあげるけど・・・？」  
坂本の恐ろしい視線が僕に向けられた。チラッと折原の方に視線

を向けると、彼は小刻みに首を横に振っていた。友情をとるか、無罪放免を取るか。秋乃も、坂本と一緒に僕らに不審の目を向けている。この状態で僕がとる道は、一つしかない。

「折原君がチアの子を見たいというものですから……半ば無理やり連れて来られていたわけです」

「ちょ！お前何て事を！」

「……このバカ原ア！」

坂本の拳骨が、会場を揺るがさんばかりの勢いで折原の頭に飛ぶ。「おおお……」

思い切り食らった折原は、その場で悶絶していた。

「吉岡、このバカを止めなかったあんたの責任も重い。秋乃、そうだよな？」

何故か話を振られた秋乃は、黙ってこくこくと頷いた。

「秋乃様もお主の罪は免れぬと言っておられるぞ」

「え？あの、さっきの取引は？」

「見苦しい！二人とも正座してる！！」

坂本は僕らを通路に正座させると、どかどかと秋乃と二人で何処かへと去ってしまった。

「吉岡。お前、ひどい奴だな……」

折原が、恨めしそうに僕の顔を見つめる。

「お前に言われたくねえよ……エ口原」

ひどい具合に巻き添えを食った僕は、がっくりと肩を落とした。

折原を売っても売らなくても、この結果は変わらなかったのだらうと思うと、少し損をした気分になった。目の前を通り過ぎていく人々の視線が痛いくらいに僕らに突き刺さっていた。だが、坂本に恐怖を感じる僕らは、黙ってその辱めを受け入れるしかなかった。

【第二十七話】後半

しばらく正座させられた後、秋乃の計らいで僕らは解放された。通行人に好奇の目で見られまくり、ひどく恥ずかしい目に遭った。もう二度と、外で坂本を怒らせないようにしよう。僕は固く心に誓った。

「直人、チアの人可愛かった？」

観客席に戻った僕に、秋乃はニツコリと微笑みながらそう尋ねて来た。さっきの坂本も怖かったが、今の秋乃も十分に怖い。坂本と同じように、目が笑っていない。

「いや、あの、すみません・・・」

僕は謝る事しか出来なかった。

「ほんと、折原も吉岡も下品で困るねえ秋乃。これが吉岡の正体なんだぞー？」

坂本は、秋乃にひそひそとそんな事を言った。

「何言ってるんだ、坂本は！秋乃、俺は違うんだからな。折原だけなんだからな！」

「見苦しいッ！」

「ひいっ」

必死に言い訳した僕は、秋乃の一言に怯まされてしまった。そんなやり取りをしながら、僕らは笑いあった。

「もうすぐかな？」

秋乃が予定表とにらめっこをしながらそう呟いた。

「かな？」

坂本は持ってきた弁当を頬張っている。

「さて、今度はちゃんと応援するかな。坂本も後は応援なんだろう？」

「そそ。私もここで応援するよ」

弁当に夢中になりながら、坂本はそう言った。

「折原調子いいみたいだぜ？いいとこまでいけんじゃないか？」

「どうだろうなあ。予選突破したのも初めてだし、準決勝の面子的にちょっと厳しい気がするなあ」

坂本は、思ったよりも冷静に分析を進めているようだった。

「坂本計算機による、折原が決勝に残る確率は？」

「んー。20%。二着に入る確率が20%ね。一位はない、まずない」

「案外さっぱりしてるな、坂本・・・」

「失礼な。名マナージャーと言って頂きたい。いつも見てるから、何となく分かるんだよね・・・今日のコンディションとか色んな事が」

「そういう風に見ても、厳しいって事か」

「そ。頑張っては欲しいけど・・・さ」

坂本は少し寂しそうな表情を見せながら、そう呟いた。

「お、出て来たぞ」

「あ、ほんとだ」

僕と秋乃は声を揃えてそう言った。

「折原ー！気張れよー！！」

坂本は一際大きい声で、そう叫んだ。声が届いたのか、折原は僕らに向かって軽く手を上げた。

坂本の言う事が正しいなら、ここが折原の最後の舞台になる。そう思うと、何だか急に寂しさがこみ上げてきた。折原の努力の結果は、ここまでなのだろうか。これ以上は届かぬ夢なのだろうか。坂本計算機は、僕のパツと見よりも正確である事は疑いようがない。だけど折原、お前はここで終わっちゃいけない。お前は秋乃と同じように、高みに行く事を選んだんだろう？迷いも何もかも吹っ切れたんだろう？結果を残して坂本に告白するんだろう？だったら、もう少しだけお前の姿を彼女の目に焼きつかせて見せる。お前なら、きつとそれが出来るはずなんだから。僕は心の中で、必死にそう叫んでいた。

折原がスタートラインにつく。諦めたような事を言っておきながら、僕らの中で坂本が一番緊張した表情でその様子を見守っていた。祈るように手を組み、じつとスタートラインを見つめている。息を呑む瞬間だ。

「あっ」

スタートが切られたと思った矢先、坂本の口から声が漏れた。フライングである。折原の隣の選手がフライングをしてしまった。選手たちは静かにスタートラインへと戻っていった。

「嫌な感じになったなあ」

坂本がそう呟く。集中力と言う意味では、今のフライングで相当そがれてしまった事だろう。元々不安げだった坂本の表情が、ますます不安色に染まっていくのが分かった。

沈黙の中、再びスタートが切られる。折原は先ほどとは違い、軽快にスタートダッシュを決める。

「おっ？おっ？」

隣で坂本が変な声を上げているのが聞こえた。僕は、折原から視線をはずさない。

折原は一気にトップスピードまで加速する。後続と距離が開く。そのまま、リードを保ったまま折原は一位でゴールした。坂本計算機が、爆発する音が聞こえたような気がした。僕らは、一瞬の出来事に呆気にとられ、ぽかんと口を開けたまま固まっていた。

「か、勝った？」

疑問系で坂本が呟く。

「勝ったな・・・」

それに合わせて僕も呟く。

「勝った！折原勝った！！」

坂本は飛び上がって喜んで、そのまま僕に抱きついた。

「ちよ、苦しいって！」

秋乃はそんな様子を見ながらどうしていいのか分からず、とりあえず坂本に合わせて僕に飛びついて来た。



「マジで二人とも落ち着け！」

折原は坂本計算機の予想を覆し、見事に準決勝1組トップで決勝へと駒を進めた。あいつはやっぱり、やれば出来るんだ。エロ原だったりバカ原だったりするが、やる時はやる。それでいいじゃないか。十分に格好いいよ、お前は。ゆっくりと引き上げていく折原の背に、僕は心の中でそう語りかけた。

「おい、吉岡。メシにしようぜ」

会場内部に降りていった僕に、折原が声を掛けてきた。

「てか、折原すごいな。決勝だぞ、決勝！」

「ああ、まあな。見直したか？」

折原は、あまり嬉しそうな素振りを見せなかった。淡々とした口調で興奮した僕の言葉に応じていた。

「俺が言うのもなんだけど、格好いいよお前」

「えっ、気持ち悪ッ・・・」

「殴るぞ？」

「うそうそ。冗談です。ところで、メシ食いにいきましょう。腹が減ってたまん」

「決勝前に食っていいのかよ？」

「いいんだって。腹が減ってるよりは力も出るだろ」

折原はそう言つと、僕をぐいぐいと引っ張って食堂へと連れ込んだ。

「俺は弁当あるから、お前だけ食えよ」

「野川の愛妻弁当か？憎たらしい奴だな！」

「いや、そんなんじゃないよ。ってそうなるのか？」

「余裕ですね、吉岡君。さすがは彼女持ち！」

折原はぶいっと僕から視線を外すと、券売機の前で何を食べようかと迷い始めた。そこに、坂本がやって来た。

「あっ、折原何やってんの？」

「坂本サン、なぜココニ？」

「何でカタコトなのよ。お腹空いたの？」

「ハイ、ペコペコデス」

「ああ、それならあんた用にお弁当作って来たからそっち食べない？」

「マジデスカ？」

「マジデスヨって、何言わせんの。ふざけてないで、席戻るよ。先  
行ってるから早くきなよ」

坂本はそう言い残すと一人でつかつかと先に行ってしまった。

「折原君、愛妻弁当ですか？憎たらしい奴だな」

僕はニヤニヤしながら折原をつついた。

「いや、そんなんじゃないよ……ってどうなんだコレ？」

「まあ、素直に喜んどけ」

「デスネ」

「おい、カタコトやめろ。気持ち悪い」

少し変になつた折原と僕は、坂本と秋乃が待つ観客席へと戻つた。

坂本は、折原用の弁当を用意して僕らを待っていた。

「良かったねえ折原君。理央ちゃんお弁当作ってきてくれたんだってさ」

秋乃がニコニコしながらそう言う。

「良かったねえ、折原君。良かったねえ」

それに合わせて僕も一緒にニコニコしてみた。

「何なんだ、お前ら二人して何なんだ！？」

折原は並んでニコニコしている僕と秋乃を見て、慌てていた。

「ほら、決勝近いんだから早く食べちゃいなつて。お腹一杯だと走れないでしょ」

坂本はそう言いながら折原に弁当を手渡した。そんな様子を見ながら、僕と秋乃は二人でうんうんと頷いていた。

昼食を終えた僕と折原は、腹ごなしに会場内部の通路をのんびりと歩いていた。

「緊張してないのか？」

「ん？別に……」

「普通緊張するだろ？決勝だぞ、決勝」

「俺様の強靱な精神はこの程度の事ではびくともしないのだよ」

「聞いた俺がバカだったな・・・」

「まあ、それは冗談だとしても、緊張はしてねえよ」

「そうなのか？」

「何でか分からないが、不思議と落ち着いてるんだ」

「ふーん」

「てか、何でお前が不安そうな表情してんだよ？」

「いや、だって決勝だぞ？こっちの方が胃が痛くなるわ」

「お前小心者だなあ」

折原はそう言って笑った。彼の屈託のない笑顔からは、確かに緊張の色は感じる事が出来ない。リラックス出来ているのだろうか。それが本当ならば、何も心配する事はないのだけれど。

「さて、そろそろ席に戻るか。少し座って休んで、後は決勝だ」

折原は大きく伸びをすると、通って来た道を引き返して再び観客席へと戻った。

「あ、折原。ちょっとこっち来なさい」

「ん？」

「もうすぐ出番でしょ。マッサージしてやるから」

「いや、いいっての」

「いいから、遠慮すんな」

折原は照れくさそうに拒否したが、坂本の強引さに負けて、黙ってマッサージを受け始めた。

「折原さ」

「ん？」

「頑張ったよね。今までに無いくらいたくさん練習したもんね」

「おう」

「いっぱい頑張った。だから、もうどんな結果でもいいから、悔いの無いように走って来て」

「分かってる」

折原は、静かにそう答えた。そして、ついに決勝の呼び出しがあった。

「さて、行かないとな」

折原はゆっくりと立ち上がった。

「・・・折原」

坂本は何かを言いたそうに、折原を呼び止めた。坂本の口からそれ以上の言葉は出て来なかったが、折原は全て受け止めたような表情で一言だけこう言った。

「行って来る」

坂本は黙って一つ頷いた。

運命の時が迫る。

緊張しながら折原の登場を待つ僕らの耳に、何やら聞きなれた声とどこかかという足音が響いてきた。

「間に合ったか!？」

「間に合いましたねえ」

そこには、デコメガネこと数学の安藤先生を筆頭に、僕らの学校の教師陣の姿があった。

「デコム・・・いや、安藤先生に長沼先生。どうしてここに？」

僕は、安藤先生と長沼先生に声を掛けた。

「おや？うちのクラスの野川じゃないか。それに四組の吉岡か。陸上部の応援か？休日なのに感心だな」

安藤先生が普段は見せない笑顔を見せて、僕の肩をバンバンと叩いた。

「折原君が決勝まで行ったって連絡が入ってね、集まれる先生達だけ集まって応援に来たのよ。決勝まで行くなんで、うちの生徒では初だもんね」

長沼先生は穏やかな口調でそう言った。

「折原、もうすぐ出てきますよ。ほら」

僕はコース上に姿を見せた折原を指差した。

「おおっ、折原ーっ！ーワシがついとるぞお！ー！」

物凄い大声で安藤先生が叫ぶ。教師陣が到着した事により、皆さんの折原への応援が飛び交うようになった。他の陸上部員も集まり、全員が折原へと注目していた。応援が盛り上がる中、坂本はじつと目を閉じていた。

「どうか、神様・・・」

そう呟く声が聞こえた。

折原よりもたくさん努力をして、たくさん練習をしている選手は大勢いると思う。だけど陸上の神様、もしいるのなら、僕らの期待の星である折原に奇跡を。ただこの一瞬だけ、彼に最高の走りをさせてあげて欲しい。坂本の隣で、僕も祈った。

スタートラインに、決勝まで勝ち残ってきた選手たちが並んだ。

どの選手も、僕には物凄く強そうに見えた。折原、頑張れ。よく頑張ったなんて過去形では言わない。今を頑張れ。

そして、大歓声の中決勝の火蓋は切って落とされた。折原は予選以上に出遅れてしまった。気の緩み？油断？違う。折原は僕と話している時は虚勢を張っていただけで、本当は物凄く緊張していたんだ。あいつの性格だから、誰にも心配をかけまいとして、必死に自分の中で戦っていた。その緊張が、ここに来て彼を最悪の結末に導こうとしている。

「折原あー！！！！」

僕は叫んだ。周りの陸上部員たちもそれに合わせて彼の名を叫ぶ。安藤先生も、長沼先生も、秋乃も坂本も。その声に伝えるかのように、折原は出遅れを取り戻さんと加速する。

「折原っ！！！！」

もう一度僕は叫んだ。ぐいぐいと追い上げる折原。だが、このままでは届かない。もう駄目かと思った時に、坂本が観客席から体を乗り出した。

「折原！もう少し！！もう少しだけ私に夢を見させてよ！！」

坂本の叫びが、一際大きく会場に響き渡る。折原はぐつと唇を噛み締めると、最後の力を振り絞って前に出た。折原の体がトップの

選手よりも少し前に出たその瞬間、彼はゴールへと転がり込んだ。見ている限りかなり際どい結果だったが、勝利の女神は折原に微笑んだ。

「勝った！折原君勝ちましたよ！？安藤先生！！インターハイ出場ですよ！？」

長沼先生が、興奮した様子で安藤先生に語りかける。

「よおつしゃあー！！折原、お前は最高だ！！！」

安藤先生も声の限りそう叫んだ。

「あいつ、本当にやった……。勝った……」

坂本はその場にへたり込むと、大粒の涙を流してそう言った。

ゴールした瞬間に豪快に転んだ折原は、すぐに立ち上がると、自分の順位を確認して拳を天に向かって突き上げた。そして、観客席の僕らに向かって、最高の笑顔を見せてくれた。彼のタイムは、信じられない事に僕が昨日グラウンドで最後に計ったタイムと同じタイムであった。昨日坂本がタイムを見て驚いていた理由が、この時はつきりと理解出来た。このタイムは、僕らの地区の大会新記録であった。

表彰式の間も、ずっと僕らの興奮は収まる事を知らなかった。坂本はずっとボロボロ泣いていたし、秋乃も貰い泣きしているし。長沼先生も化粧がぼろぼろになっていた。

折原は、僕らにたくさんのものを与えてくれた。言葉では言い表せない、たくさんのものを。今日この会場にいた僕らは、それらを手にし帰路についた。

## 【第二十八話】

折原の地方大会が終わり、僕らの間にも普段通りの日々が戻ってきた気がする。肝心の折原は、インターハイ本番に向けて今まで以上に真面目に練習を・・・と言うわけではないようだった。

「おう、吉岡。待たせたな」

放課後、デコメガネこと安藤先生に呼び出されていた折原が職員室から戻って来た。

「デコメガネ何だった？」

「ん？進路の件でちよつとな」

「ほう？」

「まあ、せつかくだから遊びに行きながら話そうや」

「ああ、そうしようか。てか、練習はいいのか？」

「たまには休ませないとな。何だかんだで無理させちまったしな」

折原はそういって足をパンパンと叩いた。

「あ、折原だ。吉岡も何やってんの？」

職員室の前で話しこんでいた僕らの前に、坂本と秋乃が姿を見せた。

「ああ、デコメガネに呼び出されてな。今終わったところだ」

「練習どうすんの？」

「え、いや、今日はちよつと吉岡君と遊ぼうかな・・・と思ったんだけど・・・駄目ですよな？」

折原はびくびくしながら坂本の顔色を伺った。

「そっか。まあ少しは休まないかね。ところで、私らも一緒に行つていい？せつかくだし、あんたの祝勝会でもやろうよ」

折原の予想と異なり、坂本は仕方がないなといった表情で受け入れた。怒られると思っていた折原は、不思議そうな表情で僕の顔を見つめてきた。

「だそうだ。良かったな、折原」

僕の言葉に、折原は黙って頷いた。

「なあ吉岡・・・何か今日の坂本はいつもと違う気がしないか？」

僕らの前を歩く坂本に聞こえないように、折原がそっと耳打ちをしてきた。

「何が？」

「いや、いつもなら練習サボるとか言った時点で鉄拳制裁は確定だろ・・・」

「株が上がったのかも知れんな、一昨日の大会の件で」

「マジか」

「多分な」

「何こそこそ話してんの？」

僕らのひそひそ話を、坂本は敏感に感じ取って反応してきた。

「いや、何でもないです」

畏まった口調で折原がそう返す。疑惑の目を向けながらも、坂本は何も言わずに引き下がった。

「地獄耳もここまで来ると凄すぎる」

「おい、今度こそバレるぞ。自重しておけ」

再度耳打ちをしてくる折原に、僕は苦笑した。

「ねえ吉岡？」

坂本が振り返る。

「ん？」

「どこに遊びに行く？」

「おい、考えないで歩いてたのかよ」

「いや、決めてるもんだと思ってたんだけど？」

「そついや何も考えてなかった。おい折原、どこがいい？」

「そうだなあ、この人数だしカラオケでも行くか。メシでも食いなからゆっくり出来るだろ？」

「だそうだけど、坂本と秋乃は？」

僕は二人に尋ねた。

「いいよ、オツケー」



「私もいいよ。歌える曲あんまりないけどねえ」

一通りの同意を得て、僕らはカラオケ店に入った。思ってみれば、いつも遊びに行く時は折原と二人が多かった。この面子でカラオケと言うのは、初めてのような気がする。

「さてさて、折原祝勝会始めよっか」

部屋に入るなり、坂本が注文をまとめて仕切り始めた。手馴れているというか、こう言う時に率先してムードメーカーになれる坂本は、僕らの中では貴重な存在だ。折原に任せると、恐らく際限なく羽目を外してしまうだろうし、秋乃は元々そう言うタイプではない。僕も、出来る事ならそう言うのはパスしたい感じた。

「それでは折原の地区予選突破を祝って、乾杯といきましょう」

坂本の音頭で、僕らは持ってきた飲み物で乾杯した。

「何か真面目に祝われても恥ずかしいだけなんだが」

折原は照れくさそうに頭を掻きながらそんな事を言った。

「まあ、黙って祝われてなさい。奇跡は何度も起こらんよ」

坂本はそう言って笑いながら、折原の背中をバンバン叩いた。僕は一昨日終わったばかりの大会の話で盛り上がった。

「決勝の時の折原君、凄かったね」

秋乃は感心した様子でそう折原に声を掛ける。

「だろ？見直したか？」

「うんうん」

得意気に応える折原に、秋乃は勢いよく首を縦に振った。

「折原君が出遅れた時、観客席で皆固まっていた。もう一瞬でお通夜みたいな感じになって」

「あれは仕方がないだろ。さすがの俺も緊張くらいはするってもんだ」

「でもあの後凄い追い上げだったよね。理央ちゃんの声が届いた？」

「ちよっ、秋乃！あんた何言おうとしてるの！」

秋乃の言葉を聞いて、坂本が焦って秋乃の口を塞ごうとした。

「ん？さすがに夢中で何も聞こえなかったぞ。てか、坂本何て言っ

てたんだ？」

折原は秋乃の発言に興味を持って追求を始めた。坂本の顔が見る見るうちに赤く染まっていくのが見て取れた。僕は三人のやり取りが面白く、黙ってそれを見つめていた。

「理央ちゃん凄いこと言ってたんだよ」

「どんなどんな？」

既に折原は興味津々だ。坂本は慌てながら秋乃を制止しようとしているが、テンションが上がってしまった秋乃は止まらなかった。

「えつとねえ」

「秋乃！！」

物理的に制止するのは不可能と感じ取った坂本はそう叫んだ。ビクツと秋乃の体が跳ね上がって、言葉が止まる。

「あ、いやね、私もあの時必死だったから、何言ってたかなんて覚えてないんだよね・・・ハハハ」

坂本は、はつと我にかえってそう笑い飛ばした。何らかの圧力をかけて来る時と同じように、目は笑っていないかった。それに気づいた秋乃は、何も言いませんと意思表示をするように、自分の口を手で塞いで見せた。

「よろしい」

坂本は一言そう言って秋乃の頭を撫でた。

秋乃が黙り込んだ事で、折原はつまらなそうな顔をしていたが嵐は回避する事が出来た。僕も坂本が言っていた言葉は覚えているが、ここは黙っている方が吉だろう。何事もなく僕らの楽しい時間は過ぎてゆく。歌って、飲んで、食べて。気がつくの数時間が過ぎていた。僕はふと、学校での折原とのやり取りを思い出し、彼に尋ねた。「ところで折原」

「おう？」

「デコメガネに呼び出された件って何だったんだ？」

僕の言葉を聞いて、折原はあれかと思いついたような表情を僕に向けた。

「吉岡、トイレ行くから付き合え」

「はあ？」

「いいから一緒に来いって。ほらほら」

半ば強引に、僕を部屋の外に連れ出す折原。折原の行動に疑問を感じながらも、真面目な表情で僕を引っ張る彼に何らかの事情を感じた僕は、黙って従う事にした。

「どうしたよ、急に」

「ちよつとな。皆の前では話しづらい」

「そうなのか？どんな話だったんだ？」

「実はさ、陸上に力入れてる大学があつて、そこへの推薦の話を取り付けてやるって。安藤が」

「マジで？やったな折原、お前バカだから大学行けないんじゃないかって心配してたんだぞ」

「おい、随分はつきり言うな。でも、複雑なんだよなあ」

折原は僕に突っ込みを入れた後、少し表情を曇らせた。

「何が複雑なんだ？」

「いや、よく考えてみるよ。俺みたいなぽつと出が、そんな大学でやっていけると思うか？たまたま今回の大会で勝っただけで、どれだけ実力があるかなんて分からないだろ」

「勝っただけでも十分凄いと思うんだが。インターハイ出場も決まったし、もつと自信持てよ」

「どれだけ全国の猛者が集まってると思ってるんだよ。そんな中に入ったら、俺なんてちつぽけなもんだつての。なのに安藤の奴勝手に盛り上がって、笑えねえよ」

折原は苦笑しながらそう言った。珍しく、自信の無い沈んだ表情を見せる折原。いつもの折原は調子に乗りすぎなところもあると感じる僕だが、こういう折原は何となく嫌だ。彼らしくないと言うか何と言うか、僕の中で急上昇した折原株を下げられたようで、少しだけがっかりした部分もあった。

「そりゃそうかも知れないけど、悪くはない話だろ？」

「悪くはないけどさ。それでもやっぱり複雑だよ」

「てか折原、坂本の件はどうなった？」

自信の無い雰囲気を保つままの折原に、これ以上同じ話をしても平行線だと思つた僕は違う話題を投げかけた。こっちはこっちで、僕の中では気になっていた重要な話だ。

「ああ、まだ何も」

「何だよ、そつちも自信無しか？」

「いや、そう言う訳じゃなくてさ。あれはこの前の大会で終わりでつてのが前提だったわけ・・・」

「ほほう？」

「まあ、せつかくインターハイ出るし、その後にもって思つてな」  
折原はそう言いながら頭を掻いた。僕は彼の言葉を聞いて、ある事を思いついた。上手くいけば彼の自信喪失状態を少しはマシに出来るのではないかと思つた。

「その肝心のインターハイ、自信が無いんだろ？」

僕の言葉に、折原は何も言わなかった。言葉は出て来なかったが、明らかにYesと言いたげな表情をしている。

「で、インターハイでひどい成績残して坂本に告白するのか？」

「ぬ・・・」

若干意地悪が過ぎる気がするが、僕は構わずに続けた。心の中で必死にごめんと謝りながら。

「そんなの格好悪いったらありやしない。俺だったらがっかりだよ」

折原は相変わらず黙つたまま何も言わない。凶星過ぎて、何も言えないのは分かつている。だけど僕の言葉から何かを感じ取ってくればそれでいい。僕は悪役でも何でもいい。

「一昨日告白せずにインターハイ後について決めたなら、もう後戻り出来ない。やるしかないんだよ、お前は。結果残せよ、それしかないんだ」

「そりゃそうだが吉岡、インターハイだぜ？地方大会で予選落ち常習だった俺がインターハイだぜ？幾ら何でも飛び越えすぎだろ」

僕の思いは届かないのだろうか。僕は分かる。自信を持って本気で挑めば、折原に出来ない事はない。だけど肝心の自信が、ここに来てすっかり失われてしまっている。簡単な事じゃないのは分かるけど、ここで折れるべきじゃないだろう、お前は。

「坂本が言ってたぞ」

「何をだ？」

僕は申し訳ないと思いつつも、坂本の話を出す事にした。今なら彼女もいないし、僕と折原の間だけの話に出来る。

「お前が決勝で出遅れた時だよ」

「何て？」

「もう少しだけ、夢を見させてくれって。・・・そう叫んでた」

「・・・夢？」

折原は不思議そうな表情をした。

「俺には分かるんだよ、折原。俺と坂本は同じようなものだから」

「どう言う事だよ？」

「坂本は、お前に夢を託してるんだよ」

「俺に？坂本が？」

「そうだ。俺が秋乃に、そうしている様に」

「よく分からないんだが・・・」

折原は僕の話聞きながら首を傾げた。

「そりゃそうだよ。折原は俺ら側の人間じゃないから」

「側って何だよ？」

「実際はもつと色々あるかも知れないけど、これは俺が考えた分類だから、その前提で聞いてくれ」

僕の言葉に、折原は黙って頷いた。

「俺はこの世の中には、才能があつて夢を自分で叶えられる人間と、そうでない人間がいると思う。才能が無くて夢を諦めてしまう人とか」

折原は僕の言葉を理解しながら、うんうんと相槌を打つ。

「後もう一つ、いると思うんだ」

「もう一つ？」

「才能を持つ人が夢を叶えられるように、見守り、支えていく人間だよ」

僕ははつきりとそう言った。折原はようやく僕が言いたい事を察したのか、ハツとした表情を見せた。

「俺は、才能なんて無い。だから、俺は自らその道を選んだ。情けない話に聞こえるだろ？人の才能を当てにして、自己満足に浸ってるみたいでさ」

どうしても自虐的な言い方になってしまっけど、僕は思う事ははつきりと折原に告げた。

「でも、そんな俺の事を必要としてくれる人がいるって分かった時、そんな事はどうでも良くなった。その人の為に、出来る事をやるって、ただそう思った。きっと、坂本も俺と同じ気持ちだと思うんだ」

「吉岡・・・お前」

「折原は、坂本の事を必要としていないのか？」

「必要だよ！あいつがいたから頑張れた。そんな気がしてんだ。俺がここまで来れたのも、あいつのおかげだって思ってる」

折原はさつきまでの自信の無い表情とは打って変わって、強い口調でそう言った。

「だったらやる事は決まってるんだろ。お前は必死に走れ。坂本の夢も乗せて走れ。たとえどんな結果になっても、とにかく走ればいいんだ。さつきみたいな情けない表情して坂本の気持ちを踏みにじるような真似したら、ぶっ飛ばすからな」

「そうだな・・・」

折原はそう言って笑った。

「出来るよ、お前なら・・・」

僕は、折原には聞こえないような小さな声でそう呟いた。

僕と坂本は似たようなものだ。才ある者を支え、少しでも力になれば、それでいい。それだけでいい。僕らの夢は、君たちのよう

に才ある者が活躍する姿を見る事なのだから。だから、変なところで挫けたりしないで欲しい。どんな事があっても前に進んで欲しい。君たちは君たちらしく、常に前を見て進んでいけばいい。君たちが通る道は、僕らが作るから。

【第二十八話】（後書き）

いつも読んでくださっている読者の皆様、どうもありがとうございます。初めましての方は初めまして。でこと申します。

毎度更新遅くなりまして申し訳ありません。

物語も終盤と言う事で、残りも少なくなつて参りました。最終話に向けて更新速度も上げて行きたいと思っておりますので、もう少しだけお付き合い頂ければ幸いです。

どうぞ宜しくお願い致します。



## 【第二十九話】

「これで完成つと」

秋乃はそう言って笑顔を見せた。束ねていた髪を解くと、気持ち良さそうに大きく伸びをした。

「あー、風が気持ちいい。籠りっぱなしだと腐っちゃうよね」

「気持ちいいかあ？こんな暑いのに」

「気持ちいいけどなあ？うーん、最高！」

窓を開けると暑苦しい風が吹き抜ける、そんな七月半ば。僕らは間もなく夏休みを迎える。今年の夏休みはどうせ勉強漬けになる事は覚悟している。なにせ受験の年だ、うかうかしている訳には行かない。僕はとりあえず、しつこく行われる進路希望調査には無難に地元の私立大学の名前を書いておいた。困難とも楽とも言えない何とも微妙なレベル。何をやりたいかが決まった訳ではないが、とりあえずと言う事だ。勉強さえしていれば、後で多少の変更はきくだろうし。

ちなみに秋乃はデコメガネからの強い一押しもあってか、美術大学への推薦を受ける事にしたようだ。折原はまずは目の前のインターハイに集中したいからともっともらしい言い訳を付けて、まだ保留と言う事になっているらしい。坂本は一般入試の予定だから、必死に勉強している。デコメガネのせいで、秋乃と折原はなかなか教室を抜け出して来れないため、必然的に坂本と過ごす時間が増えた。僕らは頭の程度が似ているらしく、一緒に勉強するとなかなか捗る事が分かった。

少しずつだけど、僕らはゆっくりと未来へ向かっている。何が待っているか分からない未来へと。

「おーい、折原！坂本！」

秋乃と揃って外に出た僕は、グラウンドにいる折原と坂本に声を掛けた。どうやら丁度練習が終わった感じだ。

「おう、吉岡。ちょっと待ってる、俺らも今日はもう帰るから」

折原は軽くそう言っていると、部室に入ってしまった。

「おっす、お待たせ」

先に出てきた坂本は、僕らに手を振った。

「理央ちゃん、お疲れ様」

「秋乃、絵描き終わったの？」

「うん、さっき仕上げてきた。後は送るだけだね」

「そかそか。一段落着いたんだからゆつくりしなよ？」

「そうだね。ところで、折原君の調子はどうなの？」

「ん？あいつ？まあ、なかなかいいんじゃないかな。今良くても、本番どうなるか分からないしねえ」

坂本はそう言いながらカラカラと笑った。

「おう、待たせたな」

折原が着替えを終えて僕らの前に姿を見せた。秋乃と坂本は、最近滅多に顔を合わせなくなっただけか、二人して話に夢中になっていた。僕らは彼女らが楽しそうに話す姿を見ながら、後ろからとぼとぼついていっただけだった。

「折原、最近どうよ？」

「どうよって何がだよ？」

「色々だよ、色々」

「何が何だかよく分からんが、ぼちぼちじゃね」

「ふむ。ところで、インターハイ勝てるんだろっな？」

「はい？無理に決まってるんだろ！どんだ大金星を俺に期待してるんだ？」

「まあ、惨めな姿だけは晒さない事だな・・・」

「大丈夫だ、散る時はきれいに散ってやるさ」

折原はそう言いながら笑った。見た感じ調子は上々で、緊張やらプレッシャーもないらしい。まあ、うちの学校からインターハイ初出場って事もあって、完全に立ち位置は挑戦者だ。その方がきつと、気楽に走る事が出来るだろうと僕は思った。

「そういえば折原、今回は学校ぐるみで応援に行くらしいぞ？」

「ああ、デコメガネから聞かされた……。てか、あいつが結構張り切っていると言うか乗り気らしいな。余計な事してくれちゃってまあ」

折原は大きくため息をついた。

「まあ、お前はリラックスしてる方がたぶん強い。気楽にやれって」「俺も非常にそう思うから、気楽にやらせて欲しいもんだぜ」

折原は少し呆れ顔でそんな事を言った。

あつという間に夏休み、そして折原の一世一代の舞台がやってきた。デコメガネが言っていたように、本当に学校ぐるみで折原応援団が結成された。強制と言うわけではなかったが、そこその人数が集まった。大半の生徒は、ただ単に旅行に来ただけだった。理由が多そうなものだが。理由はどうあれ、結構な人数が集まった。僕らの学校は、他校の応援団にも負けなくらいの規模を誇っていた。

「折原」

「はい、何ですか吉岡君」

「めっちゃくちゃ緊張してるな、おい」

「イヤダナ、ソナナコトナイデスヨ」

「ありありだろうが！」

僕は緊張で固まっている折原の背中に、一発平手打ちをくれてやった。

「考えてても仕方ないから、無心で走ってこい」

「ワカリマシタ」

折原はそういう残すと、力なく手を振りながら控え室へと消えていった。本当に大丈夫だろうかと僕は心配になったが、控え室には坂本もいる。彼女ならきつと、上手い具合に折原の緊張をほぐしてやる事が出来るだろう。何せ彼女は名トレーナーだ。折原以上に、折原の事を知り尽くしているに違いない。だから大丈夫。僕は自分にそう言い聞かせながら観客席へと戻った。

僕の心配をよそに、折原は無難に予選を突破。そして勢いに乗っ

て準決勝もギリギリ突破してしまった。ガチガチに緊張していた折原に何があつたのだろうか。何にせよ、あいつはこの大舞台でとんでもない事をやらかしてくれている。僕らの学校の生徒は、ほとんどは半信半疑で応援に来ただろう。だが、今は違っていた。始まつた時とは比べ物にならないほどの熱気が、観客席を包んでいた。デコメガネは傍から見ても大丈夫かと思うくらいに興奮している。それを長沼先生が必死になだめている姿が、何だかおかしかった。

「直人、折原君凄いね。どこまでいっちゃうんだろう」

「次で最後だ、次で」

「ほんとに凄い。だって、全国の凄い選手が集まつてるんだよ？そこで決勝なんて、ほんとに凄い」

「それを言ったら秋乃の絵だって凄いと思うんだけど？」

「そう？」

「だって、全国で金とか銀とか取ってるだろ？」

「まあ、それはそうだけど。ただ、折原君の方が凄いように思えちゃうよね」

「俺からしたら、どっちも凄いなと思うけどな・・・」

僕は少しだけ、全国規模で語れる二人が羨ましくなった。折原はバカなだけで、僕と同類と言うか、僕よりも下だと思っていたのに、何だか折原の存在がどんどん遠ざかっていくような、そんな感覚を覚えた。

「あつ、来た来た！折原君来たよ！」

秋乃はそう言いながら指をさした。

「おいっす、お二人さん」

「おう、坂本。戻ってきたのか」

「うん、あたしゃもう胃が痛いよ・・・」

「ほら、坂本の胃痛の原因が出てきたぞ。最後だから応援しようぜ」

「あー、痛い。結果はもうどうでもいいから、早く終わって欲しいよ・・・」

坂本は苦笑しながら胃の辺りを押さえた。

ついに、折原がスタートラインに立った。決勝に上がってきた選手は、どの選手も折原よりも速いベストタイムを持つ強豪だ。正直、ここばかりは分が悪い。とにかく無事に終わってくれば、それに越した事がない。折原、お前はよくやったよ。これで最後だ。気持ちよく走って来い。僕は祈るような気持ちで、静かにスタートの時間を待った。結果はどうでもいいと言っていた坂本は、物凄く真面目な表情で折原を一点に見つめていた。地方大会の時のような、祈る姿はもう見られない。彼女の真剣な眼差しは、折原に対する信頼の証だろう。ずっとそばで折原を見てきた、そんな彼女だからこそ見せられる強い眼差しだった。

そして、折原の最後の走りが始まった。明らかにトップを行く選手と、それに続く選手は格が違う。素人の僕から見ても、圧倒的に他よりも速かった。ぐんぐんと他の選手を引き離していく前の二人そこに必死に食らいつくように、折原の姿があった。その姿を見たとき、僕の意思に反して言葉が勝手に溢れ出した。

「折原！お前すげえ！いけるって、絶対いける！折原そのまま行け！！」

僕は必死にそう叫んでいた。

必死に走る折原。だが、前の二人には追いつけない。

「折原、そのままだ！そのままがいい！」

声が擦れるのが分かる。それだけ大声で、それだけ必死で叫んだ。一人孤独に走る折原に届くように。少しでも彼の力になれるように。ただひたすらに、僕は叫ぶ事しかできなかった。

折原は、前に行く二人にそれ以上離される事無く、そのままゴールに飛び込んだ。ギリギリではない。誰の目から見ても明らかかな、三着であった。一斉に僕の周りから歓声が沸き起こった。まるで周囲を揺るがすかのような、大きな大きな歓声だった。

「おい坂本、やったぞ！折原やりやがった！三着だよ、三着！！」

僕は目の前で起こった出来事に興奮しながら、坂本の体を必死に揺すった。

「坂本？」

僕の呼びかけに応じる事無く、坂本は一点だけを見つめていた。

その視線の先には、遠くで僕らに向かって手を振っている折原の姿があった。走り終わって、何もかも出し尽くして、本当は今すぐにも倒れて休んでしまいたいだろうに、それでも彼は笑顔で手を振っていた。

「どうしてだろうね」

ぼつりと坂本が呟いた。

「私にとってはいつもの事なのに。あいつが走って、どうだった？  
って私に笑顔を見せて。いつも通りの事なのに」

「どうしてこんなに・・・ほっとするんだろう」

坂本の頬を、一筋の涙が伝った。

やがて表彰式がとり行われた。折原は銅メダルを手にして、僕らの方に向かって掲げて見せた。結果は三着。上には上がいる。それでも、彼は誰よりも耀いて見えた。間違いなく、折原は僕らのヒーローだ。やれば出来るという希望を与えてくれた。才能ももちろんあるのだろう。けどそれ以上に、彼の努力とそれを支えた坂本の力が大きいと僕は思う。二人の力が生み出した、最高の結果だ。

表彰式後、僕らと合流した折原は半強制的にデコメガネ軍団の胸上げにあっていた。彼に与えられた僕らの熱気は、収まる事を知らなかった。結局祝賀会だなんだと盛り上がり、自由になったのはずつと後の話であった。

宿泊先のホテルに戻った僕らは、ようやく自由になれた。ロビーでぐったりしていると、秋乃がそそくさとやってきた。どうやら、折原が坂本を呼び出したらしい。

「マジか」

「マジだ」

「いよいよか」

「いよいよだ！」

僕と秋乃は、二人でそう言うと、折原たちがいるホテルの中庭に

こっそりと身を潜ませた。何を話しているのかと聞き耳を立ててみたが、まだ二人とも何も話していないようだった。

「終わっちゃったなあ」

折原が、軽い口調でそう言った。

「そうだね」

静かに呟く坂本。心なしか、坂本は口調が固くなっていた。

「ちゃんと結果残せて良かったよ」

「そうだね」

会話が続かない。折原も何を言おうか困っているようで、会話が単発になっっていた。

「坂本」

「何？」

「ありがとう」

折原は一言そう言うと、坂本の首に銅メダルをかけた。

「えっ、これ・・・」

「全部、坂本のおかげさ。お前がいなかったら、俺はきっとここま  
で来れなかった。だから、ありがとう。そのメダルは俺じゃなくて、  
お前に持つて欲しいんだ」

折原は照れくさそうにしながらも、はっきりと坂本にそう告げた。  
坂本は、感情が昂ぶっているのか、何も言えずただその場に立ち尽  
くしているだけだった。

「私は」

坂本が必死に言葉を搾り出す。

「私は、何もしてない。自分で何も出来ないからって、あんたに勝  
手に夢を託して、勝手に自己満足に浸ってただけで。私、何もして  
ない・・・。だからこんな、あんたの大事なメダル、受け取れるは  
ずがない」

「だから、そういう部分に関してもだ。俺なんかにお前の夢を託し  
てくれて、ありがとう。坂本に期待されてる事が、嬉しかったんだ」

折原は、真剣な表情でそう言った。彼の言葉を聞いた瞬間、坂本

の目から涙が零れ落ちた。

「私の方こそ、ありがとう。夢を叶えてくれて、ありがとう。自分じゃ絶対に叶えられない夢、折原に託して良かった。競技者として失格だよな？他人任せだよな？でも私、今に満足してる。そして何より、ほっとしてる・・・」

坂本の溢れ出した感情は、もはや止まる事はなかった。

僕の隣で息を潜めている秋乃も、もう貰い泣きでボロボロだ。

「折原、私さ」

「坂本」

折原が、何かを言いかけた坂本の言葉を止めた。

「俺も言いたい事がある。だから、今日は譲ってくれないか？」

真剣な表情でそう言う折原の気迫に負けたのか、坂本は黙って頷いた。折原は視線を空に向けて、一つ大きく息を吸い込んだ。

「俺は・・・」

「お前の事が好きだ」

折原は僕らにも聞こえる声で、はっきりとそう言った。やっと、

彼は坂本に自分の気持ちを伝える事が出来た。

「俺は、これからも走りたい。行けるところまで行きたい。だから、これからお前にそばで見えて欲しいんだ。今はそんなメダルしか渡せないけど、いつか必ず最高のメダルをお前に渡す」

「私も、折原の事が好きだよ」

坂本はそう答えると、折原に飛びつくように彼にキスをした。

「うわーうわー」

「おい秋乃、泣くのか驚くのかどっちかにしろ」

「だって、だって!!」

秋乃は涙でひどい表情だった。

「しっ、声がでかい!」

「はぐ」

僕は隠れている事を忘れて大きな声を出した秋乃の口を咄嗟に押さえた。



「おい、何やってんだ・・・」

「あら、折原君・・・バレてました？」

僕が顔を上げたとき、そこには折原と坂本の顔があった。

「てか、最初からな。頭見えてたぞ。この頭がな」

「そうですか・・・そりゃあ何とも・・・」

折原に頭を小突かれながら、僕はそう呟いた。

「理央ちゃん・・・」

「うわっ、何これ？秋乃どうしたの」

涙でひどい顔になっている秋乃を見て、坂本は複雑な表情を見せた。

「理央ちゃん良かったねえ、良かったねえ」

「ちよつと秋乃、なんであんたがこんなボロボロなのよ。吉岡、秋

乃どうしちゃったのよ」

「まあ、それ引き取ってやってくれ・・・」

「ちよつと、吉岡！うわ、秋乃くっつくくなってばっ」

僕は秋乃を坂本に押し付けて、折原を引っ張り出した。

「良かったな」

「ああ、お前に全部見られていたこと以外はな」

「まあそう言うな。全て計画通りの結末だ」

「は？」

「すべては俺の掌の上だったという事だ」

「何？お前全部知ってたの？」

「いや、そりゃね。折原君と坂本に板ばさみ状態でしたし・・・私は

全て知っていた」

「だったら教えるよ！」

「いや、ちゃんと言っただろ！早く伝えちまえて！」

「そんなんじゃないわからねえよ！」

「ちよ、ギブギブ。マジで絞めるな」

怒っているのか楽しんでいるのか分からない表情で僕にヘッドロックをかけてくる折原。ボロボロの秋乃に擦り寄られて困っている

坂本。そんな奇妙な光景を僕は楽しんでた。  
笑顔と泣き顔と、たくさんの表情がある。そこに僕らがいる。

## 【第三十話】

今日はきれいに晴れている。雲が流れて行くのを見てみると、普段の疲れもいつの間にか忘れてしまふ気がした。

「吉岡、吉岡ってば」

「んあ？」

ボーっとしていた僕を、坂本がしきりに呼んだ。

今日は夏休みの真っ只中だと言うのに、夏期講習を受けなくてはいけないため登校していた。この面倒な夏期講習は一般入試組を対象に行われているため、今日は僕と坂本だけだ。

「どうしたよ、坂本」

「いや、こっちのセリフだから。何回も呼んでたっしょ」

「ああ、ボーっとしてて気付かなかった」

「ったく、気楽なもんだね」

「坂本も気楽にしるよ。折角の昼休みだし」

僕はそう言うと、ごろんとその場に寝転がった。

「私さ」

「ん？」

「折原と同じ大学受ける事にする」

「へえ？」

「あいつの受ける大学にスポーツ科学の学部があるんだけど、そこ受けてみようかなって」

「いいんじゃないか？」

「で、そこで勉強してさ、将来はスポーツトレーナーに・・・なんて考えてるわけで」

「ふむふむ」

「てか、私何言ってるんだろ。色々言う前に勉強しろって感じだよね」坂本はそう言いながら苦笑した。

「いや、目標が出来たならいいじゃないか。俺なんか、やりたい事

があるわけじゃないし。正直羨ましいよ、そう言っの

「そうなの？」

「見てりゃ分かるだろ？」

「秋乃と同じ大学は？」

「いや、秋乃は美大だから無理だつて。俺に絵を描けつての？」

「ははは、それはちよつと難しそうだねえ」

「はあ、何か置いて行かれるような気分だな・・・」

僕は、一つ大きなため息をついた。僕の周りでは色々と動いていると言うのに、未だに僕は将来を見据えた行動が出来ていない。折原や秋乃はとりあえず別世界として、僕と似たような感じの坂本も、自分の道を見つけ始めている。

「まーた、そうやって悩む」

「仕方ないだろ。そりゃ俺だつて焦りはあるよ」

「でもさ、吉岡らしいよね」

「何が？」

「全部」

「意味が分からん」

「今はたくさん悩んだらいいよ。私も悩んだ。こつという事で悩むのつて、きつと今しか出来ないと思う。だから、悩むだけ悩んだらいいよ。そのうち何か思いつくつて」

坂本はそう言つて微笑んで見せた。僕には、何だか急に坂本が大入びて見えた。でも、坂本の言つている事は良く分かる。悩みなんて無いに越した事はないけど、確かにこんな悩みは今しか出来ないものかも知れない。彼女はそう言う事も含めて、プラスに考えられるんだ。そんな彼女の思考は、僕も見習うべきだろうと思つた。

「吉岡はさ、何がしたい？」

「何つて、何だろつ・・・？」

「秋乃の事、支えてあげたいんじゃないの？」

「そりゃそうだけどさ」

坂本は時々、変に核心を突いてくる。僕が彼女の事を何となく理

解出来るように、彼女もまた似た者同士な僕の事を理解していると言ふ事だろうか。

「だったら、それでいいじゃない。それがあんたのやりたい事だよ」

「そんなもんかあ？」

「そんなもんだ。私だってそんなもんだ」

「でも、それと大学の事と何の関係があるんだよ？」

「・・・なんだろ？まあ、細かい事はいいのよ。頑張って行くことごとくで」

「坂本らしいよな」

「何が？」

「全部だよ」

僕と坂本は、二人で顔を見合わせて笑いあつた。

僕のやりたいことは一つだ。それはもう決まっている。だけど、それと自分の進む道を絡めて考える術がまだ見つからない。だから悩むんだ。でも、坂本が言うように自分なりに頑張っていれば、きっと道は開けるんだと思う。そう願いたい。

夏期講習の為の通学と、自宅での勉強。今年の夏休みはそのくらいしか印象に残っていない。と言うよりも、それしかやっていない気がする。勉強尽くしの夏休みだった。

「よっしおっかー」

通学路で折原が上機嫌で手を振っている。夏休み明け初日からぶつ飛んだテンションの折原に、僕は多少の暑苦しさを覚えた。僕はこれ見よがしに彼をスルーして見せた。

「ちょ、無視ですか！吉岡君！」

「何で初日からそんなテンションなんだよ。元気なら歩け、オラ」

「そんな・・・僕はずっと吉岡君の自転車の後ろに乗るのを心待ちにしていたと言うのに・・・」

「気持ち悪い、歩け」

「ちょ、冗談きついつて！」

折原は素に戻って僕の自転車の後ろに飛び乗った。

「てか、何でそんなに元気なんだ？」

「元気つてわけでもないが、沈む理由もないんでね」

「まあ、折原君はいい事尽くしてしたもんね」

「なんだそりゃ」

「インターハイで三位ですし、坂本とは付き合う事になったし」

「まあ、そこら辺はあんまり関係ないと思うんだが」

「あると思うがな」

「多少はあるかもですね」

折原はまるで他人事のようにそんな事を言った。

「折原」

「あん？」

「何か坂本、大人びたと言うか、女っぽくなった？」

「吉岡君もそんな感じがします？」

「うむ。なんとなく」

「拳骨が飛ばなくなっただんですよ。これは大きい」

「何が原因だろうねえ」

「いやっ、俺は知らんぞ。何も知らん」

折原は首を大きく横に振った。何について知らないのか、よく分からない返答であった。

「まあ本人には言えないよなあ」

「ああ、言ったらぶっ飛ばされそうだ」

「実害は無い・・・と言うかメリットしかないからそっとしておくか」

「だな」

僕らはそんな事を話しながら学校へと向かった。勢いよく校門を通過すると、そこに坂本と秋乃の姿があった。

「あ、二人ともおはよう」

秋乃が僕と折原に気付き、小さく手を振ってきた。

「よう」

僕も軽く挨拶を返す。

自転車を置いて秋乃と坂本に合流した僕らは、始業式が行われる体育館へと入った。慣れた光景なのに、何故か今日は違和感を覚えた。何に関しての違和感なんだろうと考えた時に、僕は目の前にいる秋乃の姿を見てはっとした。普段だと、絵画コンクールの表彰があるはずで、秋乃は僕らと一緒に列には並ばない。秋乃がここにいるってことは……。

「直人？」

僕が不思議そうに顔を覗き込んでいる事に気付いたのか、秋乃が声を掛けてきた。

「あ、いや、何でもない」

僕は咄嗟にそう返した。

「あつ、そうだ。皆に報告があります」

秋乃は僕の顔を見て何かを思い出したように話し始めた。

「落選しちゃいましたとさ」

「は？」

「え？」

「何だと？」

僕と坂本と折原は、ほぼ同時にそう声を上げた。

「だから、今回はダメだったんだよ」

秋乃はそう言っただけで困ったような顔をしながら頭を掻いた。

「あーん、秋乃……シヨックでおかしくなっちゃったの？よしよし」

坂本は秋乃を抱きしめながら頭を撫でた。

「ちょ、そんなんじゃないよ。おかしくなっていないって！」

秋乃は坂本を振り払うと、真面目な顔で僕らの方に向き直った。

「あのね、落選したのは確かにシヨック。だけど」

一呼吸おいてさらに秋乃が続ける。

「私はもう、泣かない事にした。自分に負けたくない。折原君みたいに、前に進むんだって決めた」

秋乃ははっきりと僕らにそう言った。

「私、何も後悔してない。画風を変えてから二回連続で落選。だから何？って感じ。認められないなら、認められるまで描くからいい。これが私なんだって、何も偽らないで表現したいから、ずっと私らしい絵を描き続ける」

いつも強い口調で話す事など無い秋乃が、この時ばかりは強くはつきりと自分の気持ちを吐き出した。

「おお・・・秋乃が・・・小さい秋乃が大きく見える・・・」

坂本は驚きながらそう呟いた。

「そっか、そうだよな。でも、今回だって頑張ったよ。また次も頑張ろう、な」

僕はこみ上げて来る思いを抑えながら、秋乃にそう労いの言葉をかけた。

「なっ」

秋乃はにつこりと笑ってそう答えた。

秋乃、君は本当に強くなった。折原の見せてくれた夢は、こんな所でも小さな芽を出した。まだまだ蕾のような状態の秋乃らしさも、いずれは彼女自身の力で花開かせる事が出来るだろう。僕がどれだけ役に立てるか分からないけど、これからも一緒に頑張って行こう。結果はきつと、君の努力の後に自然についてくるはずだから。



## 【第三十一話】

「うん・・・」

僕の隣の席から惱ましい声が聞こえてくる。坂本がこの前行われた模擬試験の結果を見て、眉間にしわを寄せていた。

「悪かったのか？坂本」

「・・・んー」

気のない返事が返ってくる。どうやらよほど酷い結果だったらしい。僕も、そこまで良い結果だったわけではない。現状の希望進路からすると、そこそこの結果と言ったところだ。もちろん、あくまで現状であって上を目指すに越した事はないのだが。

「で、どんだけひどかったんだ？判定不能レベル？」

僕は身を乗り出して坂本の結果を覗き込んだ。

「ちょ、何勝手に見てんの！いやらしい！不潔！盗撮魔！」

そう言いながら結果表の上に覆いかぶさって必死に隠す坂本。酷い言葉がいくつか混じっていた気がするが、そこは触れないでおこう。どれだけ酷いのかと半ば期待しながら坂本の結果を覗いた僕だったが、そこに記されていたのは僕の予想とは違うものであった。

「おい、どこが悪いんだよ。Bって文字が見えた気がするんだが？」

模試の結果は上から順にA・B・C・D・Eのアルファベットで判定される。B判定なら、合格圏内には入っているという意味だ。はつきり言つて、そこまで悲観するような内容ではないはずだ。僕は自分の結果をもう一度見てみる。第一志望はB判定。他はCやらDやら、見たくもない結果が並んでいる。

「見たな？お？」

横から冷たい殺気が僕に突き刺さる。恐る恐る殺気の方に目をやると、恐ろしい顔の坂本が僕を見下ろしていた。

「あんたのも見せる！」

「やめて！見ないで！」

強引に結果を奪い取ろうとする坂本に対して、僕は必死に抵抗した。が、その抵抗も虚しく簡単に奪い取られてしまった。

「ふむ……」

結果に目を通した坂本は、ただ一言そう言うと僕の机にそっと結果表を置いた。

「何だよ！」

「何でもない」

「言いたい事がありそうだな？」

「ないない、何もなし」

明らかに何か言いたそうな坂本だったが、生気の抜けたような目で力なく首を横に振って否定した。

「てか坂本、B判定なら別にいいだろ！俺もBだ、文句あつか」

「はぁ……」

「何だよそのため息は」

「あたしや不安で仕方がないよ」

「……俺も不安になるべき？」

「まあ、吉岡はいいんじゃない？」

「何でだよ！」

「いや、私ここの一本だけだからさ」

ああ、そうだった。僕は確かに滑り止めも考えているが、坂本は折原の受ける大学一本に絞っているんだ。不安になる気持ちも分からないわけではない。

「坂本も滑り止めとか、第二志望も考えておいたらどうだ？」

何のアドバイスにもならない事は分かっていたが、僕はとりあえず坂本に伝えてみた。僕の言葉を聞いて、少し困ったような複雑な表情を浮かべた坂本は、ぼんやりと何かを考えるように天井に視線を向けた。そして、一つため息をついた。しばらくそんな状態が続けた後、彼女は僕のほうに向き直った。そして、はっきりとした口調でこう告げた。

「私は、第一志望だけで行くよ」

あまりにはつきりと言いつらられて、僕は目を丸くする事しか出来なかった。

「よし、宣言した。これでもうやるしかないって事」

「そうだな」

「悩んでても仕方がないし、逃げ道を作ったらそつちに逃げちゃいそうだし、これでいい」

彼女の表情には、何の迷いもなく吹っ切れたような感じだった。

僕としても、坂本らしくていい判断だと思う。元々器用には思えない坂本の事だし、第一志望だけと決めて自分を追い込んだ方がきつと力を出せると僕は思う。

その日の放課後、僕は秋乃のクラスの前で彼女が出て来るのを待っていた。

「直人、お待たせ」

「相変わらず秋乃のクラスはホームルーム長いな」

「先生がいつも色々話してるからねえ」

「よくもまあ、毎日これだけ話す事があるもんだ」

僕がそう言うと、秋乃は同意するように笑った。一緒に美術室に向かうと、彼女は早速絵を描く準備を始めた。見たところ、もう大体仕上がっているように思えた。

「もう随分進んだんじゃない？」

「うん、来月は推薦入試があるから。早めに仕上げ準備しないとね」

「そう言えばそうか。でも大体仕上がってるみたいだし、大丈夫だろ」

「ここからが一番大事なんだよ」

彼女はそんな事を言いながら、ゆっくりと作業に取り掛かった。

「それにしても、この前まで夏だと思ったらもうすぐ冬か」

「そうだね。あつと言つ間だよ」

「来月の推薦入試、頑張れよ」

「うん」

秋乃は一つ静かに頷いた。

窓の外を見ると、葉が落ちて裸になった木々が目につく。もうすっかり冬に近づいている感じがした。今年はやけに寒くなるのが早いし、雪の日が多くなりそうだ。そして、そんな季節を過ぎれば僕らはもう卒業だ。

「三年間もあつと言う間だったなあ」

外の景色を見ながら、僕はポツリと呟いた。高校に入学してから三回目の冬。最後の冬。そう考えると感慨深いものがある。色々な事があつた。本当に色々。これまでにあつた事は不思議なくらいすぐに思い出せる。三年間という時間を感じさせないほどに。

「秋乃、もうすぐ卒業だな」

僕の言葉に、秋乃は返答しなかった。

「秋乃？」

不思議に思つて振り返つた僕が見たのは、いつになく真剣な表情でキャンバスに向かう秋乃の姿だった。いつの間にか、僕の声が耳に入らないくらい集中していたのだ。彼女にとっても最後の冬。待っているのは、最後の絵画コンクール。それに賭ける彼女の思いは、今までとはまた違ったものなのだろう。いつもは穏やかな空気の美術室が、緊張感で満たされている。でもそれはピリピリとした嫌な緊張感ではない。秋乃の気合と言うか気迫と言うか、そう言うものが感じられる空気だ。

僕は席に戻ると、静かに参考書を開いた。学校ではなかなか集中出来ないために滅多に勉強しない僕だが、秋乃から心地よい緊張感を受けているからか、この時ばかりはその限りではなかった。秋乃の邪魔をしないように、少しでも自分の道を見つけられるように、そう思いながら僕は参考書と向かい合った。

どのくらい時間が過ぎただろうか。気がついたら僕の参考書は読み始めた頃より大分先に進んでいた。ふと秋乃の方に目を向ける。彼女はまだその集中力を保ったままだつた。適度な緊張感を出しつつも、絵を描いている姿はどこか楽しげだ。新しい世界を生み出す

彼女の表情は、まるで子を愛する母親のような何処か優しげで安心するようなものだった。僕はそんな彼女の姿をじっと見つめていた。

「直人、ねえ直人」

ぼんやりとした意識の中で、秋乃の声が聞こえた。

「ん、どうした秋乃」

「あ、起きた？ごめんね、随分かかっちゃって」

「ああ、俺寝てたのか。悪いな」

「ううん、私もずっと描いてたから。やっと一段落したところ」

いつから寝ていたのだろうか。時計を見ると、既に夜の七時を回っていた。

「もうこんな時間か。帰らないとな」

「そうだね。ちょっと待ってて、片付けちゃうから」

秋乃はそう言うときばきと片づけを済ませ、僕らは揃って学校を出た。

「もう夜は寒いな。そろそろコートがいるかも」

「今年は寒くなるのが早いよね」

自転車を押す手が悴む。秋乃を見ると、薄手のコートに手袋、マフラーと防寒装備は完璧だった。羨ましそうに見つめる僕に、秋乃が言った。

「手袋、片方貸してあげよっか？」

「いいよ。秋乃も寒いだろ？俺は寒いのがなんか慣れっこだからな」

「いいからいいから、遠慮しなさんな」

秋乃は半ば無理矢理、僕に手袋を片方渡してきた。

「それ右手に着けてね」

「右手？何で？」

「いいから」

僕は言われるままに、秋乃から受け取った手袋を右手に着けた。

「これでいいのか？」

僕がそう尋ねると、秋乃は僕の左手をぎゅっと握った。

「これなら二人とも温かいから」

「え？ああ・・・そうだな」

「たまにはこう言うのもいいでしょ」

照れくさそうにそう呟く秋乃を見て、僕は自然に笑みがこぼれた。  
「そうだな」

そつと秋乃の白い手を握り返す。それに応えるように、秋乃も僕の手を握り返してくる。何も言葉を交わさなくても、その手の温もりだけで心が通じ合う。そんな気がした。

【第三十一話】（後書き）

どうも、でございます。

前回から間隔空いてしまいましたして大変申し訳ありませんでした。

更新報告用にTwitterを登録してみました。

使い方がさっぱりなわけですが・・・。

<http://twitter.com/dekodeko4480>

## 【第三十二話】

秋乃と折原の推薦入試が間近に迫る。ここ数日秋乃は一人で美術室にこもる事が多くなつた。変にプレッシャーをかけてしまわない様に、僕はそんな秋乃の姿をそつと見守る事にしていた。

「秋乃、今日も美術室行くのか？」

「うん」

「応募用の絵の仕上げ？」

「応募用のはもう送っちゃったよ」

「そうなのか？じゃあ何で美術室に？」

「ん？別件でちょっと。それに、何か美術室の方が落ち着くんだよ  
ね」

秋乃はそんな事を言いながら微笑んだ。こつやつて話をしている感じでは、緊張している様子も見られない。むしろ、その柔らかな表情からは余裕すらうかがえる。

「秋乃は緊張しないのか？」

「ん？そりゃあするにはするよ。でもそこまでじゃないかな」

「ふーん、そんなもんなのか」

「だよ」

秋乃は僕の言葉にこくこくと首を縦に振る。

「今日俺も美術室顔出してもいい？」

「あー、えつと、今日は駄目だよ」

「そうなのか？」

「そうなのだ」

少し慌てたように切り返す彼女だったが、何か事情があるのだからと思う、それ以上は何も追及しない事にした。

自転車に飛び乗った僕は、帰り際にふと美術室の窓に目を向けた。そこには、絵を描く秋乃の姿があった。応募用の絵はもう終わつた



と言っていたし、推薦入試を間近に控えた忙しい時期に、一体何の絵を描いているのだろうか。色々と気になる事はあるが、僕はそのまま自転車を走らせて家に帰った。

数日後、僕らは久しぶりに四人で集まっていた。明日はいよいよ秋乃の推薦入試である。その次は折原の推薦入試も控えていて、僕らの周囲では一気に受験に向けての動きが始まる。週末を挟んでしまふ為、二人分まとめたの壮行会というわけだ。

「てか吉岡、秋乃の入試明日でしょ？こんな日に集まってて大丈夫なの？」

坂本が不安げな表情でそんな事を言った。

「仕方ないだろ。丁度いい日がなかったんだから」

「大丈夫だよ。一人でいるよりも皆でいた方が気持ち落ち着くしね。それに、直前になってまでやる事ってあんまりないから」

秋乃は柔らかい表情でそう言った。

「そうなのか？むしろ今になって慌てて色々やってる俺は？」

「あんたはただのバカでしょ。前々からちゃんと準備しとけっ言ってるのに聞かないんだから」

折原の気の抜けた発言に対して、坂本が厳しい一言を浴びせる。

「まあ、折原は前から直前になって慌てるタイプだろ。夏休みの宿題とかもそうだった」

「さすが吉岡君、分かってらっしゃる。でも、ちょっと違うぞ。宿題は学校が始まってから見せてもらうんだ」

「堂々と言えるもんじゃないだろ、それ・・・」

「まあまあ、結果オーライと言う事で」

折原も折原で、大した緊張感はないようだ。見ている分には、ガチガチに緊張されるよりは安心と言うものだ。

「ところで折原、推薦入試って何があるんだ？」

僕はふと折原に尋ねた。

「あー、面接と実技だったっけかな？」

「あれ？小論文もあるよね？」

横から坂本がそう言った。

「そうだったか？」

「ちよつと、あんた直前に何言ってるのよ。ちゃんと対策してるんでしょね？」

「うむ、行き当たりばったりである」

折原はさらつとそんな事を言い放った。坂本は完全に呆れて大きなため息をついた。

「てか折原」

「あん？」

「お前推薦落ちるんじゃない？」

「えっ……」

「落ちたらどうすんだ？お前」

段々顔が青ざめていく折原。落ちた時の事など、全く考えていないようだった。

「そうよ、落ちたらどうすんのよ！あんた一般入試で入れるアタマ無いんだからしつかりしてよね！私の努力無駄にする気！？」

坂本はそう言いながら折原に掴みかかった。がくがくと揺すられながら、折原は何かを言い返している。あつという間にギャーギャーと二人で言い合いが始まった。

「二人とも仲がいいねえ」

そんな様子を見て、秋乃がくすりと笑った。

「直人も私の入試の事心配？」

「いや、心配してないよ。秋乃なら大丈夫だっと思ってるし」

心配していないというのは嘘だ。でも、僕が心配を表に出しすぎても秋乃を困らせるだろう。だから僕はとりあえず無難な言葉を選んでおいた。

「そっか。私は心配だなあ」

秋乃から予想外の言葉が飛んできた。

「明日で全部決まっちゃう。これまでやってきた事も、これからの事も」

彼女は真つ直ぐ前を向いたままそう呟いた。はつきりとした、それでいてどこか弱々しい口調だった。そんな彼女に、僕は一体どんな言葉をかければ良いのだろうか。気のきいた言葉も思いつかない。そんな時に僕の口から出たのは、抑え込んでいた本音だった。

「俺も、正直心配だよ」

「やっぱり？」

秋乃が不安げな表情を僕に向ける。一体僕は何を言っているんだ。どう考えてもマイナスの要素を与えているじゃないか。自分で自分を責める。が、出してしまった言葉は戻らない。続く言葉を考えるが、まるで思い浮かばない。頭の中でぐるぐると考えを巡らせていると、秋乃が口を開いた。

「でも心配してくれるって事は、期待してくれてるって事だよな？」

「もちろんだよ」

「それなら、私はいくらでも頑張れる。前に話したじゃない、期待されるのも悪くないって」

「ああ、そんな話もしたっけ」

「前は期待されるのが怖かった。でも今は違う。期待されてるから、頑張れる。だから、きつと明日も大丈夫」

「そうだな。秋乃ならきつと大丈夫だ」

僕は秋乃にそつと微笑みかけた。

「秋乃」

「ん？」

「無理すんなよ。ありのままの秋乃でいれば、大丈夫さ」

「うん、そうする」

秋乃は優しく笑いかけてきた。

「この分からず屋！」

和んでいる僕らをよそに、坂本の怒鳴り声が聞こえる。折原と坂本のバトルはまだまだ進行中だ。

「だから俺には俺のスタイルがあるの、分かる！？俺スタイル！これが一番なの！」

「何が俺スタイルよ！こういう時くらいちゃんと準備するのが普通でしょ！？落ちたらどうすんのよ！」

「落ちる落ちる言うな！落ちたらどうすんだ！」

「うるさい！落ちる落ちる落ちる、絶対落ちる！てか落ちちゃえ！」  
彼らの口喧嘩はしばらく収まりそうもなかった。

「なんか、いつも通りというか自然な光景ですなあ」

秋乃が彼らを見つめながらそんな事を言う。

「そうですなあ」

僕も頷く。

秋乃の推薦入試前日、大きな戦いを前にしても僕らはいつも通りの姿だった。こういう時にでも、自然体でいられるのが僕らの良い所だろう。僕にも坂本にも言える事だが、試験を受ける本人たちよりも応援する側の方が慌てていて何だか可笑しくなった。

家に帰ってから、何だか落ち着かなかった。まだ始まったわけではないのに、今から結果を気にして落ち着かない。勉強しようかとも思ったが、気が向かない。僕はベッドに寝転んだまま天井を見つめていた。そんな時、不意に携帯が鳴った。音に驚いて取り上げると、秋乃からメールが届いていた。これから出発するという内容だった。明日朝早くから試験が始まる為、夜行バスでの移動らしい。僕はそのメールを見て、いてもたってもいられなくなり家を飛び出した。夜行バスが出る駅までは自転車で20分。今からいけば秋乃に会えるはず。そう考えて自転車を飛ばした。家に帰ってきた時には降っていなかった雪が、徐々に地面に積もり始めている。そのせいで思うように自転車を飛ばす事が出来なかった。倍近い時間をかけて駅に到着した僕は、夜行バス乗り場で秋乃の姿を探した。見つけた。彼女は夜行バスの到着を待つ列の中にいた。

「秋乃」

僕は息を切らしながら彼女に声を掛けた。

「直人？どうしたの、こんなとこまで来て」

彼女は僕の姿を見て目を丸くした。

「いや、何か落ち着かなくて」

「私も。でも直人の顔見たら和んじやった」

彼女はそう言いながら笑顔を見せた。

僕らの間にそれ以上会話は無かった。ただ何を話すでもなく、傍にいる。しばらくして、秋乃が乗るバスが到着した。

「行かなくちゃ」

秋乃はそう呟いた。

僕はここまで来て、秋乃に何を伝えたかったのだろうか。彼女の為に何か出来る事は無いのだろうか。色々と考えた。

「秋乃、今日だけ交換な」

「え？」

何も思いつかなかった僕は、巻いて来たマフラーと彼女のマフラーを取り替えた。何の意味があるわけでもない。ただ傍にいる、一緒に戦う、と言う意思表示をしたかった。

「頑張ってくるから」

彼女は僕のマフラーを握り締めながらはつきりとそう言った。

「ああ、頑張れ。応援してる」

バスに乗り込んで行く彼女の後姿に、僕はそう声を掛けた。扉が閉まり、ゆつくりとバスが走り出す。僕はバスが見えなくなるまで、ずっと心の中で彼女に語りかけていた。頑張れ、と。

## 【第三十二話】（後書き）

どうも、でございます。

読者の皆様にはいつもお世話になっております。

第三十二話をUPさせて頂きました。

今後更新のお知らせはTwitterで告知したいと思いますので、どうぞ宜しく願います。

<http://twitter.com/dekodeko4480>

全くの余談ですが「いつもこのセカイで」も終盤に差し掛かって参りました。

本作の連載終了後、新作の連載を予定しております。そちらの情報も併せて発信して行きたいと考えています。

今後ともどうぞ宜しく願います。

### 【第三十三話】

僕らに届いた最初の朗報は、折原の推薦入試合格だった。小論文の存在を忘れていたり等、色々と問題はあつたようだが、無事に合格したとの報せが届いた。冬休みに入る、一週間ほど前の出来事であつた。もちろん、坂本や秋乃にも合格の報告はしてあるが、今日のところは男同士の語り場と言う事で、放課後に二人だけでささやかな祝賀会を開いていた。

「いやあ、論文とか全然駄目だったんだけどな」

折原は照れくさそうに頭を掻いた。

「何にせよ良かったじゃないか。落ちたら浪人確定だっただろ？」

「それを言うなつて。まあ、決まった以上そんな心配もする必要がなくなつたけどさ」

「そうだな。とりあえず、俺らの間で最初の合格者だ、おめでとう」  
僕はそう言いながら、良くやったと折原の背中を一つ叩いた。

「ありがとな。吉岡も来月入試だろ？頑張れよな」

「俺は身の丈にあつた所を受けるだけだから、そんなに心配要らないよ。それより、坂本はどうなんだ？」

「あいつの成績なら大丈夫だと思うんだけどな。俺より数倍頭はいいし、俺からアドバイス出来る事なんて殆ど無いさ」

「まあそうだろうな。教室でも暇があれば勉強してるし、折原はバカが感染するからしばらく近寄らん方がいいな」

「そう言うなつて」

折原はそう言いながら笑った。

「野川はどうなんだ？」

「秋乃は明後日合格発表らしい。手応えは悪くないって言ってたけど」

「そうか。野川は現地に発表見に行くんだろ？」

「だと思つよ。詳しい事は聞いてないけど」

「何で聞いてないんだよ？」

「いや、そこまで聞くもんでもないだろ」

僕がそう言つと、折原は分かつてないと言わんばかりに一つため息をついた。

「吉岡、お前明後日一緒に行つてやれ」

「何でそうなるんだよ」

「いや、野川はああ見えて心細いんだよ、多分。同じクラスだから何となく分かるんだ、俺は」

折原は珍しく真面目な口調と表情でそんな事を言つた。彼の言う事はもつともだが、頼まれてもいないのにそこまでするのは、お節介になるのではないかと僕は心配した。

「それはそうかも知れないけど、迷惑かも知れないだろ」

「そんな事ないつて。よく考えても見る。仮に駄目だったとしても、お前がそばにいてやれば慰められるだろ」

「落ちるのを想定するのもどうかと思うが・・・」

「仮にだよ、仮に。それに、実際にそう言う空気に触れれば、お前ももつと頑張ろうつて気持ちになるかも知れないだろ。気合入れるのには丁度いいつて」

何故か今日の折原の言葉は、いつになくもつともらしく響いた。

これも合格した余裕から来るものなのだろうか。少なくともいつものバカをやっている折原とは違う雰囲気醸し出していた。

「でも明後日は学校だろ。秋乃はいいとして、俺は抜け出せる理由がないぞ」

「風邪をひいた事においてやるよ。そうだ、明日はマスクして来い。そうすりゃ次の日休んだとしても何となく自然だろ」

「そこまでしてどうすんだ・・・」

「まあいいじゃねえか。一度きりの事だしな」

折原はそんな事を言つて強引に押し切つた。

家に帰つてから、僕は折原と話した事を考えていた。秋乃が心細



そうにしていたと折原は言っていたが、本当なのだろうか。何だか  
んで、折原自身もそうだったのかも知れないと僕は思った。

僕は、携帯を手にとって秋乃に電話をかけた。

「ああ、秋乃。今大丈夫？」

「ん？どうしたの？」

秋乃はいつも通りの口調で答えた。

「いや、特に何って訳じゃないんだけどさ。明後日合格発表だなと  
思ってたね」

「そうだよ。またバスに乗って行かなくちゃ。四時間もかかるから、  
結構疲れるんだよね」

そう言って笑う秋乃からは、心細さの様なものは感じ取れなかつ  
た。しかし、折原も見ただ目はまったく不安そうな様子など見せな  
かったが、内心はどうだったのか分からない。

そう思った僕は、秋乃に提案をした。

「あのさ、俺も一緒に行こうか？」

「えっ？」

秋乃の少し驚いたような声が返ってきた。

「いや、その、俺も秋乃の合格発表について行こうかなって。どう  
せなら一緒に喜びたいって言うか、何とと言うか……」

僕はしどろもどろになりながら答えた。自分でも、何を伝えたい  
のかよく分からない状態だった。

「えっと……私は一人でも大丈夫だよ？」

「そ、そうだよな。合格発表だけなのにわざわざついて行ったら迷  
惑だよな」

折原め、やってくれたな。そんな思いと、やっぱりなと思う思い  
が僕の頭の中をぐるぐると回っていた。そんな時、少し慌てたよう  
に秋乃が口を開いた。

「違うよ、迷惑とかじゃなくて。お金もかかっちゃうし、学校もあ  
るし。悪いなって思っただけで……」

交通費分のお金は問題ない。学校の事も折原が何とかするらしい

し、秋乃が言うような問題は何も無い。

僕が考え込んで黙っていると、秋乃が続けて言った。

「それに、直人も受験控えてるし忙しいでしょ？」

「ああ、俺は別に何の問題も無いよ。それに、秋乃が合格するのを見たら少しは気合も入るかなあつて思つてさ」

折原からの受け売りのセリフを吐いてみる。僕の言葉に反応して、秋乃は嬉しそうに笑った。

「じゃあ、一緒に来てくれる？」

「ああ、行くよ」

僕は一言そう答えた。

電話が終わつた後、ふと僕は考えた。折原は学校の事は何とかすると言つていたが、別のクラスなのに一体どうするつもりなんだろう。まともな事を言いつつも、考え無しなところは何も変わつていないなど、僕はくすりと笑みをこぼした。

そして、秋乃の合格発表当日、僕らは朝早く駅で待ち合わせをしていた。通学の時間よりも少し早く出て来たため、学校の連中には姿は見られていないはずだ。

雪が降る中、しばらく待っていると秋乃がやって来た。

「直人、早いね」

「ああ、何となくね」

僕はそう答えた。

秋乃と合流してすぐに、バスがやって来た。僕は頭に積もった雪を掃つて、バスに乗り込んだ。

「何か、ちよつとした旅行気分だな」

「そうだね。二人だけで遠出するなんて初めてじゃない？」

「思つてみればそうか。いつも折原と坂本が一緒だったしな」

「うん。これで普通に遊びに行くだけだったら、もつと良かったのにねえ」

秋乃はそう言いながら笑った。

バスに乗るのなんて何年振りだろう。長距離バスと言うものも、

これが初めてだ。静かな閉鎖空間で、ただ黙って四時間か。こんな環境だと、一人で行くとなると無駄に色々考えてしまうだろう。そう思うと、今日僕がついて来た事にも意味があるんじゃないかと思えて来た。

秋乃は、ぼんやりと流れていく景色を見つめていた。その表情はどことなく不安げに見えた。僕は、そんな秋乃に声を掛けた。

「秋乃」

「ん？」

秋乃が僕の方に視線を戻す。

「不安なの？」

「そんな事ないよ」

微笑みながらそう言った秋乃は、すぐに続けた。

「って皆の前では言いたい所だけど、今くらい、甘えてもいいよね」  
僕の肩にそつと寄り添った秋乃は、静かに口を開いた。

「本当は、不安で仕方ない。でも、こうしていると何だかほっとする」

「そっか」

僕は、秋乃の肩に手を回し、その小さな肩をそつと抱き寄せた。

「でもね、どつちにしても不安なんだ」

「どう言う意味？」

「合格でも、不合格でもって事」

「どうして？」

「不合格になるのも心配だけど、合格したらしたで」

秋乃はそこまで言うのと、一つ呼吸を置いた。そして、静かに呟いた。

「この居心地の良さを、手放さなくちゃいけないから」

彼女は僕の服の裾をぎゅっと握った。

僕は、彼女の心の内を察して、それ以上何も言わなかった。

この数時間後、秋乃は無事に推薦入試の合格を勝ち取った。



## 【第三十四話】

秋乃の合格から、何事もなく冬休みへと突入した。僕と坂本の入試まで、残すところは半月と少しと言った所だ。さすがに、冬休みと言えども勉強漬けの日々が続いていた。暇さえあれば問題集とにらめっこ。ボロボロになってきた参考書を見ると、これだけやったんだから大丈夫だろう。不思議とそう思えてきたりする。

この日も、僕は朝から机に向かっていた。時計に目をやると、間もなく昼になるうとしていた。あつという間に時間が過ぎる。時間の割に進まない問題集。もう大丈夫、そう思う反面、これで大丈夫だろうか？と言う焦りも感じる。

僕は問題集を閉じて、背もたれに体を預けて天井を見つめた。ふう、とつくつもりのないため息が漏れた。

その時、僕の携帯が鳴った。秋乃からだった。今から会えないかと、珍しく彼女の方からの呼び出しであった。丁度休憩しようと思っていた僕は彼女との待ち合わせ場所へと急いだ。

外は雪が降り、かなり冷え込んでいた。待ち合わせ場所に行くと、既に秋乃が待つていた。傘に積もった雪の量から、結構前から来ていたように思われた。

「ごめん秋乃、遅くなった」

「ううん。忙しい時期に呼び出してごめんね」

「丁度休憩しようかと思ってたんだ。いい気分転換だよ」

僕がそう言うと、彼女は笑顔を見せた。

「どっか店にでも行く？」

「ううん。ここでもいいの」

秋乃はそう言うと、ポケットから三つ折の一枚の紙を取り出し、僕に差し出した。

「これ、見て欲しいの」

僕は、何のプリントだろうかと思ひながら、彼女から受け取った紙を静かに開いた。

そこには、何やら細かい文字で色々と書かれていたが、中央に大きめに記されていた二文字が、僕の目に飛び込んできた。

「・・・金賞」

僕はその文字を読み上げた。そして、確認するように何度も何度も、その中身に目を通した。

「金賞！金賞だ！秋乃、とったのか！」

僕はそう言いながら、紙に記された二文字と、秋乃の顔を交互に見つめた。秋乃は、ただ黙って何度も首を縦に振った。そして、彼女の瞳から、涙が幾つも零れ落ちていた。

「取った、取ったよ。良かった・・・本当に良かった・・・」

彼女は震える声でそう言った。

「良かった、良かったなあ秋乃。おめでとう」

僕は秋乃を強く抱きしめて、何度も祝福の言葉をかけた。それ以上の言葉は何も出てこなかった。秋乃が一番欲しかったものが、現実のものになった。何も偽る事無く自分らしさを表現していききたい。そう願った彼女の思いが、ついに届いたのだ。そして、認められた。「大学の合格よりも何よりも、これが欲しかった」

秋乃は大粒の涙を流しながらそう言った。

「直人と付き合ってから、ずっと思ってた。直人から貰った色で表現した世界で、認められたいって。やっと・・・叶った・・・」

彼女の胸の内から溢れ出す感情は留まる事を知らなかった。

「直人にたくさんのものを貰ってきたのに、何も返せなかった。何一つ、渡せるものがなかった。でもやっと、胸を張って直人に返せる。ありがとう。ほんとにありがとう」

そう言いながら僕の背中に強く手を回す彼女に、僕はかける言葉が見つからなかった。言葉では表現し切れない感情が、僕の中にあつたからだ。

「秋乃の努力の結晶だよ。俺は何も・・・してないよ」

「そんな事ない。私は努力をして来たわけじゃない。最近は、不思議なくらいに考えなくても筆が動いた。直人から貰った色と、直人が紡いでくれた世界だけで、何でも表現出来た」

秋乃は首を横に振って、そう答えた。

「私、この絵を描きながら考えてた。最後なんだって」

「最後？」

「直人と一緒に描ける、最後の絵なんだって」

彼女の発した最後と言う言葉で、僕は秋乃の合格発表を見に行く時のバスでの会話を思い出した。

居心地の良さを手放す事になる。そうだ。あと何ヶ月かで、僕と秋乃は離れなければならぬ。関係が終わってしまうわけではないという事は分かる。それでも、ずっと一緒に過ごしてきた僕らにとって、それは大きな意味を持っている。

「だから、とにかく想いを込めた。これからもずっとずっと、この世界が続きますようにって」

「秋乃・・・」

「この絵、本当は別のタイトルがあるんだ。その紙に書いてあるのとは違う、別のタイトルが」

「タイトル？」

僕はそう聞き返した。秋乃は僕の目を見つめながら、そっと口を開いた。

「いつも・・・この世界で」

彼女が言った本当のタイトルには、彼女の強い願いが込められていた。もちろん、僕にとつての願いも。

彼女の想いの全てが集約されたその絵に使われた色と世界は、僕自身だと彼女は言った。僕は、彼女の絵に少しでも携われた事から誇りに思う。そして、彼女の心を知った今、少しでも彼女の世界の中にいたいと感じている。

僕は一つだけ、どうしても彼女に伝えたい事があった。

「ありがとう、秋乃」

「どうして直人がお礼を言うの？」

「どうしても、だよ」

僕はもう一度秋乃をそっと抱きしめた。

その後、冬休み明けの始業式で彼女は表彰された。今まではただ淡々と賞状を受け取って、と言う形式的な作業を繰り返して来た彼女だったが、今回は違っていた。

賞状を受け取るなり、それを僕らの方に向かって高々と掲げて見せた。その時の嬉しそうな笑顔は、僕が知る限りでは、彼女の高校生活の中で最高のものだった。



## 【第三十五話】

僕と坂本の一般入試は、二人とも無事に合格と言う結果に終わった。僕の合格発表の方が先だったせいか、坂本は最後までやきもきしていた。あの時の坂本は、見えて可哀想になるくらいに大人しかったのを覚えている。その分、合格が決まった時の喜びは何よりも大きかった事だろう。僕らにとってもそれは同じで、坂本の祝賀会の時が、一番盛り上がった気がする。

誰一人欠ける事無く、新しい世界へのスタートラインに立てた事は本当に良かったと思う。多分、一番無難な道を選んだのは僕で、一番頑張ったのは坂本だろう。一番楽ししたのは・・・折原かな。絶対にそうだ。そうに違いない。僕は合格が決まった後の折原の余裕に満ちた表情を思い出して、くすりと笑った。

いよいよ、卒業式が明日に迫る。もう、高校生活とも別れを告げなければならぬ。そう考えると、寂しい思いしか沸いて来なくなつた。明日卒業してしまえば、僕らはもう離れ離れになる。地元に残るのは僕だけと言う結果になつた。それぞれに未来があり、新しい世界があり、自分だけの道がある。そういう事は分かつてはいるものの、何かぼつんと取り残されるような、そんな気持ちが僕の胸の中にあつた。

この三年間を思い返してみると、色々な事があつた。入学して折原に最初に会つた時は、何となく合わない奴だなんて思つたりもした。バカだし、空気も読まないし、すぐに調子に乗るし。でも、そんな折原と結局三年間ずっと親友でいた。僕も、少し折原に似てきたかな。バカをやつたり、羽目を外したり・・・そんなものとは無縁だった僕はどこに行ってしまっただろうか。今ではむしろ、そういう時間や環境が、とても良いものと思えてくる。楽な自分ではない。肩を張らず、上辺を偽る事無く、素直な自分でいられる。心

からそう思う。

僕はずっと、自分はどちらかと言うと無感動な人間だと思っていた。だから、卒業するって言っても、きつと通過儀礼的と言うか何と言うか、特別な感情なんて湧いて来ないと思っていた。でも、そうだとしたら今僕の胸の中にある感情は一体なんだ？何でこんなにも寂しい？何でこんなにも悲しい？何でこんなにも未練ばかりが残る？僕はこんなにしみつたれた性格だっただろうかと自問したくなるような、複雑な感情が沸き起こる。

「嫌だ・・・」

僕の意味とは全く別に、言葉が吐き出される。一度外に出てしまった感情を表す言葉は、もう止まる事がなかった。

「嫌だ。嫌だなあ・・・くそう」

言葉と共に、涙が溢れ出る。もう止まらない。止まらなくなつていい。誰も見ていないんだから。恥ずかしくもない。これが僕だ。偽りのない僕の感情だ。

卒業なんかしたくない。ずっと今のままでいたい。新しい世界なんて望んでない。僕はずっと、ずっとこの世界にいたいんだ。秋乃がいて、折原がいて、坂本がいて・・・何も失いたくない。変わって欲しくない。永遠に続く時間なんて無いのは分かる。終わりが無い世界だつて存在しない。全部分かっているさ。だけど、どうしてもそれを望まずにはいられない。

三年間の高校生活は、僕が今まで生きてきた中で、何よりも大切で、何よりも充実していて、そして何よりも成長出来た時間だったと思う。だからこそ、この時間を終わらせたくはなかった。何で卒業式の前日になって、こんな事に気づいたのだろう。もっと前に気づいていれば、もっと大切に日々を過ごせたかも知れないのに。

考えても無駄な事は考えない事にする。何事も流れに沿って、流れのままに。今まで僕が取ってきた立ち位置だ。でも今は違う。無駄な事と知りながら、考えられずにはいられない。複雑な感情が渦巻く中、僕はため息をつきながら頭を抱える事しか出来なかった。

泣くだけ泣いて、悩むだけ悩んだら、少しだけ冷静になってきた。僕はベッドに寝転がりながら、今までの事をゆっくり思い出していた。

折原は・・・さつきも思い出したけどいいか。何だかんだで、高校生活で一番顔を合わせたのはあいつじゃないだろうか。毎朝僕の自転車に乗り、一緒に登校する。休み時間は殆ど一緒。昼休みだつて一緒。何をやるにも、隣にはあいつがいたつ。ずっとただのバカだと思っていたけど、最後にしつかりと才能を開花させた。ちょっとだけ、羨ましかったよ。ずっと、僕らは似た者同士だと思つてきた所があるからさ。でもあの時はつきりと分かった。僕とお前は違つて。だけどそれでいいんだよ。違う者同士、お互いに何かしら影響を与えあつて、より良い関係を築いてるんだと思うから。お前の理想の終着点は、まだまだ先にあるんだろう。だから、無理はしなくてもいい。ゆっくりと、着実に進んでいつて欲しい。僕はそれを、少しだけ離れた場所で見守っているから。これからもずっと親友でいよう。そしていつか、理想の終着点で見たものを教えて欲しい。僕はお前に会えて本当に良かったよ。ありがとう、折原。

坂本、君は本当に僕に似ていると思う。自分の立ち位置も、素直じゃないところも。凶暴なところは似ても似つかないけど、それでも僕らはそっくりだと思ふ。

僕は坂本に感謝している。知らず知らずのうちに、君は僕に、支える者としての立ち位置を教えてくれた。それに、その位置にいる事の素晴らしさも。屈託のない笑顔と、その性格に救われた事だつて何度もある。これから君は、僕と同じ様な立ち位置で日々を過ごしていくのだろうか。いいよな、この立ち位置は。

折原は、君の事を大切に思っているし、何よりも必要としている。あいつもあいつで不器用だから、何かと難しいかも知れないけど、その分坂本に頑張つて欲しいと思ふ。そつと支えていく事しか出来ない僕に比べれば、坂本はもつともつと重要な役割がある。折原が理想の終着点に向かうには、君の力が必要不可欠なのだから。君が

折原に夢を託した事は、きつと間違いないと思う。あいつは絶対、君の期待を裏切らない。だから、これからもずっとあいつと仲良くやっていって欲しい。頑張れ、名トレーナー。

秋乃・・・君に関しては語っても語りつくせない。ただ一つだけ、僕が一番感じている事・・・よく笑うようになったね。中学の頃に絵を描き始めて以来、ずっと心の奥に何かを抱えているような感じだった。子供の頃のように笑う事は、随分少なくなっていた。けど最近はずっと抱えてきた何かが消えたのか、君の笑顔が戻って来た。僕は、その笑顔が大好きだ。楽しそうに絵を描いている君の姿を見ると、何だか僕まで幸せな気分になれる。君の絵や、それに取り組む姿勢は、見る者を幸せにする力があると思う。君の世界では、結果も大切な事なのかも知れない。だけど僕としては、今の笑顔をずっと忘れないでいて欲しい。君の絵で幸せになれる人間がいる事を、忘れないで欲しい。君が君らしくいる事が、一番大切な事なのだから。

君が高校生活の最後に残した結果は、君らしさが認められた最高の勲章だと思う。胸を張って夢に向かって行こう。僕は君をずっと支えていく。君の望む世界が、ずっと僕らの周りにあるように。君の笑顔が失われる事の無いように、君の夢が現実のものとなるように。ジグソーパズルのように、君の夢が少しずつ形になっていくのを僕はずっと傍で見たい。そしてそれが完成した時、誰よりも早く祝福したい。頼りない僕だけでも、これからもよろしく。秋乃、君は僕にとって掛け替えのない宝物だ。

再度思い返してみると、幸せな記憶ばかりだ。卒業するからと言って、これが全部消えて無くなるわけじゃない。むしろ、全部持って次に行けるんだ。何も落ち込む事はない。やっとその答えに辿り着けた。

「・・・よし！」

僕は自分の両頬をぴしゃりと叩いてそう言った。

後悔なんて無い。未練だって無い。僕の高校生活を彩った様々な

出来事、大切な仲間、支えてくれた人々、全てにありがとうと言いたくなった。前を向いて、生きていける。強くそう感じた瞬間だった。

## 【最終話】

卒業式の当日、僕らは久しぶりに四人揃って登校した。何だかんだで忙しかったり、時間が合わなかったりや重なっていた為、こうして朝から四人で一緒にいるのは、何だか新鮮な感覚だった。

「ちよつと折原」

坂本の声が飛んだ。

「ん？」

「ネクタイ曲がつてるよ？卒業式の日くらい、しゃんとしなさい」

坂本はそう言いながら、折原の曲がつたネクタイを整えた。

「何かすつかり、いい夫婦って感じたねえ」

秋乃が僕の方を見ながらそんな事を言う。

「ちよつと、何言つてんの。聞こえてるんだからね」

「聞こえるように言つたんだもんね」

悪戯っぽく笑う秋乃に、僕らも自然に笑顔になった。

今日が卒業式で、今日でお別れだなんて、微塵も感じさせない。

そんないつもの光景が目の前にあった。

学校に着いてからも、僕らは廊下で集まっていた。他の生徒たちも、それぞれのグループで集まって色々と話し込んでいる。今日は、話が尽きる事がない。普通の雑談から思い出話になり、もう卒業なんだなあと言う事を改めて実感させられた。

「今日で終わりなんだよな、学校」

折原が、ふとそんな事を言った。

「信じられる？俺未だに実感が沸かないんだけど」

彼は僕らの方に視線を向けながら、苦笑した。

「今日でお別れなんだね、この学校とも」

続けて坂本もそう呟いた。

思い出話に華を咲かせていた僕らの間に、一気に寂しげな空気が流れ込んだ。

「まあまあ、卒業式前からしんみりしない。元気出していかないよ」  
秋乃は坂本の頭を撫でながらそう言った。いつもと逆の構図で、  
面白い絵であった。

「それもそうね。てか折原、あんた泣きそうな顔してるじゃん。大丈夫なの？」

「泣かぬーよ。そんなタマじゃないっての」

馬鹿にするような坂本に、折原は強い口調で言っただけだ。

そして、卒業式が始まった。

厳かに式が進む。僕はその雰囲気の中で、静かに、ゆっくりと自分の記憶を辿っていた。この学校で過ごした記憶。友と過ごした記憶。秋乃と二人で紡いだ記憶。何もかも、僕の中では大切な記憶だ。気がつく、僕の頬を一筋の涙が伝って落ちた。僕は慌てて、その涙を拭いた。誰かに見られたのではないかと、きよろきよろと辺りを見回すと、少し離れた席にいる坂本がこちらに視線を向けていた。泣いてないぞ。そう言わんばかりの視線を坂本に返すと、彼女はそっと微笑んで、再び正面に視線を戻した。

やがて、長かった式は終わった。

教室に戻り、先生の話聞き、その他全ての後始末を終えて、僕は本当に学校での最後の活動を終えた。

「吉岡」

廊下に出てすぐに、坂本が声を掛けて来た。僕が振り返ると、彼女は間髪入れずに、一言こう言った。

「ありがとうね」

「え？何が？」

僕は面食らって聞き返した。

「色々。三年間、楽しかったよ」

彼女は、目に涙を溜めたままそう言った。初めて見る、彼女の表情だった。

「俺もだよ。ありがとう。また四年間、折原と一緒に頑張れよ」

「あはは、頑張りたいくないけど頑張るわ」

坂本はそう言いながら笑顔を見せた。

やがて、最後のホームルームを終えた秋乃と折原も、教室から姿を見せた。その折原の姿を見て、僕は驚いた。

「理央ちゃん、折原君を何とかしてえ・・・」

秋乃は困り果てた顔でそう言った。

折原は泣きに泣きまくって、顔中涙でベチャベチャになっていた。

「ちょ、何なのこの化け物は！ちょっと、しつかりしなさいって」

秋乃から折原を受け取った坂本は、完全に慌てていた。肝心の折原は、声にならない声を発していた。埒が明かないと判断した坂本は、折原を支えながらよたよたとどこかに行ってしまった。

「おい秋乃、あれどうしたんだ・・・」

「式が終わった辺りから、ずっとあんな感じなんだよ」

「折原って実は涙脆かったのか・・・」

「そうみたい」

秋乃は苦笑した。

「あ、そうだ。ちょっと一緒に来てもらっていい？」

「ん？いいよ」

そう言った秋乃が僕と向かった先は、美術室であった。

思ってみれば、僕と秋乃はこの高校生活の中の長い時間を、ずっとこの部屋で過ごしてきた。僕と秋乃にとっては一番の思い出が詰まった場所だと言っても過言ではない。そんな美術室とも今日でお別れかと思うと、何とも言えない思いがこみ上げてきた。

僕は部屋の中をゆっくりと見渡す。僕が初めてこの部屋に来た時と、何も変わっていない。だけど、僕や秋乃は随分と変わったなあ。変わる事が出来たなあ、と僕はしみじみと感じていた。

二人を繋いでくれたこの部屋、二人を成長させてくれたこの部屋。そして、沢山の思い出をくれたこの部屋に、僕は感謝している。

「直人」

ふいに秋乃の声が飛ぶ。ぼんやりと思い出に浸っていた僕は、慌てて彼女の方に振り返った。



「どうしたの？」

少し慌てた僕の様子を見て、秋乃は静かに微笑んだ。そして彼女は、僕を布がかかったままの絵の前に案内した。

「これ、描いてみたんだ」

秋乃はそう言うと、かかっていた布を静かに取り去った。布の下から現れたのは、一枚の絵。そこには、僕が描かれていた。

「これは・・・俺？」

僕の問い掛けに、秋乃は少し照れ臭そうに頷いた。

「記念と言っか、その・・・描きたくなつたから描いたんだ」

秋乃はそう呟いた。

僕は目の前に現れた絵をじっと見つめた。この絵に描かれているのが僕であると言っるのが恥ずかしいくらい、良く描かれていた。

僕はふと、頭に浮かんだ疑問を秋乃にぶつけてみた。

「これ、いつ描いたの？秋乃が絵を描いてる時は、大抵一緒にいたのに」

「見つからないようにこつそりと、ね。前に直人が美術室に来るのを断った時があつたじゃない？あの時、仕上げをしてたんだ」

秋乃はそう言って笑った。

ああ、あの時か。僕はすぐに理解した。あの日、僕が帰り際に見た秋乃の姿は、この絵を仕上げている姿だったのかと僕の記憶に薄っすらと残るシーンと一致した。

それにしても、この絵を見れば見るほど、僕はこんな表情をしていたっけか？そう思うくらいに、絵の中の僕は活き活きとした表情を浮かべていた。この絵をどうしよう？自分の部屋に飾ろうか？自分が描かれた絵を自分の部屋に飾る・・・想像すると何だか違和感を覚えるところもある。でも、これだけは言える。間違いなくこれは僕が一番の宝物だ。

僕は、秋乃との思い出が残る場所で、一番最高の贈り物を受け取ってしまった。

「秋乃」

「ん？」

「嬉しいよ、ありがとう」

僕がそう言うと、秋乃は顔を真っ赤にしながら無言で頷いた。

そんなやり取りをしていると、目を真っ赤に腫らした折原と、呆れ顔の坂本が美術室に入ってきた。

「はいはい、復活しましたよ。ご迷惑をお掛けしました」

「本当にね！」

軽い口調でそんな事を言う折原の頭に、坂本は軽く一撃を加えていた。

「つたく、余りに衝撃的過ぎて貰い泣きどころの話じゃなかったわ」

「あはは、すごかったからねえ」

呆れ顔の坂本に、秋乃は苦笑した。

「僕の事でそんなに争わないで下さい・・・」

「争ってないっての！」

再び折原に坂本の一撃が飛ぶ。最後の最後まで、こんな状況でもバ力をやれる折原に、僕は感心すら覚えた。それと同時に、いつも通りの光景が目の前にあって、少し嬉しかった。

僕らは気が済むまで泣いて、笑って。日が暮れるまで話しに話した。そして、別れの時がやって来た。

「寂しくなるよな。住み慣れたところを離れるってのもさ」

折原が遠くを見つめながらそう言った。

「長い休みの時に戻って来いよ。俺はこっちにいるしさ」

「吉岡、お前も遊びに来いって。ずっと同じところにいるのも、つまらないだろ」

「まあ、それもそうだな。でも折原は坂本と一緒にんだから、ちゃんと仲良くやれよ？」

僕の言葉に折原は黙って頷いた。僕はふとある疑問が沸いて来て、率直に坂本にぶつけてみた。

「なあ坂本」

「ん？」

「あつちでは折原と一緒に住むの？」

僕の素朴な疑問に、折原と坂本はほぼ同時に飲んでいたジュースを嘔き出した。

「んなわけないでしょ！ちゃんと寮があるんだから！！」

坂本は思い切りむせながら、そう叫んだ。

「いや、そういうのもありなのかなって思ってた」

「ありなわけないでしょ！こんなバカとずっと一緒とか数日で気が狂うっての」

坂本は全力で否定した。

「俺は別に、ありでもいいけどな」

必死に否定する坂本をよそに、折原は暢気にそんな事を言った。

「うるさい！」

「・・・はい」

坂本に一喝され、折原は一瞬で小さくなってしまった。

最後の最後まで、二人は賑やかで、そして仲が良かった。そんな姿を見ていると、僕も安心して二人を送り出す事が出来る。色々と言い争っていたものの、結局二人は一緒に、僕と秋乃の前から去って行った。再会する約束と、沢山の思い出だけを残して。

残された僕と秋乃は、お互いに黙ったままだった。最初のその沈黙を破ったのは、秋乃の一言であった。

「寂しくなるな・・・」

秋乃は、俯いていた。

彼女の一言が、僕の決心を一瞬で崩壊させた。笑顔で別れよう。

何の後悔も無い。そう思ったはずなのに、彼女の心の叫びが、僕の弱気な部分を無理矢理に引きずり出した。

「俺も・・・だよ」

二人の言葉は、寒空に静かに消えていった。

居心地の良い場所を離れて、それぞれの道を歩く。簡単なように見えて、何と難しい事だろうかと僕は思った。

頑張れ。そう言いたい。秋乃にも、自分にも。

頑張るしかない。僕も、秋乃も。折原も、坂本も。みんなみんな、同じで、それぞれの世界で生きて行かないといけないんだ。僕は何度も、自分自身に言い聞かせるように、心の中でそう繰り返した。別れの時が迫る。分かっただけはいた事だが、実際にその瞬間が来たとなると、なんとも言えない感情が僕の中にこみ上げてきた。今置かれている状況を理解しているからか、秋乃は俯きながら口を噤んでいた。

僕は静かに、彼女との日々を振り返った。楽しかった日も、涙した日も、まるで昨日の出来事のようにだ。

互いに寄り添い、いつの間にか互いに不可欠な存在になっていた。僕らは、少しずつその世界を融合させ、いつしか二人で一つの世界になっていた。だからこそ、強く思う。いつも、この世界で生きて行きたい。いつも、この世界が目の前であればいいのにと。

僕らは離れ離れになる。だけど、僕らの世界はずっと続いていくだろう。新しい世界にも、二人で歩んでいけるだろう。

だからもう、何の戸惑いも無く言える。

「秋乃」

「うん？」

「向こうでも無理せずに頑張れ。ずっと……一緒だから」

「……うん」

彼女が寂しげな瞳を僕に向ける。きつと、僕も同じ様な顔をしていただける。

「ずっと、一緒に。いつも、この世界で」

「うん」

秋乃は、言いたい事や思っている事の全てを、ただ一つの微笑みに込めて返してくれた。僕も、そつと彼女に微笑み返した。

僕と彼女の世界は、確かに目の前にある。今も、これから、ずっと先も。いつもこの世界で、二人で生きている。僕と彼女が繋いでいるこの手のように、未来まで紡ぎ続けていく。

だから僕は、たった一つだけ願う。

この世界が、ずっとずっと、続きますように。

いつもこのセカイで 完

## あとがき

どうも、でございます。

まず始めに、これまで【いつもこのセカイで】を読んで下さった読者の皆様、本当に有難うございました。

約八カ月に渡り、連載をさせて頂きました。

不定期な連載で、間が長く空いてしまった事もあり、大変申し訳なく思っています。

文章力も、表現力も、何から何まで稚拙で未熟な事もあり、読みにくい部分等も多々あったと思います。そんな中で、作品を完結する事が出来たのは、読者の皆様のおかげだと感じております。

感謝、感激です。

この小説は、説明文に記載してあります通り、ニコニコ動画で楽曲を公開している「もきち」氏の同名楽曲をイメージして文章化した物です。

音楽からストーリーをイメージして小説にする・・・今まで全く取り組んだ事のない方法に戸惑いながらも、無事に完結させる事が出来て、正直ほっとしています。

僕自身、沢山のインスピレーションを与えてくれたもきち氏に、心から感謝しています。彼の楽曲無しには、この作品も生まれなかつたと考えています。

この場をお借りして、お礼を言わせて頂きたいです。ありがとうございます。

実際のストーリーの中では、僕が書きたいと思っていた部分は、大方表現出来たのではないかと感じています。

文章力、表現力のせいでなかなか上手い具合に書きたいシーンが書けない事が多かったですが、それでも大体は想像通りに進める事が出来たと思います。

どこにでもありそうな・・・そんな凸凹な組み合わせと、彼らを取り巻くストーリーと、彼らの今後。展開の想像も容易で、ありふれたストーリーを、あえて書いてみようと思っただけの作品です。彼らを待つ新しい世界については、僕自身が想像している部分はありますが、読者の皆様の想像にお任せして、あえて語らない事にしたいと思います。

彼らは全員、まだスタートラインに立ったばかりです。どんな未来が待ち受けているか、その可能性は一つではないと思うので。

最後になりますが、本当に有難うございました。

それでは、次回作でまたお会い出来れば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9175k/>

---

いつもこのセカイで

2011年1月5日16時11分発行